高野山麓の榧（カヤノキ）をめぐる民俗

藤井弘章

はじめに

筆者は平成中期（一九九〇年代後半）から和歌山県北部の民俗調査をおこなってきた。さまざまなテーマの民俗調査をおこなうなかで、榧に関する語りを聞くことがあった。[1] とくに、年中行事や山村の生業について聞き取りをするなかで、正月に榧の実を供える、榧の実を食べる、榧の油を搾る、などの内容を聞いてきた。しかし、自分自身の問題意識として、榧に注目したことはなく、今からみれば不充分な聞き取りにとどまっていた。

筆者が榧に注目するようになったのは、和歌山県紀美野町の民俗調査をおこなうようになってからであった。和歌山県北部のなかでも、紀美野町では聞き取りの中で榧に関する話が出る頻度が高いと感じるようになった。調査を続けていると、各地で榧の話が出てくるため、しだいに和歌山県北部の山村では、榧の民俗は重要なテーマのひとつであると思うようになった。ただ、榧をテーマとした調査をおこなうには相当の時間と労力がかかることが予想されたため、本格的に取り組むことはできなかった。

平成三一年（二〇一九）に紀美野町のヒダリマキガヤ群が県指定の天然記念物になり、令和四年（二〇二二）には紀美野町の高校生が榧と櫨を用いたハンドクリームを製作したこともあり、筆者も榧の歴史と民俗をまとめておく必要性を感じるようになった。そして、令和四年度に、大学より研究に取り組む時間をいただくことができたため、この機会を用いて和歌山県北部において榧に関する調査を集中的におこなうことにした。その結果、樹木としての榧、榧にまつわる民俗など、膨大なデータを収集することができ、この地域における榧の民俗の全体的な特徴が分かってきた。本稿では、高野山麓における榧に関する聞き取り調査と、榧の木の確認調査を中心として民俗的に考察する。歴史史料を用いた考察や、榧油の搾り機に関する考察、などについてはあらためて別稿で取り上げる予定にしている。

ここで、本稿で用いる高野山麓の定義を示しておきたい。狭義の高野山麓としては、高野山塊の周辺に広がる地域を指す。この場合は、高野町・橋本市（紀ノ川平野部、和泉山脈を除く）・九度山町・かつらぎ町（紀ノ川平野部、和泉山脈を除く）の範囲となる。一方、広義の高野山麓としては、和歌山県北部・奈良県南西部を指す。ただし、本稿では和歌山県北部（伊都地方・那賀地方・海草地方・有田地方）を対象とする。なお、本稿において、広義・狭義の区別なく高野山麓と表記する場合は、広義の範囲を指すこととする。

一　先行研究

植物学や民俗学では、全国的に栃・椎・栗などの民俗をまとめた研究や単行本は多数存在する〔野本　二〇〇五・二〇二〇など〕。しかし、榧に関する単行本は見当たらず、研究も限られているように思われる。[2] 他の植物民俗とともに、榧にまつわる民俗事例が紹介されることはあったが、和歌山県の事例が考察されることはほぼなかったようである。また、植物民俗というアプローチにおいては、全国規模での広域調査、あるいは集落のような重点的調査のいずれ

かが主流であり、高野山麓のように、一定のまとまりのある文化圏を単位とした調査研究はほとんどみられない。

一方、歴史学では和歌山県北部において荘園調査や博物館の調査が盛んにおこなわれてきた。しかし、高野寺領における榧の栽培や年貢に関する情報はごくわずかな記述があるだけとなっている〔早稲田大学大学院海老澤ゼミ　一九九九〕。

また、郷土誌の中には榧に関する記述が見られるものがある。高野山麓では、民話、民俗報告にわずかに榧の事例が散見する。これらは、榧に注目したものではなく、地域の民話や民俗報告のなかで榧のことにもわずかに触れているという程度にとどまっている〔近畿民俗学会　一九八〇、和歌山県民話の会　一九八二・一九八五〕。

昭和後期には、和歌山市立子ども科学館での木の実や搾油に関する調査・展示がおこなわれ、榧の油についても紹介された〔和歌山市立子ども科学館　一九八五〕。しかし、榧をめぐる歴史や民俗への関心は広がりをみせなかった。その後、美里町（現在の紀美野町）では、地域の自然をまとめた冊子のなかで、榧をめぐる歴史と民俗が取り上げられている〔前田　二〇〇五、美里町誌編纂委員会　二〇〇五〕。平成後期には植物研究者が榧に注目し、かつらぎ町（教育委員会および山元晃氏）の榧に関する調査・展示もおこなわれた〔山元　二〇一五〕。平成二三年（二〇一一）には、かつらぎ町のこめ油製造会社社長が中心となり、自身の出身地区（かつらぎ町山崎）が歴史的に榧の恩恵を受けてきたことに感謝して、山崎に榧の木神社を建立し、周辺地域に五百本の榧を植林する取り組みもおこなわれた〔築野　二〇一二〕。

その後、平成二七（二〇一五）～二九年（二〇一七）度にかけて、紀美野町教育委員会によって天然記念物指定に関する調査がおこなわれ、平成三一年（二〇一九）に紀美野町のヒダリマキガヤは県の天然記念物に指定されて、地域の資源であると認識されるようになった〔紀美野町まちづくり推進協議会紀美野史発見部会編　二〇二二〕。また、紀美野町のりら創造芸術高等学校（以下、りら高校）も地域の資源として榧に注目しており、榧と櫨からハンドクリーム（キノミノリ）を制作するようになっている。

このような動きとは関連していないが、筆者は高野山麓の自治体史などの調査のなかで榧の聞き取りをおこない、高野町史、神野真国荘調査報告などへ榧に関する民俗をわずかに記載している〔高野町史編纂委員会　二〇一二、藤井　二〇一四〕。

二　調査方法と調査結果

筆者はこれまで、高野町・かつらぎ町・紀の川市・紀美野町・海南市などにおいて、民俗調査のなかで榧に関する民俗事例についても聞いていた。ただしこれは、意識的に榧の民俗を聞いてきたわけではなく、聞き取りの内容も断片的なものにとどまっていた。そこで、令和四年（二〇二二）から令和五年にかけて、集中的に和歌山県北部の榧をめぐる歴史と民俗を調査した。

調査方法としては、まず、榧の木が多数現存し、民俗的なかかわりも残っていることが予想された紀美野町において、重点的に榧の民俗を調査した。紀美野町では、町の教育委員会、県の海草振興局、りら高校などの協力を得た。とくに、ヒダリマキガヤ群の天然記念物指定時に調査をおこなった社会教育委員の西浦史雄氏に全面的に協力いただいたことにより、紀美野町における調査を効果的かつ円滑に進めることができた。榧のある家を順次訪問し、榧の木を見学し、家の方に聞き取りをおこない、古文書や民具などが残っている場合は拝見した。紀美野町のなかでも、とくに榧が多く残っている毛原地区・国吉地区

を中心に調査した。とくに、毛原中村の庄屋であった前田家の文書には、昭和五年（一九三〇）の「榧ノ木ノ由来」があり、当地における具体的な榧に関するかかわりが記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。このような文書の記載をもとにして、現地で確認調査を進めることもおこなった。

紀美野町における調査と同時に、橋本市・九度山町・高野町・かつらぎ町・紀の川市・有田川町においても榧に関する調査をおこなった。紀美野町と同様、榧がある家を訪問し、榧の木を見学し、家の方に聞き取りをおこない、民具などが残っている場合は拝見した。これらの地域では、かつて何らかの調査で訪問した家を再訪し、そこから地域において榧のある家を紹介してもらう形で進めた。とくに九度山町では教育長の辻正雄氏、かつらぎ町では山元晃氏、紀の川市では土居豊一氏、有田川町では鶴田倫雄氏の協力により、榧がある家を多数紹介いただくことができた。山元晃氏の場合は、植物の研究者であり、榧に関心をもって調査をしてこられた方である。山元氏にご協力いただいたことで、かつらぎ町周辺の榧の所在確認と現地調査を効果的かつ円滑に進めることができた。

調査結果を全体的にまとめたものが表1である。本表は話者ごとに表記した。したがって、榧の木を所有していない家の方も含んでいる。反対に、榧の木の所有者に聞き取りできなかった事例も多い。この場合は、情報提供者名を記している。表1は橋本市・九度山町・高野町・かつらぎ町・紀の川市・紀美野町・有田川町の順に表記した。郡名、市町村名は明治以降の変遷が分かるように表記した。たとえば、紀美野町国吉地区という地名は、現在の地名表記としては現れない。昭和中期まで存在した国吉村の範囲を示す必要があるためにこのような表記を取った。内容については、伝承、榧の木の立地、種類・樹形、呼称・認識、植栽・採取の工夫、実がなる時期、収穫作業、収穫量、実の処理、食べ方、搾油、薬用、蚊除け、儀礼、用材・道具、販売、その他、として分類して表記した。基本的に本稿の構成は表1の内容にしたがって説明している。なお、今回はあくまで歴史民俗学的な考察が中心であったため、植物学な調査（樹種の特定、樹高や実の計測など）は積極的におこなっていない。また、搾油については、あらためて別稿を予定しているため、搾り機の実測などは提示していない。昭和中期以降の伐採・売却については、本稿の課題ではないことと個人情報を含むために簡単な記述にとどめた。

三　榧の植物的な特徴

カヤ（学名：*Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. var. *nucifera*）〔米倉　二〇一二〕はイチイ科カヤ属で常緑の高木である。北限は山形県と宮城県、南限は鹿児島県の屋久島といわれている。側枝は左右に対生し、三叉状に伸び、葉は長皮針形で先端はとげ状になっている。雌雄異株であり、雌花は二個の花が咲き、そのうちの一個が種子となる。四～五月ごろに花が咲き、翌年の一〇月ごろに種子が成熟する〔上原　一九六一、矢頭　一九六四〕。

カヤ属は世界に約七種、日本には一種、三変種一品種あり、変種にはチャボガヤ、ヒダリマキガヤ、コツブガヤ、品種にはハダカガヤが存在するといわれてきた〔矢頭　一九六四〕。これらは、斜上枝の位置、葉や種皮の形態などから区別される（口絵写真1～10）。カヤの実は長さが二～三センチであるが、ヒダリマキガヤ（学名：*Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. var. *nucifera* f. *macrosperma* (Miyoshi) Kusaka）〔米倉　二〇一二〕は種子が大型で長さが三.五～四.五センチ〔山元　二〇一五〕、種皮の縦条が右または左にねじれている。大正時代に植物学者の三好学が滋賀県で発見して、大正一一年（一九二二）に国の天然記念物に指定された〔内務省　一九二二、北村　一九六八〕。

その後、三重県・兵庫県・宮城県・奈良県などでも分布することが分かった〔文部省　一九四三、奈良県教育委員会　一九五六・一九五八〕。

なお、榧に類似したものとして犬榧（イヌガヤ）というものがあり、古い文献や聞き取りでは犬榧は榧の仲間であるといわれることもある（口絵写真11）。しかし、植物学的にはイヌガヤはカヤと異なり、イヌガヤ科イヌガヤ属に分類されてきた〔上原　一九六一など〕。さらに、最近の分子系統にもとづく分類体系では、イヌガヤはイチイ科の一員として取り扱われている〔米倉　二〇一九〕。

和歌山県内には天然記念物に指定されているカヤ、ヒダリマキガヤが存在する。昭和初期の県指定では、現在の橋本市・かつらぎ町・紀の川市・紀美野町において指定されたカヤがあった〔和歌山県　一九二七・一九三〇・一九三五・一九三六・一九三九〕。その後、枯死などで解除されたものもある。現存していても指定が解除されているものもある。昭和後期以降の県指定では紀美野町勝谷の善福寺のカヤ、市町村指定では紀の川市勝神の薬師寺のカヤ、紀の川市垣内の丹生神社のカヤ、有田川町下湯川の個人所有のカヤが指定されている。そして、平成以降の指定においては、紀美野町のヒダリマキガヤ群が指定された。昭和初期に県指定であった橋本市東家の榧は、昭和後期に市指定になったが、倒木の恐れがあるということで、平成期に指定を解除して伐採された（写真5‐1～2）。

紀美野町においては、平成二七（二〇一五）～二九年（二〇一七）度にかけて、紀美野町教育委員会によって天然記念物指定に関する調査がおこなわれた際に、約一九〇本のカヤが確認されている。このうち、ヒダリマキガヤと考えられる個体が二五本判明し、そのほかヒダリマキガヤの可能性が高い個体は二〇本存在したという。[3] この調査を通じて、他府県では珍しい存在であるヒダリマキガヤが、紀美野町では濃密に分布していることが分かったという。なお、天然記念物指定されたのは町内のヒダリマキガヤのうち一三本である（写真3‐1）。また、かつらぎ町教育委員会と山元晃氏の調査によると、かつらぎ町には三〇本のカヤが確認されている。[4] しかしながら、和歌山県全域にわたってのカヤの分布について、今のところ詳細な報告はみられない。これまで山元晃氏が紀美野町以外でヒダリマキガヤを確認していたのは橋本市清水・同市西畑のみであった。なお、紀美野町中田には、平成二一年（二〇〇九）に指定された学術推せん樹のカヤもある。

筆者は高野山麓の榧の民俗について把握するため、これまでカヤの調査を進めてきた紀美野町教育委員会および西浦史雄氏、かつらぎ町教育委員会および山元晃氏にご教示いただき、また周辺市町村でも榧の分布について確認を進めた。その結果、和歌山県北部においてカヤは、橋本市・九度山町・高野町・かつらぎ町・紀の川市・紀美野町・海南市・有田川町の山間部に分布していることが分かってきた。

和歌山県北部におけるカヤの分布は全体的にいえば、山間部に多く、平野部には少ないといえる。山元晃氏によると、和歌山市ではカヤの大木は確認されていないという。日高郡以南の県南部にもカヤは分布するが、多くないようである。[5] 一方、ヒダリマキガヤは和歌山県では紀美野町の山間部、と

写真3-1　紀美野町のヒダリマキガヤ看板（坂家のヒダリマキガヤの前、2022年10月14日）

くに町域東部の毛原地区・国吉地区に濃密に分布することが分かる。植物学的に確認はできていないが、六章で述べるように「左巻」という呼称が伝わっていること、および筆者が実の形や樹形などを見た限りでは、ヒダリマキガヤは有田川町旧清水町に多く分布しているようであり、橋本市（紀ノ川南岸）、かつらぎ町花園地区、紀の川市鞆渕地区などに点在していると考えられる。今後、植物学的な確認作業が必要となるが、山元晃氏によるとヒダリマキガヤの中でも実の大きさに差異があるといい、特定するのは難しいようである。

ところで、植物学的にはヒダリマキガヤは大正時代に三好学が滋賀県で発見したとされているが、高野山麓では江戸時代から同様の呼称が確認できる。文政八年（一八一五）の『十寸穂の薄』には那賀郡の産物として「左巻榧　野上」という記述がある〔堀内　一九三二〕。野上という地域は、紀美野町西部にあたる。現状、江戸時代の野上荘地域にはカヤ、ヒダリマキガヤともにほとんど残っていないが、近現代の野上町地域の小川地区にはヒダリマキガヤが現存しているため、この周辺でも「左巻榧」と呼ばれていた可能性がある。また、天保一〇年（一八三九）に完成した『紀伊続風土記』「巻四十一　那賀郡猿川荘猿河谷村」には「村中左巻の榧多し」とある〔仁井田　一九一〇a〕。猿河谷村とは、現在の紀美野町国吉地区（旧猿川村）の谷集落である（写真3‐2）。現在でもヒダリマキガヤが多い地域である。嘉永五年（一八五二）の畔田翠山の『野山草木通志』には、名称は書かれていないものの「其実長短ノ数種アリ」とし、「榧ハ高野山下波瀬山谷合抱ノ大樹多シ」と記述されている〔安田　二〇〇一〕。「合抱ノ大樹」とは、口絵写真60のように樹幹がからみあっている樹形の榧を指しているのではないかと推測できる。樹形からだけでは判断できないが、これはヒダリマキガヤのことを指している可能性もある。

このほか、『十寸穂の薄』には伊都郡の産物として「白榧（はくがや）　高野」〔堀内　一九三二〕、『紀伊続風土記』「巻四十　那賀郡小川荘中田村」には「村中榧の名産あり白榧といふ其実甘膚殻に著てむきたるやうなり渋気も少し」という記述もある〔仁井田　一九一〇a〕（写真3‐3）。これは、六章で述べるように、ハクマイガヤなどと呼ばれるものと思われる。なお、四章、六章で紹介するように、伝承や民俗知識としては、渋がない榧ということは重要視されているものの、植物学的にはハクマイガヤ、シブナシガヤというものは変種として認められていない。

写真3-2　谷の集落（紀美野町谷、2015年8月10日）

写真3-3　中田の集落（紀美野町中田、2022年9月30日）

四　榧に関する伝承

『紀伊続風土記』には、弘法大師が「榧蒔石」という巨岩の上から榧の種を蒔いたという伝承が記されている。同書の「高野山之部　総分方巻十六　伊都郡三谷荘山崎村」の部分には、「高野山より慈尊院への往来にして町石を建つ

写真 4-1　榧蒔石（かつらぎ町山崎、2023 年 1 月 16 日）

写真 4-2　山崎の集落（2023 年 2 月 6 日）

村中榧実を産物とす」「榧蒔石　高野山より慈尊院への往還にあり大師高野山油の用に此石の上より榧を蒔給ふとて今に村中余木少なく榧樹多し」とあり〔仁井田　一九一〇 c〕、同書の「巻五十　伊都郡官省符荘山崎村」の部分には、「榧蒔石　天野街道の傍にあり弘法大師榧を此石上より蒔しといひ傳へたり」と記載されている〔仁井田　一九一〇 b〕。弘法大師が、高野山で使用する油を取るために榧の木を、高野山麓の山崎村に植えた、という。かつらぎ町山崎には、現在でも町石道沿いに榧蒔石が存在している（写真 4 - 1）。紀ノ川平野より紀伊山地の北端斜面を一気に登り切ったあたりに榧蒔石があり、榧蒔石および町石道より下に、山崎の集落と背後に紀ノ川平野が広がる。現在の山崎のほか周辺の集落でも、この話は知られているという（写真 4 - 2）。弘法大師が榧を植えたため、山崎には榧の木が多かったといわれている。山崎出身で、こめ油製造会社を設立した築野政次氏は、こうした伝承をふまえて、山崎に二つの榧の木神社を創建し、町石道周辺に榧を植えている〔築野　二〇一二〕（写真 4 - 3～4）。

写真 4-3　榧の木神社（上）（かつらぎ町山崎、2023 年 1 月 16 日）

写真 4-4　町石道に植林した榧（4-1 に同じ）

聞き取り調査では、類似した伝承として、弘法大師が高野山に行くときに「植えもて（植えながら）行った」、という伝承を確認した（紀美野町松ヶ峰の峯尾弘子氏）。「高野山が榧を作れと奨励したらしい」（紀美野町長谷宮の大和公明氏）、「高野山から榧の木を切んなと、高野山のえらい坊さんから命令がきたという」（紀美野町毛原宮の奥澤氏）、などという語りもある。以上のように、高野山麓一帯では、弘法大師および高野山が榧の木を広め、伐採を制限していた、という伝承がみられる。

また、榧の油を高野山で灯明の油として重宝した、という語りは、筆者の調査では多くの人々が語った。榧の油は凍らない、冬の高野山は寒いので榧の油を灯明に使った、榧（油）は高野山に年貢として納めた、といった内容であ

る。高野山麓で広く確認できたが、とくに紀美野町の毛原地区・国吉地区で語る人が多かった。具体的な榧油の搾油や消費に関しては、九章であらためて取り上げる。

弘法大師が、榧の渋をなくしてくれた、という言い伝えもある。和歌山県民話の会の報告には、九度山町河根の西保太郎（明治三三年生まれ）が語ったという以下のような伝承が記載されている〔和歌山県民話の会　一九八二〕。

かやの実取ってたらお大師さんが通りかかって、一つくれと言うた。こりゃさし上げたいけど、じまくさい（じゃまくさい）しぶ取らんなんね、て言うたら、そうか、そいじゃ、しぶ取らいでもええようにしたらよ、て言うてしてくれたていう。

筆者の調査では、河根に隣接する東郷（九度山町）に渋のない榧があると語る話者がいた。渋のない榧は珍しいものであるため、河根の西保太郎が語った渋のない榧は、筆者が聞いた東郷の榧を指している可能性がある。

このほか、天狗にまつわる伝承もある。近畿民俗学会、および和歌山県民話の会の報告には、かつらぎ町下天野の山中家の榧に天狗が住んでいたという伝承が記載されている〔近畿民俗学会　一九八〇、和歌山県民話の会　一九八二〕。とくに、和歌山県民話の会の報告には、山中家の榧に住んでいた天狗が、星山峠まで綱を引いて渡った、などと記されている。話者の一人である北遠太郎は、山中家の隣の家であり、北家にも大きな榧が存在している。山中家はかつらぎ町星山から星山峠を越えて天野の盆地に入ったところに位置している。筆者が確認したところ、山中家には四本の榧が家の背後（北側）に並んで植えられており、杉などとともに屋敷を覆っている（口絵写真30、写真4‐5）。高野山の地主神である丹生都比売神社が鎮座する天野地区は修験道とのかかわりが深かったため、天狗に関する伝承が語られた可能性もある。

写真 4-5　山中家の榧（かつらぎ町下天野、2023 年 1 月 16 日）

さらに、筆者の聞き取りでは、最も多くの方が語ったのは、「植えるあほうに切るあほう」という言い伝えであった。[6] この伝承の理由としては、「榧の木は成長が遅い。生えてきてから三〇年ぐらいたたないと実がならない。材として伐採するには五〇〇年～六〇〇年たたないと使い物にならない。自分の代で収入にならない」などというようなことが語られる。また、枝が地面につくと千年たっている（紀美野町円明寺の上北氏）、三〇〇年ほどたたないと枝が下へつかない（かつらぎ町花園久木の朝本氏）、などと語られる。この伝承については、植物としての榧に関する知識でもあるため、六章であらためて触れる。榧や樅は棺桶になる木なので、民家に植えるものではない、という言い伝えもあるが（高野町西富貴の井阪氏）、筆者の調査では富貴地区以外でこの伝承は確認できなかった。

このほか、カヤノキという名称は、家の姓（橋本市賢堂の栢木家）、家の通称（紀の川市重行）、地名（かつらぎ町東谷）などにも使用されている。

五　榧の立地

1．全体的な傾向

和歌山県北部における榧の分布は、三章で述べたように、山間部に多く、平野部には少ない。より詳細にいえば、紀ノ川南岸の紀伊山地のなかで、紀ノ川・真国川・貴志川・有田川の上中流域の山間部に多く分布するようである。ただし、和泉山脈に位置するかつらぎ町四郷などにも榧が分布する。このような榧の分布は、気温・地質のほかに歴史的な背景も関係していると考えられる。ただし、紀ノ川北岸、有田川流域にもみられることから、江戸時代の高野寺領よりも広い範囲で分布がみられることになる。

また、紀伊山地の上中流域の山間部においても、均質に分布するわけではない。榧の本数は集落によっても異なり、また、家によっても異なっていた。集落ごとの榧の本数については、昭和初期には集落全体で十数本の榧があれば多いほうであったという。たとえば、有田川町下湯川では集落全体で一五・六本、かつらぎ町花園久木では集落全体で五本であったという。ただし、歴史的にも推移があるようで、かつては榧の木がたくさんあったが、伐採してしまったために今はない、というような語りもしばしば聞いた。したがって、現状の榧の本数や、古老の記憶だけで、榧の歴史的な変遷が分かるわけではないことは注意しておく必要がある。

筆者が確認できた範囲では、最も榧が多かった集落は、かつらぎ町山崎であった。かつては一〇〇〇本ほどの榧があり、昭和初期にも一〇〇本ほどあったという〔築野　二〇一二〕。大原茂明氏の母は、山崎の人が紀ノ川筋の町へ降りたとき、榧の匂いが衣服にしみついているから山崎の人だと分かる、といわれたと語っていたという。それほど、山崎の集落には榧の木が多く、榧の実の匂いがあふれていたと思われる。ただし、昭和中期以降は伐採が進み、現在では集落全体で数本となっている。江戸時代に榧が多かったという長谷地区（現在の紀美野町長谷宮・かつらぎ町新城）では〔安田　二〇〇一〕、聞き取りにおいては隣接する紀美野町毛原地区ほど榧は多くなかったと語られる。紀ノ川北岸においては、かつらぎ町四郷地区に榧が多数確認される。また、文化七年（一八一〇）の『山保田続風土記』では、旧清水町（現在の有田川町）のうち、日物川村・三田村・板尾村・杉野原村・楠本村・沼村の産物として榧があげられている〔清水町誌編さん委員会　一九八二〕。しかし、現状を確認すると、楠本・沼では榧は多数残っているものの、他の集落では決して多くはない。

2．榧の立地に関する文献

榧の立地に関しては、次のような文献に記述がある。和歌山県の植物民俗を研究した小川由一は、「紀伊高野山植物誌」のなかで「下部地帯の民有林」の特徴として、次のように述べている〔小川　一九五八〕。

> 実から良質の油がとれるのみならず、根張りが強く、崩れ止めの効が多いといわれ、屋敷の付近に植える風があるので、ところどころに、その立派な大木が見られる。去る昭和28年の夏・秋両度の大豪雨禍の際にも、竹林やカヤの大木によって、土地の崩壊や流失の災厄をまぬがれた実例が少くはない。

ここで述べられている高野山塊の下部地帯について、小川自身は範囲を記述しておらず、詳細な集落名などは不明である。ただし、文章全体から判断すると、現在の高野町・九度山町（平野部除く）・かつらぎ町（平野部除く）を対

象としているようである。高野山の南側に位置する花園村（現在のかつらぎ町花園）では、和歌山県民話の会によって榧に関する語りが記録されている〔和歌山県民話の会　一九八五〕。

この家の榧の木がね、八百年から千二百年位たっとるて、廻りは六、七メートルあまりあるんや、昔からかやの木は一回地に着いたら千年ていうけどね。どこの家にもね、五本も六本もあって、ワシら小さい時分でも、二本も三本も切ったんよ。覚えてるさかね。どっと昔はね、榧の実を絞ってかや油をとったんやな。食糧にもなるし。灯火の代りにね、カワラケへ灯心つけてね、ランプの時に。ワシらも子供の時にようランプつけさされた。その為にかやの木植えたんやな。一番古いて、皆見に来るわ。（後略）

これは、花園村梁瀬の滝谷（現在のかつらぎ町花園梁瀬）の久保多喜男氏（大正一〇年生まれ）から聞いたものであり、現在でも久保家には榧の大木が存在している（口絵写真1、34、写真6‐8）。現在では久保家には榧の巨木は一本であり、周辺の家にも榧は存在しない。しかし、久保多喜男氏の語りから判断すると、久保家および周辺にも昭和初期までは榧が複数存在していたようである。

3．榧の立地の分類

筆者も高野山周辺において、2節の文献と似たような榧の立地に関する語りを聞いていた。高野町上湯川の西浦孝氏は以下のように語った。

榧、サトガキはどこの家にも必ず一本ずつ植えていた。風除けもかねている。榧は根もかなり張っている。

現在、西浦家には家の背後の斜面に榧が一本ある（写真5‐19）。西浦家の隣の西岡家（西浦孝氏の実家）にはさらに大きな榧が家の背後の斜面に立っている（写真5‐17～18）。西浦氏の語りからは、榧は食料、防風、土砂崩れ防止、などの意味で、上湯川の周辺では植えている家が多いという。一方で、同じく高野町の富貴地区の場合は、寺院・神社などに榧があるものの、民家にはほぼ存在しない。富貴地区では、四章で述べたように、榧は民家に植えるものではないといわれているという。富貴地区の場合は、平地が広がっており、田畑の耕作面積が多い〔高野町史編纂委員会　二〇一二〕。したがって、榧の食料、防風、土砂崩れ防止などでの必要性は、周辺集落に比べると乏しかったようである。

このような個別の事情は存在するものの、筆者が確認してきたところでは、狭義の高野山麓の集落においては家屋敷の周囲の斜面に榧が存在する事例が非常に多い。広義の高野山麓においても同じような傾向が認められる。そこで、筆者の観察結果にもとづいて、広義の高野山麓における榧の立地場所の全体的な傾向を示すと、①家の周囲（口絵写真1、2、18～21、28～31、34～35、37、41～42、46、48～50、53～54、58～60、62、64～71、写真5‐1～2、5‐4～5、5‐7、5‐17～19、5‐21、5‐24、5‐26、5‐29、5‐35、5‐44～45、5‐49、5‐54、5‐58、5‐60、5‐63～66など）、②里地・里山（口絵写真38～40、43～45、47、55、63、写真5‐14、5‐25、5‐46～47、5‐61など）、③山林（写真5‐16）、④神社・寺院・小祠（口絵写真22～23、25～27、56、写真5‐3、5‐6、5‐11～12、5‐15、5‐20、5‐22、5‐28、5‐32、5‐36、5‐38、5‐56）、に大別でき、このほか⑤道沿い

写真 5-1　堀江家の榧（西から望む）（橋本市教育委員会提供、2004 年）

写真 5-2　伐採した堀江家の榧（5-1 に同じ）

写真 5-3　山王大権現（橋本市恋野、2023 年 11 月 2 日）

写真 5-4　福井家の榧（橋本市須河、2023 年 11 月 2 日）

写真 5-5　吉岡家の榧（橋本市赤塚、2023 年 11 月 2 日）

写真 5-6　定福寺付近の黒河道沿いの榧（橋本市賢堂、2023 年 3 月 13 日）

写真 5-7　栢木家の榧（橋本市賢堂、2023 年 3 月 13 日）

写真 5-8　海堀家の榧（九度山町入郷、2023 年 2 月 1 日）

写真 5-9　谷口家の榧跡（九度山町椎出、2023 年 3 月 13 日）

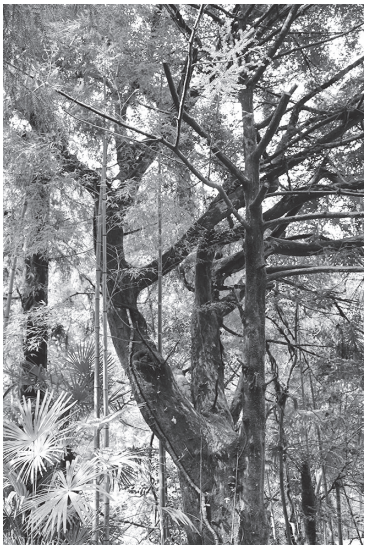


写真 5-10　椎出（横手垣内）の榧（九度山町椎出、2023 年 3 月 13 日）

写真 5-11　宝蔵院の榧（手前にある最も大きな榧）（高野町東富貴、2023 年 9 月 5 日）

写真 5-12　丹生神社の榧（高野町西富貴、2023 年 9 月 5 日）

写真 5-13　杖ヶ藪の集落（高野町杖ヶ藪、2010 年 11 月 26 日）

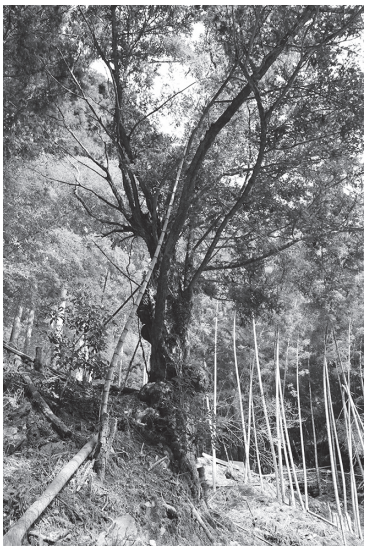


写真 5-14　西辻家の榧(高野町杖ヶ藪、2023 年 3 月 10 日)

写真 5-15　八坂神社の榧（高野町南、2023 年 3 月 10 日）

写真 5-16　高野山の榧（高野町高野山、2023 年 3 月 3 日）

写真 5-17　西岡家の榧（高野町上湯川、2023 年 2 月 24 日）

（口絵写真24、写真5 - 6、5 - 9、5 - 31、5 - 35、5 - 42、5 - 52など）、⑥墓地（口絵写真36、49、61、写真5 - 39、5 - 43など）、という分類もできる。これはあくまで便宜的に分類したものであり、明確に区別できるものばかりではない。①のなかには、a家の建物を覆うように榧の枝が張って自家の庭に実が落ちるという事例と、b家の周囲ではあるが建物からはやや離れた場所（屋敷の入り口、家の前の斜面、家の背後の斜面など）に榧があって実は山に落ちるという事例がある。②のなかには、a家から歩いて数分の距離に榧がある事例と、b歩いて一〇分以上かかる場所に榧がある事例がある。この事例には、平地の場合と山の場合があるため、分類上は里地・里山という名称にした。③は個人の山ではなく、人里離れた山林に立地しているものを区別した。⑤⑥については、①家周辺で⑤道沿いに立地している、①家周辺で⑥墓地に立地している、などというような事例も存在しており、必ずしも独立した分類ではないが、榧の立地の特徴を示すために提示した。表1の「木の立地」には、この分類番号も付して傾向が把握しやすいようにして

写真 5-18　5-17 に同じ

写真 5-19　西浦家の榧（高野町上湯川、2023年2月24日）

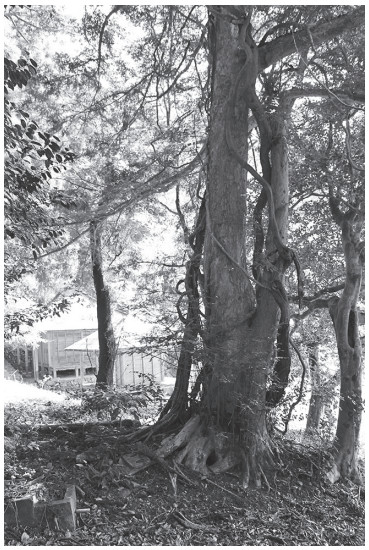


写真 5-20　正楽寺・若宮八幡神社入り口の榧（かつらぎ町東谷、2023年11月2日）

写真 5-21　岡井家の榧（かつらぎ町東谷、2023 年 8 月 24 日）

写真 5-22　大宮神社の榧（かつらぎ町東谷、2023 年 8 月 24 日）

写真 5-23　山崎の榧（かつらぎ町山崎、2023 年 1 月 16 日）

いる。

表1および、写真によって分かるように、高野山麓における榧の立地は、多くの事例が①に分類される。榧は山にはない、個人の屋敷に多かった、と語る人もいる（紀の川市上鞆渕の向竹氏など）。山村集落に暮らし、山林関係の仕事をしてきた人々がこのように語る意味は大きい。榧は家や集落近くに植え育ててきたという歴史が推測できる。

家周辺に榧がある事例では、先述したように、a家の建物を覆うような大木が立っている場合と、b家からやや離れた周囲に立っている場合がある。本稿ではいずれも①として分類した。橋本市西畑の岡本正則氏は、榧はどの家でも同じような場所にある、榧は風除けや土砂崩れ防止に植わっている、と語る。西畑の場合は、地形的に防風の意識が高かったようである。同市須河の福井家では、業者が榧の木を買いに来たが、伐採されると「屋敷がすべる」、といって売らなかったという。か

写真 5-24　前岡家の榧跡（かつらぎ町教良寺、2023 年 2 月 6 日）

写真 5-25　前岡家の榧（かつらぎ町教良寺、2023 年 2 月 6 日）

写真 5-26　南家の榧（かつらぎ町平沼田、2023 年 9 月 5 日）

写真 5-27　上野家の榧（かつらぎ町下天野、2023 年 1 月 16 日）

写真 5-28　常福寺・星山集会所の榧（かつらぎ町星山、2023 年 1 月 16 日）

写真 5-29　南家入り口の榧（かつらぎ町志賀、2023 年 8 月 28 日）

つらぎ町の堀越観音では、庫裏の手前にある榧の根は、庫裏の反対側（山側）まで伸びているという。かつらぎ町花園梁瀬の久保和子氏の場合は、榧は日よけ、風除けになっている、と語る。明確に語られた方は多くなかったが、榧の立地から考えれば、その家の風除け、日よけ、土砂崩れ防止、などの効果も期待して、その家の人々は大木に育ってきた榧をあえて伐採せずに残してきたと思われる。

家の周辺に榧があるのは、榧の実を拾いやすいという意味合いも大きい。七章で取り上げるように、榧の実拾いは農繁期と重なり、負担の大きな作業であった。大量の実を落とす榧の大木が家に近くにあることは、その家の者にとって大いに負担軽減になったと思われる。

さらに、家の守り神的な存在と考えていた場合もみられ、榧の木の下に祠を祀っている家もある（紀美野町滝ノ川の上中家、同町東野の伊南家）（口絵写真48、57）。かつらぎ町下天野の北家

写真 5-30　前浦家の榧（かつらぎ町新城、2023 年 8 月 14 日）

写真 5-31　高野街道沿いの榧（かつらぎ町新城、2023 年 8 月 14 日）

写真 5-32　勝神神社のカヤ（紀の川市勝神、2023 年 8 月 28 日）

写真 5-33　庵上家の榧（紀の川市上鞆渕、2023 年 3 月 10 日）

写真 5-34　日高の榧（紀の川市上鞆渕、2023 年 2 月 20 日）

では、家の丑寅に榧の大木があるために、伐採しないほうがいいと言われてきた（口絵写真28～29）。

②のように、家よりもやや離れた里地・里山と呼べるような場所に榧が立地している事例もある。家から歩いて数分の距離に榧がある場合と、歩いて一〇分以上かかる場所に榧がある場合がある。本稿ではこれらをまとめて②として分類した。田畑の岸に榧があったという事例もあった。しかし、榧が大木になった場合、田畑が陰になって農作物のできが悪くなるといって伐採することもあった（かつらぎ町教良寺の前岡家など）（写真5‐24）。したがって、現状では田畑の岸に榧の大木は少ない。なお、前岡家の事例は、家の周囲であるため、①に位置づけておいた。

人家周辺の棕櫚山の上などに榧が立地している事例もある。紀美野町、有田川町においては、榧がある山は昭和初期から中期には棕櫚山が多かったという。家の背後の山に、棕櫚と榧、あるいは櫨・肉桂・山椒などが混在していた（口絵写真45）。これも、土砂崩れ防止の意味と、少しでも実を拾いやすい場所を選んで植えているということが考えられる。また、このような立地は、他の栽培植物の妨げにならない場所を選んで榧を植えているということもできる。なお、中谷家の事例は、家の背後であるため、①に位置づけておいた。

紀美野町毛原中の神崎家の場合は、①のように家周辺のみならず、②に位置づけられる場所に榧が点在していた。

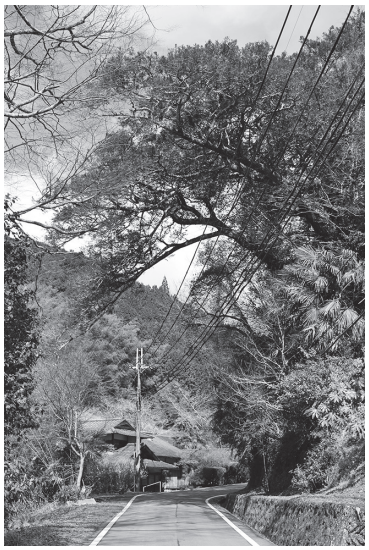


写真 5-35　大谷家の榧（紀の川市上鞆渕、2023 年 2 月 20 日）

写真 5-36　阿弥陀堂の榧（紀の川市中鞆渕、2023 年 1 月 13 日）

神崎家の榧があった場所を具体的に示すと、家より上流の貴志川沿い、家より下流の貴志川沿い、貴志川対岸の畑の端、貴志川対岸の自家の山、などであった。神崎家の事例は、次節であらためて取り上げる。とくに榧が集中している場所のことを、「榧山」（かつらぎ町花園久木）、「榧の木の原」（紀美野町箕六の中谷家）（口絵写真55）などと呼ぶ人もいる。

家から離れた山林に榧を植えた場合、七章で述べるように実を拾って帰るのは大変な作業であった。それでも家から離れた山林に榧を植えた理由としては、多数の榧を植栽できるという意味だけではなく、成長した榧の木によって家や畑が陰になることを避けたいという事情もあったようである。たとえば、高野町杖ヶ藪では、集落の下（集落と川との間）に複数の榧があった。杖ヶ藪の場合は、山林を切り開いて家々が密集し、家々の間に急傾斜の畑が広がっている（写真5‐13）。このため、家の周囲に木があると陰になるといい、榧に限らず大木は少ない。

③の山林というのは、人里離れた山林であり、山林業関係者が行くような場所のことを指している。聞き取りによれば、このような山林には大木の榧はほとんどないという。自生している榧は山林にもあるというが、実は少ないなどと語られる。なお、高野山には、寺院周辺のみならず、山林にも榧はわずかである。高野山の山に詳しい下勝巳氏は、高野山で榧の大木は見たことがなく、榧よりも、樅、栂（トガ、ツガ）など、高野六木といわれる木のほうが多いと語る。高野山の山林で榧があるのは一か所ぐらいであるといい（写真5‐16）、奥之院周辺の摩尼山でも樅、栂（トガ、ツガ）はたくさんあるが、榧はないという。

④のように、高野山麓では神社・寺院・小祠などに榧がある事例も多数ある。ただし、個人の家にある①の事例に比べると事例数としては少ない。高野山麓の神社・寺院では神木として榧が存在すると語られているものはない。全体的な傾向としては、紀ノ川、真国川流域に多く、貴志川、有田川流域では少ないようである。一方で、十二章で述べるように、社寺の境内（山）にある榧は寺社用材として伐採されることがあった。このため、現存している大木が少ないという事情もあると考えられる。なお、高野山の寺院周辺には現状では榧はほとんどみられず〔小川　一九五八など〕、円通律寺の榧ぐらいであるという〔亀岡　二〇〇九〕。

⑤のように榧は道沿いに立地している事例もある。各方面から高野山へと向かう高野街道沿いにも多数立地している。現状では、黒河道沿い（口絵写真19、写真5‐6）、麻生津道沿い（口絵写真36）、紀美野町方面からの高野街道沿い（写真5‐31）、および集落間の街道（写真5‐42、5‐52）にもある。

写真 5-37　面家家の榧跡（榧跡の下の家は面家家ではない。面家家は本家・分家ともにやや離れた場所に位置している）（紀の川市下鞆渕、2023 年 1 月 13 日）

写真 5-38　丹生神社のカヤ（紀の川市桃山町垣内、2015 年 8 月 12 日）

写真 5-39　奥澤家の榧（紀美野町毛原宮、2022 年 10 月 3 日）

写真 5-40　角岡家の榧（紀美野町毛原宮、2022 年 11 月 7 日）

写真 5-41　界西の井上家（紀美野町毛原宮、2022 年 10 月 31 日）

写真 5-42　井上家周辺に残る榧の株（2023 年 8 月 14 日）

写真 5-43　毛原中の共同墓地の榧（紀美野町毛原中、2022 年 11 月 7 日）

写真 5-44　松上家の榧（紀美野町毛原中、2023 年 1 月 4 日）

写真 5-45　神崎家の榧（紀美野町毛原中、2023 年 1 月 4 日）

写真 5-46　神崎家の榧（家より貴志川下流）（紀美野町毛原中、2023 年 1 月 4 日）

平安時代からの高野街道である町石道沿いでは、かつらぎ町山崎の榧蒔石があり、近年に榧が植林されたが、大木は残っていない。町石道沿いでは、高野町花坂（矢立）から高野山の大門に至る途中の山道に榧が複数みられる。ただし、大木はなく、直径一メートル未満の木および幼木である（口絵写真24）。これは、実を拾う目的よりも、伝承や信仰的な意味合いで残されてきた可能性が高い。路傍の巨樹が道標になってきた事例は各地の存在しているため〔野本　一九九四〕、高野山麓においては榧の大木が地域の人々や旅人の目印になっていたことが分かる。

ところで、現在の道は必ずしも旧道に沿ってつけられたわけではない。むしろ、車道が榧の木の横につけられたため、伐採されることもあった。枝を切るなどして、樹勢が弱っていると思われる榧も見受けられる。本来、街道沿いにある榧は目印になっていたのではないかと思われる。道沿いにある（あった）榧の大木は、周辺の人々にとってよく認識されている。なお、榧の大木は、現在のように山に植林が進んだ時代でも、山の対面や隣接する集落などから見える[7]（口絵写真15～16）。昭和中期までは杉・檜の植林が進んでおらず、山の見通しもよかったため、現在よりも集落や家の目印になっていたと考えられる。

⑥のように榧が墓地にある事例もある。個人の家の墓地や共同墓地に存在する。①屋敷周辺の墓地に榧があるという事例もある。

写真 5-47　神崎家の榧の山（紀美野町毛原中、2023 年 1 月 4 日）

写真 5-48　美野家の榧（紀美野町毛原下、2022 年 10 月 31 日）

写真 5-49　西前家の榧（紀美野町滝ノ川、2022 年 10 月 14 日）

写真 5-50　浦家の榧（伐採した榧の横から幼木が生えている）（紀美野町谷、2015 年 8 月 10 日）

写真 5-51　谷田家の榧跡（榧の株がみえる）（紀美野町谷、2022 年 10 月 14 日）

写真 5-52　森本家の榧（紀美野町谷、2015 年 8 月 12 日）

写真 5-53　東家の榧（紀美野町鎌滝、2022 年 9 月 22 日）

写真 5-54　前西家の榧（紀美野町津川、2022 年 11 月 11 日）

写真 5-55　林家の榧（紀美野町上ヶ井、2022 年 12 月 9 日）

写真 5-56　善福寺のカヤ（紀美野町勝谷、2013 年 7 月 19 日）

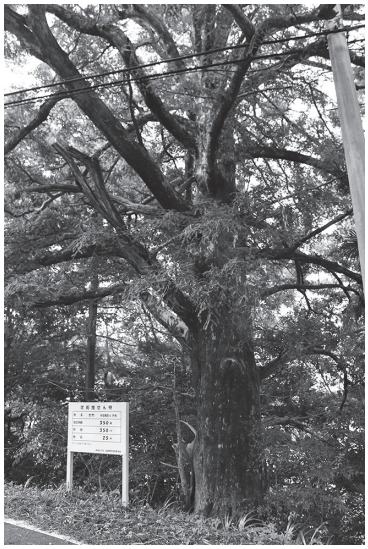


写真 5-57　尾形家のカヤ（紀美野町中田、2022 年 9 月 30 日）

写真 5-58　松浦家の榧（有田川町杉野原、2022 年 12 月 22 日）

写真 5-59　杉浦家の榧（有田川町板 尾、2022 年 12 月 22 日）

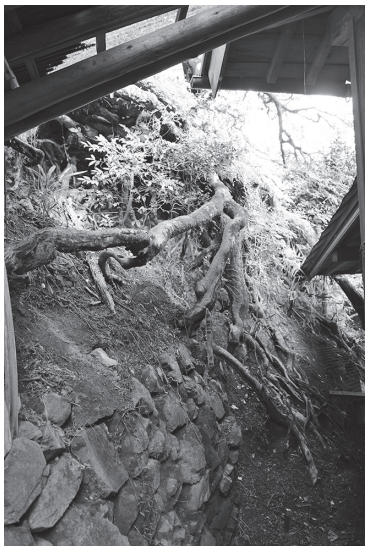


写真 5-60　大久保家の榧の根（有田川町下湯川、2022 年 6 月 23 日）

写真 5-61　西岡家の榧跡（有田川町三田、2023 年 2 月 27 日）

4．紀美野町毛原地区における榧の立地

筆者の調査によると、紀美野町毛原地区は隣接する同町国吉地区とともに、歴史的にも榧が多く、現在も榧が多数残っている地域である。毛原中の前田家文書の『万記録』に記載されている「榧ノ木ノ由来」には、「明治十年頃迄当毛原地ハ栢ノ実戸毎ニ二三石位アリ」「当地ハ栢ノ本場トモ言ハレシナリ」「栢木齢五六百年老木ハ一千年以上毛原宮ノ界西ニ井ノ上ト言フ家ニ回リ三丈ノ木アツテ高野寺領内ノ大木ト言伝ヘアリ」とある〔紀美野町美里町誌編纂委員会 二〇〇七〕。毛原地区では、明治初年までは家ごとに榧の木が多く、樹齢五〇〇～六〇〇年、千年以上の老木もあり、なかには毛原宮の井上家のように幹周が九メートルもあるような大木があった、という。現在、毛原宮（界西）の井上家で確認すると、この記述に該当する榧の大木は残っていない。ただし、家の前に雌雄一本ずつの榧が現存しているほか（口絵写真41）、周辺の山には大きな榧の株が複数残っており、幹周が九メートル近くあったと推定できそうな株もみられる。とくに大きな株は、勝谷から界西を通り、毛原宮中心部へ降りていく道沿いに残っている（写真5‐42）。

また、明治八年（一八五七）の「物産取調書」には、毛原地区の毛原下村（紀美野町毛原下）・毛原中村（同町毛原中）、国吉地区の谷村（同町谷）などで榧の収穫量が多かったことが記載されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会 二〇一二〕。毛原地区・国吉地区では現在でもカヤ、ヒダリマキガヤともに多数存在している。

このように榧が多く存在した毛原地区・同町国吉地区では、数本程度の榧を所有する家が複数あった。毛原中の前田家に伝わる「榧ノ木ノ由来」には、「毛原下ノ作嶋トイフ家ニ豊作年ニハ五十石余モアツタト言コトデス」と記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会 二〇〇七〕。毛原下（石ヶ峰）の作嶋家および大家家で確認したところ、昭和二〇年代までそれぞれの家で二〇本以上の榧があった（口絵写真47）。作嶋家、大家家ともに、毛原下の集落のなかでも、最も高い位置にある石ヶ峰という班に所属していた。両家ともに、当地で一三代医者を続けたという式地家の分かれであるといい、周辺にまとまっ

写真 5-62　永尾家の榧（有田川町宮川、2023 年 2 月 27 日）

写真 5-63　橋本家の榧（有田川町楠本、2023 年 1 月 19 日）

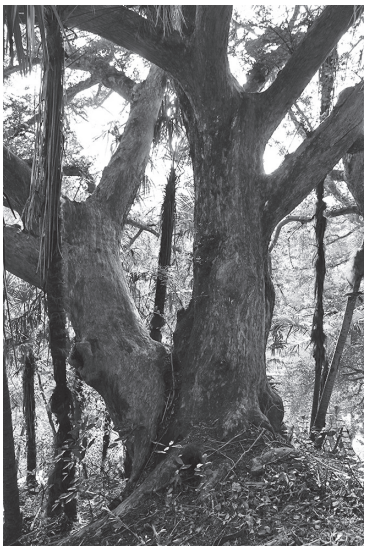


写真 5-64　神崎家の榧（有田川町日物川、2023 年 1 月 19 日）

写真 5-65　脇坂家の榧（有田川町東大谷、2023 年 12 月 19 日）

写真 5-66　井上家の榧（有田川町東大谷、2022 年 12 月 19 日）

た山林を所有している。現在の当主の作嶋好司氏によると、数代前の先祖に榧を産物として重要視した人物がいたという。

作嶋家、大家家のように広く山林を所有する家でも、杉・檜のように山全体に榧を植林していたわけではない。両家の榧があった場所を確認すると、家の周囲、田の横、谷の際、イデ（用水）の奥などに植えていたという。作嶋家、大家家の場合、現在の当主や周辺の人々の記憶による限りでは、特定の場所に一〇数本かたまって榧があり、あとは点在していたという。前節の分類にしたがえば、作嶋家、大家家の場合は①②の場所に榧があったということになる（地図3）。

毛原中の神崎家も、昭和二〇年代までは一〇本程度あったという。神崎家は作嶋家、大家家と異なり、貴志川沿いの低地に家がある。榧は一か所にまとまっているわけではなかった。前節の分類に当てはめると、①家の背後の斜面（写真5‐45）、②家より上流の貴志川沿い、②家より下流の貴志川沿い（写真5‐46）、②貴志川対岸の畑の端（口絵写真43～44）、②貴志川対岸の毛原中（越打）にある神崎家の山林（写真5‐47）、に榧があったということになる（地図4）。このうち、②貴志川対岸の神崎家の山林に榧が多く、大きな木も

あったという。また、②貴志川対岸の畑の端にあった大木は、昭和六一年（一九八六）一月二六日に伐採した。これは、周囲四メートル二〇センチで、神崎博介氏が年輪を数えたところ約六〇〇年であったという（口絵写真43～44）。複数の榧がある家では、このように家の周辺のみならず、家の近くの田畑周辺や川沿い（里地）、自家の山林（里山）、などに分散して植えていたことがわかる。とくに、榧を集中的に植えてきたのは、奥山ではない自家の山林の一角であった。

本章でみてきたことをまとめると、高野山麓における榧は奥深い山林ではなく、家や集落の周辺に多いことが分かる。高野山麓では、榧は人為的に植え育てられ、特定の大木は意図的に伐採せずに残してきたとみるのが妥当であろう。

六　榧に関する民俗知識

1．呼称と種類

植物的な分類とは別に、地域ごとにさまざまな榧に関する呼称があった。明治三六年（一九〇三）の『大日本有用樹木効用編』には「かやのき」について、ホンガヤ、カエ、カヘ、カヤという呼び方があることが記載されている〔諸戸　一九〇三〕。なお、同書では「いぬがや」は「かやのき」とは別に立項されている。

高野山麓において、筆者が榧の呼び方を聞いたところ、最も多かったのは「カヤ」という返答であった。とくにほかの呼び方はない、「カヤ」と呼んでいるだけである、というような語りが多かった。ただし、実の大きさによって区別して語る人もいた。実が細長い榧と丸い榧がある、と語る方もいた。実が丸い榧のことはマルガヤという言い方が一般的であった。やや実が大きい榧についてはオオガヤという言い方をする場合もある。樹形を含めて区別する人もいた。普通のカヤは木がまっすぐで、実は丸い・小さいという。木がまっすぐに立っていることから、タテガヤと呼ぶ人もいる。建材、碁盤・将棋盤にしやすい。実の味はカヤのほうがいいという人のほうが多い。「カヤ」と呼ぶものがすべてカヤであるとは限らないが、実が丸いマルガヤはカヤであると思われる。オオガヤもカヤの種類であろう。

これに対して、実が細長い、実に筋がついている、実に左巻の筋がついている（普通は右巻き）、などというカヤを区別している人たちがいた。これらは、ナガガヤ、ネジガヤ、ヒダリガヤ、ヒダリマキなどと語られる[8]。枝が下に張っているのでヒラガヤと呼ぶという人もいる。これらは、いわゆるヒダリマキガヤのことを指すと考えられる。こうしたカヤは、普通のカヤと異なり、木が曲がっている、木がねじっている、などと語られることも多い。木が曲がっているため、普通のカヤと比べると、建材や碁盤・将棋盤になりにくいという。実の味はヒダリガヤのほうがおいしいという人もいる、実が大きいため油の量は多い、という人もいる。ただし、味については、実が小さい榧のほうがおいしいという人もいる。ヒダリマキガヤは紀美野町毛原地区・同町国吉地区に集中的に分布しているため、カヤとヒダリマキガヤを区別した語りはこれらの地区で多く確認された。このほか、紀の川市鞆渕地区、有田川町でもカヤとヒダリマキガヤを区別した語りが確認された。同じ家で種類の違う榧が存在している場合には、区別して認識している傾向が強いが、名称はカヤというだけで区別していなかった、という人もいる（紀美野町中田の西浦氏）。

三章で述べたように、江戸時代には現在の紀美野町付近では「左巻榧」という名称がみられたため、「左巻」という呼称についても聞き取りで確認をおこなった。筆者の聞き取りでは、紀美野町では毛原上の森谷氏、毛原下の冨家

氏、滝ノ川の上中氏が、若いころから「左巻」という呼び方を聞いたことがあるという。ただし、紀美野町の場合は、平成三一年（二〇一九）にヒダリマキガヤが天然記念物となり、ヒダリマキガヤという名称が町内で知られるようになってきている。このため、「左巻」という呼び方が古くから言われてきたのか、最近の認識であるのかは慎重に判断しなければならない。そこで、紀美野町以外でも慎重に聞き取りをした結果、かつらぎ町花園久木の朝本氏、同地区の五前氏、有田川町下湯川の大久保氏、同町三田の西岡氏が「左巻」という呼称を語った。朝本氏は、「頭を上にして、筋が左へ巻いてるので左巻という」と語る。また、有田川町沼の松田氏は、榧の実は右巻きと右巻きがある、と語る。有田川町ではヒダリマキガヤの調査は進んでおらず、現時点では榧に関する関心は低く、町内におけるヒダリマキガヤの認識は広まっていないようである。したがって、有田川町の話者が語る「左巻」は、昭和初期以前から言われていた可能性が高いと考えられる。

聞き取り調査では、このほかに榧の種類として、コガヤ、ヘベガヤなどの呼び方が語られた。コガヤというのは実が小さい榧のことを指すようである。ヘベガヤ・ベベガヤはイヌガヤのことを指すようである。九章で述べるように、紀伊山地でもイヌガヤの実を油に搾ることがあった。しかし、聞き取りの範囲では、イヌガヤは生えていることは知っているがとくになにも利用しない、という語りが多かった。イヌガヤは川端に生えているという（紀美野町毛原下・同町円明寺）。紀美野町中田の西浦氏は、実がならない榧をイヌガヤと呼んでいた。高野町東富貴の下垣内氏は、ベベは熟してくるとそのまま食べた、という。有田川町楠本の橋本氏の場合は、榧にはオオガヤ・コガヤ・ヘベガヤがあるといい、山にある実生の榧のことをヘベガヤと呼んでおり、ヘベガヤは食べられないという。

また、ハクガヤ（九度山町東郷）、ハクマイガヤ（有田川町生石）は、あくぬきの必要がない、渋がない、という（写真6-1）。ただし、この木はまれにしかないといわれる。いずれも、三章で触れたように、江戸時代の記録で「白榧」が記述されていたのは伊都郡高野、那賀郡小川荘中田村であった。九度山町東郷は高野山のすぐ北側に隣接しており、有田川町生石は紀美野町中田（小川地区）の南に隣接した地域である。

写真6-1　ハクマイガヤ（有田川町生石、2022年11月14日）

2．榧の特徴に対する認識

a　榧に対する認識

当然のことであるが、榧がある家の人と、榧がない家の人では榧に対する認識に差異がある。高野山麓で聞き取りをしたところ、家に榧の木がなく、榧という木のことは見たことはない人でも、榧という木（実・油を含めて）を認識している人が多かった。ただし、山間部および平野部でも近くに山がある人々の場合は榧を認識していることが多い。一方で、平野部で山が近くにない集落の人々は、榧のことを問うても、この集落にはない、よく知らない、という反応が多かった。家に榧がなくても認識している人は、正月の供え物として購入するか知人からもらって榧の実を供える、榧の将棋盤・碁盤のことを知っている、などという場合が多かった。山間部の人々の場合は、大正から昭和二〇年

（一九二〇年代～四五年）ごろまでの生まれの方は、熱心に実を拾った経験もあり、多様な使い道を知っている場合が多い。しかし、山間部でも昭和二〇年代以降に生まれた人たちは、熱心に実を拾うことが少なくなり、碁盤・将棋盤などの材として業者に販売する程度となっている場合が多いようである。

b　植物としての榧に関する知識

榧は暖かい土地にはない、寒いところにある、紀美野町では上神野付近から下流にはない、などと語られる（紀美野町滝ノ川の上中氏）。榧の木は、湿気が多いところより乾燥したところに自生しており、谷よりも尾根にあるという人もいる（紀美野町中田の西浦氏）。実際に、和歌山県北部においては、山間部（河川上中流域）に多く、海岸部（河川下流域）には少ない。

榧は成長が遅い、という語りはよく聞かれた。このため、四章で述べたような「植えるあほうに切るあほう」というような言い伝えが発生したと思われる。古老の方々は、自分が小さいころにはもうこの木はこんな大きさであった、という語りをする人も多い。ただし、枝は徐々に地面につくように下がってくるという。有田川町下湯川の大久保氏は、子どものころには稲を干すための八段ほどのサガリに登ると枝に手がついたが、今では手が届くところまで枝が下がってきているという（写真6‐2）。こうした認識からは、榧が数年単位では幹周が太くなったり、樹形が大きく変わることはないものの、七〇年ほどたてば次第に枝が下がってくることがあることを示している。

写真 6-2　大久保家の榧（有田川町下湯川、2022 年 9 月 26 日）

実をつけるようになるまでの年数は、人によって言い方が異なる。発芽して二〇年ぐらいで実をつけるようになるという人もいるが、三〇年ほどたたないと実をつけるようにならない、と語る人のほうが多い。実をつける周期・時期については七章で述べる。ヤマガラが冬のために榧の実を隠して、食べ残したところから生えてくる、と語る人も多い。実はたくさんなる年は細かく、少ない年は「粒が荒い」（実が大きい）と語る人もいる（かつらぎ町花園梁瀬の久保氏）。同じ榧の木でも、年によって実が細くなったり、丸くなったりすることがあるという人もいる（かつらぎ町下天野の北氏）。

長い実は発芽が悪く、丸い実はよく目が出る、と語る人もいる（紀の川市上鞆渕の南浦氏）。かつらぎ町の東氏のように、自分で種を蒔いて育てようとしている人の場合は、発芽率のことも理解している。榧の種は蒔いたものが全部生えてくるわけではなく、翌年に芽が出るのは二割、さらに翌年に四割、また翌年に一割出る、という。[9] 大木の榧の周辺には幼木の榧が生えている場合が多い。屋敷周辺に幼木を植えていた人もいるが（橋本市賢堂の栢木家）、現在では苗を欲しいという人にあげる程度で、抜い

写真 6-3　榧の幼木（有田川町下湯川の大久保家、2022 年 6 月 23 日）

ているという家が多い（写真6‐3）。

榧は一本一本すべて違うと語る人もいる（紀美野町中田の西浦氏）。家または集落に複数の榧の木がある場合、この榧の実は食べられない、おいしくない、などという認識をしている場合が多い。

実生の榧は実が小さい、山にある榧は実が小さい、という語りもあった。これは、落ちた種から自然に生えた榧は実が小さい、という意味である。逆に言えば、意図的に植えたり、接ぎ木などをしなければ、大きな実にはならない、ということを意味している。家の周りにある榧は、より実を大きくしようとして手をかけてきた、ということを表しているようである。

このほか、実がなる木と実がならない木がある、花ばかり咲いて実がならない木がある、という語りもある。橋本市西畑の岡本氏は、ハナガヤ（雄）とミガヤ（雌）がある、と語る。岡本氏の家には、雌雄の榧があるためにこのような区別をした認識をしているが、明確に雌雄の区別を語る人は多くなかった。西畑の岡本氏は、ハナガヤは大きくなりやすく木がやわらかいので用材になりにくいが、ミガヤは大きくなりにくいので基礎の土台になる、と語る。花が咲くのは五月ごろで、黄色い花が咲くという。毛原宮（界西）の井上家では、家の前に雌雄一本ずつの榧が残っている（口絵写真41）。実が丸い榧は発芽がいいが、実が長い榧は発芽が悪い、と語る人もいた。

材木としては、榧は腐りにくいという。このため、十二章で述べるように、水に濡れやすい部分に用いられることが多かった。枝は「しなこい」（しなやか）などと語られる。このため、榧の枝は魚捕りのタモに使われる。

榧の木の皮は、「はしかい」（かゆい）と語る人が複数いた。たとえば、「木の皮のへりへもうひとつ皮ができる。それがはしかい」（有田川町楠本）などと語られる。しかし、榧が「はしかい」というのは、聞き取りをしたなかでも一部の人が語る。これについては、地域的な特徴があるのか、あるいは榧の種類によるのか、今のところ不明である。

実については、外の緑の皮はくさい、「にちゃにちゃする」（油分でべたつく）などと語られる。榧の実の匂いは「くさい」「べたつく」という印象が多かったようであるが、戦後生まれの方の中には、榧の実の外の皮をトイレなどに吊って芳香剤の代わりにしているという人もいる（かつらぎ町御所の大家氏）。香りに対する認識が時代によって変わった可能性もある。現在、りら高校では榧の香りを「よい香り」と位置づけ、榧の匂いを使ったキノミノリを販売している。

実はヤマガラやリスの好物であることは広く語られ（写真6‐4）、榧の木には風蘭（フウラン）、榧蘭（カヤラン）が繁殖するということを語る方も多かった。紀美野町毛原地区では、榧を食べたイノシシは、おいしいという。榧がよくなったときは、イノシシの肉がうまいぞ、という。

3．植栽・採取の工夫

a　接ぎ木

ヒダリマキガヤは接いで増やした、という人もいる（紀美野町毛原地区、有田川町三田）。自然にできた榧はあまり実がならない、山で自生している榧は伸びるだけで実がなっていない、などと語られる。有田川町杉野原の上林氏は、実生の榧

写真6-4　ひまわりの種を食べにくるヤマガラ（かつらぎ町花園梁瀬の久保家、2022年9月2日）

のことをヤマガヤと呼び、実生であるとどんな榧が出るか分からない、と語る。有田川町楠本では、オオガヤを接いだという。ただし、一〇〇年近く前のことであり、実際に榧を接いで増やしたという方は確認できなかった。高野山麓の人々は、葡萄櫨、葡萄山椒、柿などを接ぎ木してより大きな実をより多く収穫できるように工夫してきた。葡萄櫨の接ぎ木については、別稿で取り上げている〔藤井　二〇二二〕。過去に榧を接ぎ木した人物については、具体的な史料や言い伝えは残っていないが、人々の語りや他の植物の接ぎ木例から考えれば、接ぎ木で増やしてきたと考えるのが妥当であろう。

なお、かつらぎ町四郷地区の堀越観音では、近年、同地区の岡井家の丸い榧を寺の榧に接いだことがある（写真6‐5）。また、かつらぎ町の東氏（紀美野町上神野地区出身）は、現在、榧を接いで増やそうとしている。東氏は紀美野町毛原下の作嶋氏、毛原宮の奥澤氏と親戚であり、若いころから榧の木のことは知っていた方である。ただし、榧を接ぐことは特定の人に聞いたのではなく、さまざまな樹木を接ぐなかでおこなっているということであった。東氏の場合は、「こんな木を植えて残しとくのも大事じゃろなと思い、種蒔いてこしらえた」という。二〇〇年、三〇〇年先の話になるだろうけど、自分の思いとしてやっていきたい、と語る。すでに二〇本ほど接いだといい、榧は接ぎやすいという。

写真6-5　岡井家の丸い榧の実（かつらぎ町東谷、2023年8月24日）

東氏によると、二通りの接ぎ方があるという。東氏が筆者の目の前で実演しながら説明をしてくれた内容から考えると、一般的にいわれている枝切接ぎ法と芽接ぎ法であると思われる（写真6‐6～7）。東氏は、接ぐのは一月から二月ぐらいまでがよいという。

b　手入れ・施肥

聞き取りの限りでは、積極的に榧の手入れをしたという人は少なかった。木に巻き付くかずらだけ切っておけばよかった、という人もいた。かずらが巻き付くと木が枯れてしまうからである。ごくまれに、榧に肥料をやっていたという人もいるが（紀美野町毛原上の森谷氏）、ほとんどの家では肥料などはやっていなかったようである。ただし、肥料のことを問うと、以下のような反応をする人が複数いた。かつては榧の木の周囲に畑があったから畑の肥料を吸って榧に肥料をやらなくても実が

写真6-6　東氏による接ぎ木の実演（かつらぎ町、2022年10月17日）

写真6-7　東氏が接いだ榧（6-6に同じ）

写真 6-8　榧の木と畑（右側）（かつらぎ町花園梁瀬の久保家、2022 年 9 月 2 日）

写真 6-9　枝を切った跡（かつらぎ町下天野の北家、2023 年 1 月 16 日）

よくなった、今は畑を作っていないので実があまりならなくなった、などという語りである。実際に、榧の木の周辺の傾斜地には畑を作っている家が多かった（写真6－8）。現在でも部分的に畑を耕作している家もあるが、耕作放棄されている畑も多い。

c　採取の工夫

実を拾いやすいように、実が落ちる前に木の下の草を刈っておいたり（紀美野町毛原中の神崎氏）、鍬で筋をつけて、そこで止まるようにした人もいる（かつらぎ町花園久木の朝本氏）。板を並べて実がたまるようにした人もいた（紀美野町毛原下の作嶋家）。

d　剪定

家に覆いかぶさっている大木の場合、葉・実・枝などが一年じゅう落ちてきて、樋などに詰まるという。田畑の陰になったり、枝が家の屋根にこすってくると、剪定・伐採することがあった（写真6－9）。榧の木は杉・檜に比べて成長が遅く、切ったあとがふさがりにくいため、そこから腐ってくることがある。そのため、慎重に切っていたという。

このほか、木についている蘭を適度に取ることもあった。また、株元に住み着く蜜蜂を防ぐために蜜蜂の巣箱を榧の木の根元に設置する家もある（有田川町板尾の松浦氏）（写真13－1）。

七　榧の実を拾う時期・作業・収穫量

1．実がなる時期

榧は実がなる年とならない年があるという（写真7－1）。ウラバン（裏番、ならない年のこと）があると語る人もいる。実がなる周期については、隔年になる、三～五年周期で増減を繰り返す、など、話者によって語り方が異なっている。かつらぎ町花園梁瀬の久保氏の場合、五年に一回ぐらいたくさん実がなるという。紀美野町円明寺の上北氏は、「なり上がって、なり下がる」と表現する。三年ぐらいかけてしだいに実が多くなり、その後再び三年ぐらいかけて実が少なくなる、という。また、橋本市清水の松尾氏の場合は、裏表はなく、毎年よく実がなる、という。話者の感覚というだけではなく、木によって差異がある可能性もある。なお、筆者が

写真 7-1　実が多くなったときの様子（かつらぎ町御所の大家家、2023 年 8 月 28 日）

調査した二〇二二年秋は高野山麓全域で例年になく榧は不作であった。今年ほど少ないことはなかった、と語る人も多かった。この年だけではなく、近年は実が少なくなっていると語る人も多い。その理由としては、温暖化で気温が高い、周辺の畑がなくなり肥料を吸わなくなった、雄の榧が少なくなり交配しなくなった、などと語られる。

実がなる時期は夏の終わりから秋にかけてである。おおよそ八月～一〇月に実が落ちる。彼岸から祭り（一〇月一〇日）にかけて落ちる、と語る人もいる（かつらぎ町花園梁瀬の久保氏）。ただし、木によって、年によって、違いがあるようである。盆過ぎから、彼岸から、などと語られる。子どものころに、家の近くの小屋のトタン屋根に榧の実が落ちる音を聞いて、夏休みが終わると感じていた人もいる（紀美野町谷の橋戸氏）。早生と晩生があり、早生は一〇月末から、晩生は一一月半ばから拾った、という人もいる（かつらぎ町花園久木の朝本氏）。

実が落ちるのは、朝夕が多いという。また、風があるとき、雨が降ったときにもよく落ちるという。蒸し暑いときにはとくに落ちるという人もいる。

2. 収穫作業

榧の実の収穫作業について具体的な様子を記した報告はほとんどない。和歌山県の事例としては、「カヤやトチノキの生えている土地の人たちは、風の吹いたあと、この実を競って拾いに出かけたものでした」という記述がある程度である〔和歌山市立子ども科学館　一九八二〕。

筆者は、高野山麓一帯において、榧の実の拾い方についても聞いて回った。その結果、拾う人や拾い方の工夫などが分かってきた。

雨が降ると榧の実がよく落ちたため、かつらぎ町花園久木の朝本氏は、「雨上がりに拾いに行くと決まっていた」と語る。

榧の実が落ちる時期は稲刈りの時期に当たっていた。かつらぎ町下天野の北静哉氏は、「毎日毎日拾った。稲を刈りだしてから刈ってしまうまで落ちた。一番忙しい時期。稲を刈ったり、籾を干したりしながら拾った。」と語る。稲刈りを優先した、と語る人もいる。榧の木がある農家でも、働き盛りの人は稲刈りなどで忙しいため、女性・老人・子どもなどが中心で拾っていたという家もある。子どもは、学校帰りに拾ってこい、などといわれることがあった。榧の実は一か月ぐらいかけて落ちるため、まとめて拾ったという家もある。有田川町下湯川の大久保氏は、落ちた実を庭の端に寄せておき、実が落ちなくなった時期にまとめて拾ったという。ただし、道に落ちた実は、踏んでしまうため、二・三日に一回拾ったという。昭和初期には、家族だけでは拾いきれずに人を雇って実を拾う家もあった（紀美野町毛原下の大家家）（写真7－2）。かつらぎ町山崎には「嫁にやるとも山崎やるな、芋のチャガイ（茶粥）食て、榧拾い」という言葉が伝わっている。山崎のような榧の木が多かった集落では大変な作業であったという。昭和三〇年代までは老婆（明治～大正生まれ）が拾うことが多かったが、昭和四〇年代ごろ以降にその子ども世代（大正～昭和初期生まれ）になるとほかの仕事が忙しくて

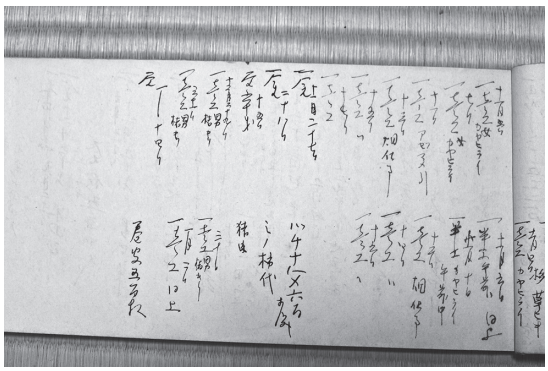


写真7-2　昭和10年の「大福帳」に記載された「カヤヒライ」（紀美野町小西の大家家所蔵、2022年11月28日）

写真 7-3　向山家の庭の上にある阪本家の榧（かつらぎ町山崎、2023 年 2 月 6 日）

榧の実を拾うことは減っていったといわれる。

大木の榧の場合は、他家の土地まで枝が伸びていることがある。昭和中期ごろまでは、榧の実を拾う人が多かったため、落ちた実はその土地の所有者が拾ってもよいということになっていた。かつらぎ町山崎の向山家では、すぐ上にある阪本家の榧の実が庭に落ちてきた（写真7‐3）。庭に落ちた実は、向山家が拾っていたという。かつらぎ町花園梁瀬の久保家の場合、榧の周辺の畑の所有者から、実を拾わせてほしいので枝は伸びてもよいといわれていたという。有田川町杉野原の上林氏の場合、上林家には榧がなく、上林家の棕櫚林の上に坂本家の榧があった。上林家の棕櫚林に落ちた榧の実は上林家が拾ったという。また、道に落ちている実は、欲しい人が拾っていったという（紀の川市上鞆渕の前東氏）（口絵写真37）。

実の拾い方は、基本的には素手でひとつひとつ拾うというものであった。ただし、近年では、拾うときに手に榧の油がつくので、ゴム手袋をして拾う、などと語る人もいる。拾った実は籠やバケツに入れる。大きな竹籠や藁などで作った袋に入れて背負って帰った。花園久木の朝本氏は、直径三〇センチほどの腰付けカンゴ（籠）を腰につけて、拾っては籠に入れ、集めた実を袋に入れて榧山から家に持って帰ったという。榧の木は家の近くとは限らなかった。紀美野町毛原中の神崎家の榧は、家の周辺のみならず、田畑の横、棕櫚山などに点在していた。そのため、何日もかけてあちこちに拾いに行ったという。榧の木は傾斜地に植えられているので、下に板を並べて落ちた実が溜まるようにしていた、という人もいる（紀美野町毛原下の作嶋家出身の石井氏）。川に落ちた実は拾いやすかったが、谷や山に落ちた実は拾いにくかった、などと語られる（紀美野町毛原下の美野啓子氏）。現在では、道沿いの側溝に実が溜まっていることがある（写真7‐4）。

写真 7-4　側溝に溜まった榧の実（紀美野町毛原中の前田家の榧の下、2022 年 11 月 7 日）

外の皮は収穫時に剥いてくる（口絵写真5）、あるいはすでに黒くなって皮が剥けている実を拾った、などと語られる（口絵写真9）。拾ってきた実を筵の上に敷いて、地下足袋を履いて足の親指で踏んで外の皮を取った、という人もいる（朝本氏）。「はれて落ちやなあかん（外の皮がはじけてから落ちてこないといけない）」（紀美野町谷）、台風で無理に落ちた実は皮が剥きにくい、などという。

3．収穫量

九度山町慈尊院地区には江戸時代に榧の大木が複数あった。このうち、飯炊明神の森の西側にあった「ふたまたノ大木」は「壱石より三石迄なる木」という記録がある（九度山町史編纂委員会　二〇〇〇）。

毛原中の前田家に残された「榧ノ木ノ由来」には、五章でも述べたように、

「明治十年頃迄当毛原地ハ栢ノ実戸毎ニ二三石位アリ毛原下ノ作嶋トイフ家ニ豊作年ニハ五十石余モアツタト言コトデス」と記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。つまり、明治初年までは毛原地区では家ごとに榧の実が二～三石（約三六一～五四一リットル）取れ、毛原下の作嶋家では豊年に榧の実が五〇石（約九〇二〇リットル）もあった、ということである。二石の実がなる榧の木が二五本あれば五〇石となる。五章で述べたように、昭和二〇年代まで作嶋家には榧の木が二〇本以上あった。すべての木が二石なることはなかったと思われるが、三〇本から四〇本程度の榧の木があれば、この程度の収量を確保できたと思われる。なお、明治八年（一八七五）の「物産取調書」では、毛原下村（紀美野町毛原下）の榧の実の収穫量は二三石（約四一四九リットル）と記載されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇一二〕。

収穫量は木によっても異なり、また同じ木でも年によって異なる。聞き取りによると、一日に三〇〇〇個拾ったという人もいる（紀美野町毛原宮の角岡家）。かつらぎ町花園梁瀬の久保家の榧は一本であるが、かなりの大木であるため、この一本で何石と実を拾ったという。紀美野町毛原中の神崎家には合計で一〇本ほどの榧があった。この家では拾い集めた実は一石あり、一斗のドラム缶が一〇杯あったという。神崎家では昭和中期まで家族で拾っていた。神崎氏は一日で一斗ぐらいの実を拾ったのではないか、と語る。紀美野町毛原上の森谷家には、数本の榧があった。多い年は一石ぐらいあったのではないかという。調査の前年（二〇二一年）は五・六斗拾ったという。有田川町下湯川の大久保家にはおもに一本の榧から実を拾った。米を入れる二斗袋に四本あったため、七～八斗あったことになるという。ただし、大久保家宏氏の経験では、榧の周囲を全体的に拾ったわけではないという。大久保家の榧は、家の背後の斜面に建っているが、家の庭に落ちて来る実だけを拾い、山側に落ちた実は拾ってないという（写真7‐5）。

全体的な傾向として、近年では榧の実を拾うことが少なくなっている。榧の実を積極的に拾っていたのは、昭和一〇年代生まれの人までであり、昭和二〇年代生まれの人は子どものころに拾ったことがある、という程度となっている。昭和三〇年代以降、榧の木の横に車道がつくことも多かった。榧の木の下に車道がついた場合、秋になると榧の実が車道一面に落ちることになる。このため、車が通る時間までに実を掃き寄せておかなければいけない、という人も多い。それは、実がつぶれて通った車が汚れるためであるという。自家の車のためというよりも、周囲の車の迷惑にならないように掃き寄せていたという方が多い。このように、現在では榧の実は積極的に拾うというよりは、周囲の迷惑にならないように、秋になると落ちた実を毎日掃き寄せなければならない、という感覚が強まっている。

写真 7-5　大久保家と榧の木（有田川町下湯川、2022 年 6 月 23 日）

八　実の処理と食べ方

1．実の処理

榧の実を食べる場合、灰などに一定期間つけてあく抜きをした〔野本　二〇一一など〕。和歌山市立子ども科学館の展示解説には、榧の実について「種子を木灰であくぬきし炒るとアーモンドの味がする」と記されている〔和歌山市

立子ども科学館　一九八五）。

筆者の調査でも、ほとんどの方が、榧の実はあく抜きをしないと食べられないと語る。このことを灰と合わせる、と表現する人もいる。つけておく期間などは人によって若干異なっている。また、最近では榧の実を拾って食べることがなくなっているため、灰などに漬け込む期間の説明について、話者の記憶があいまいになっているという側面も認められた。

多くの方が語った内容を要約すると、以下のようになる。まず、外の皮（緑の皮）を取って、灰と混ぜて数日おいておく（口絵写真73）。これを灰と合わせる、という。これをしないと渋がなくならない、うまくあくぬきをしないと渋い、という。かつらぎ町花園久木の朝本氏は、生木を焼いた灰を使うと「あくがようたった」と語る。「あくがたたん」というのは、あくが抜けない、という意味であるという。生木の灰はどの家にもあるものではなかったため、朝本家には近所から生木の灰をもらいにきていたという。最近では、風呂や竈を薪で焚くことがなくなってきたため、木の灰そのものが少なく貴重であるという。灰と合わせる日数は通常は約一週間であるが、晩生の実は一〇日かかったと語る人もいる（朝本氏）。灰であわすと黒っぽくなる（かつらぎ町花園梁瀬の久保氏）、実の色が黒くなったらあくが抜けているという人もいる（紀美野町毛原下の作嶋氏）。灰と合わせたあと、洗って、庭で筵に並べて干す。からからと音がするところまで乾かすという（朝本氏）。こうした作業をしなければいけないので、榧は手間がかかる、という人が多い。なお、昭和中期までは庭に榧の実を広げて干していたが、今は鳥が食べに来るので干せない、という人もいる（久保氏）。なお、実を食べるときだけでなく、油を搾る場合でも、あくを抜いていた（朝本氏）。

あくを抜いて乾かした実は、保存食として保管することができた。二年程度であれば味は変わらなかったという。

2．食べ方

榧の実はあく抜きして炒って食べることが一般的であったが、菓子や榧油を使った汁物などもある〔野本　二〇一一など〕。和歌山県の事例としては、炒って食べると「こどもの最高のおやつだった」、「カヤの実をおもちの中に入れたり天ぷら油の原料としても使いました」という報告がある〔和歌山市立子ども科学館　一九八二〕。

筆者の調査で確認した高野山麓一帯でも、あく抜きした実を炒って食べるのが最も一般的であった。あくを抜いた榧の実を保管しておき、食べるときに炒った（口絵写真74）。現在では、炒って食べる人は少なくなっているが、家にある榧の実を処理して食べている人もいる（口絵写真75）。六章でも述べたように、実の大きさで味が違うと語る人も多い。実が小さい榧のほうがおいしい、甘い、実が大きい榧は「味が薄い」、「おおざっぱ」、などと語られることも多い。ただし、長い実のほうがおいしいという人もいる。

榧の実を炒るのは、ほうらく、かんてき、フライパンなどであった（写真8‐1）。炒った実を包んでいる茶色く硬い皮は歯で割る、トンカチで叩く、という人もいる。今はペンチなどで割るという人もいる。茶色の皮を

写真8-1　カンテキ（紀美野町谷、2022年10月3日）

取った実は黄色く、蜂の子みたい、などと表現される（口絵写真76）。短い榧のほうが、皮を割ったときに渋が取れやすいという。昭和中期までは、菓子類がないので食べた、おいしかった、などと語られる。子どものチン（おやつ）であり、大人も会合などで集まったときに食べた、などという。集まったときに食べた事例としては、集落の観音講のときに持ち寄って食べた（紀美野町谷）、近所から風呂に入りに来たときに酒を飲みながら食べた（紀美野町中田の西浦氏）、などである。ほとんどは炒って食べるだけであったが、なかには炒った榧の実に砂糖をまぶして食べることもあった（紀美野町毛原下）。榧の実を餅に入れて食べるところもあった（橋本市恋野、同市須河、同市向副、かつらぎ町御所）。有田川町東大谷では、集落の菓子屋で榧の実を入れた奉天を作って売っていた。昭和後期から平成にかけてのころには、高野山の土産物屋で、榧の油を使ったせんべいなどを販売していたこともある。また、平成のころには、かつらぎ町四郷地区の堀越観音で榧の実入りのせんべいを販売しており、紀美野町や有田川町では地域の産物販売所で榧の実を販売していたこともある（写真8－2）。また、平成期、紀美野町では加工グループが中心となって、榧の実を入れたクッキーを作り、販売していた。ただし、現在では販売しているところはほとんどなくなっている。その理由には、榧の実の処理に手間がかかること、作業していた人たちが高齢化したこと、などが影響しているという。

写真 8-2　販売している榧の実（紀美野町志賀野地区の野上ふれあい公園、2013年12月7日）

このほか、高野山麓において特徴的なのは、炒った榧の実を摺り鉢などで擂りつぶし、菜っ葉や味噌と和えた、和え物である（口絵写真77）。味噌を入れず、菜っ葉に摺りつぶした榧の実を振りかけるだけという人もいる。紀美野町毛原中の神崎氏は、榧は摺って出てきた油が最高なので和え物のときに味噌は入れない、と語る。紀美野町毛原地区・国吉地区ではほとんどの家で食べていたようである。周辺地域でも食べることはあったが、和え物は知らない、食べなかった、という方が多かった。紀美野町毛原地区ではこうした和え物のことをカヤカバシと呼んでいる。和える食材は、毛原地区では大根葉が多いが、紀の川市上鞆渕ではマナ、有田川町杉野原ではこんにゃくを入れる、という人もいた。毛原地区ではほとんどの方がカヤカバシというが、ほかの地域では和え物の名称は語られないことが多い。昭和後期ごろまではその家のおばあさんが作っていた。現在では手間がかかるといって、作っている家は少ない。カヤカバシは紀美野町の方が話題を提供してテレビや『おいしんぼ』に登場している〔雁屋・花咲　二〇〇九〕。

地域や家での食用のほか、四国遍路の接待に榧の実を提供した事例もある。紀美野町西部では、野上接待講が毎年三月末ごろに徳島県鳴門市の霊山寺（四国八十八か所霊場一番札所）へ行き、お遍路に接待をする風習が残っている。たとえば、野上接待講に残された昭和六年（一九三一）～一六年の「四国接待場之通」には、国吉地区の滝ノ川の人々が野上接待講に対して提供したものとして米・大豆・草鞋・大根・割菜・柿・干し柿・茶などとともに榧（栢）が記載されている。[10] この文書に記載されているのは、滝ノ川の石本家と桐浴家であり、榧の実一升から二升程度を提供している。なお、両家とも、現在でも榧の木が存在している。

九　榧油

1．歴史

a　犬榧油と榧油

イヌガヤの油は縄文時代より灯油として使われていたといい、平安時代の『延喜式』には「閉美油」としてイヌガヤの油が記載されている〔深津　一九八三〕。天保二年（一八三一）刊行の『本草薬名備考和訓鈔』には、イヌガヤの油は「寒中ニ氷ラズ」と記されている。

民俗学者の柳田国男も、『火の昔』において、イヌガヤの油について触れており、もとは全国でこの油を灯油に用いていたが次第に忘れられてきたこと、京都近郊の神社では灯明にイヌガヤの油を用いるところがあること、近年（昭和初期か）まで奈良県吉野地方では家の火に使っていたこと、この実を蒸すときには臭いので特別の釜を使っていたこと、などを述べている〔柳田　一九四四〕。同じく民俗学者の宮本常一は、奈良県大塔村（現在の五條市大塔町）で使っていたイヌガヤの油搾り機の写真を掲載して、油を灯明用として使っていたと報告している〔宮本　一九四二〕。宮本常一が取り上げている奈良県西吉野地方は、高野山の東側に当たり、県境を越えているものの広い意味で高野山麓といえる。しかしながら、筆者の聞き取りでは、高野山麓において犬榧の油を搾ったという事例はまったく確認できなかった。おそらく、高野山周辺の地域では、古くから榧が植栽され、榧油を搾ることが優先されたために、犬榧の油を搾ることは早い段階で忘れられていったと考えられる。明治時代の『大日本有用樹木効用編』では、「かやのき」の項目に、榧の油は食用・灯火用・理髪用に用いられるとし、「本邦植物質ノ油ノ油中最上ノ者ナリ」「油ハ実ノ容積ノ二割余ヲ得ベシト云フ」「榧油ハ高野山、榧飴ハ身延山ノ名物ナリ」と記載されている。また同書には「いぬがや」の項目に、イヌガヤの油は灯火用・髪用に用いられるとある〔諸戸　一九〇三〕。このように、灯火用にのみ用いられてきた犬榧油に対して、灯火用とともに食用にもなる榧油は高野山でとくに重宝されてきたと考えられる。

b　和歌山県の文献

昭和六〇年（一九八五）、和歌山市立子ども科学館では、「どんな草木から油をとりだしたかを中心としてそれらをどんなふうにしぼったか」ということを目的として特別展「草木の実とたね」を開催した。その解説のなかで、榧油のことを「高野山周辺では胚乳からカヤ油をしぼり燈明の油・てんぷら油に使った」と記している〔和歌山市立子ども科学館　一九八五〕。

現在の紀美野町などでは榧油を搾っていたことについては多くの文献で取り上げられている〔和歌山市立子ども科学館　一九八五、前田　二〇〇五、美里町誌編纂委員会　二〇〇五、山元　二〇一五、紀美野町まちづくり推進協議会紀美野史発見部会　二〇二二　など〕。現在の紀美野町毛原地区などで榧油を搾っていたことがうかがえるものの、搾油地域の広がりなどは明らかになっていない。

紀美野町の文献で、しばしば紹介されているのは『紀伊続風土記』と毛原中の前田家文書の中にある「榧ノ木ノ由来」である。高野山麓における榧油に関する史料をあらためて確認しておく。

江戸時代の高野山における榧油の利用については、『紀伊続風土記』では、「高野山之部　巻五九　風俗土産之下　産物」に「榧子油」として、「此高野領分諸処に産す此油性軽味甘尤香気あり長谷庄に産するを尤上品とす此山寒威強して菜種の油は冬日及余寒の時凍りて灯燭に須かたしよりて此栢油を供用す又揚もの已下調理すれとも胸間に停滞の患なし人皆賞玩す諸州に運送して権門勢

家拝謁の献物に擬す」と記されている〔仁井田　一九一〇c〕。また、畔田翠山の『野山草木通志』には、「榧」が取り上げられ、「高野山ニテ子ヲ搾レル油ヲ常用トス其実長短ノ数種アリ油ヲ搾ルニハ短ヲ用」とあり、「豆腐」の項目には「高野山ニテ製ニ榧子油ヲ以テス豆腐質密ニシテ湯ニ煮テ不潰体」と記されており、豆腐にも榧油を使用していたことが分かる〔安田　二〇〇一〕。毛原中の前田家に残された「榧ノ木ノ由来」には、「扨栢油ハ高野山デハ非常ニ用ラレシ。種油ハ酷寒ニ氷結スレドモ栢油ハ酷寒ト雖モ氷ルコトナク夫デ大師様ノ燈明ニ用イラレ」と記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕[11]。また、紀州の博物学者の南方熊楠は、大正一〇年（一九二一）一一月に高野山に登った際、この年は榧の実に虫がおびただしく入っていて、「名高い精進料理に榧の油を用ゆる能わず」と聞いたという〔南方　一九二七〕。

以上のような文献から、少なくとも江戸時代の高野山では榧油は灯明用、食用として重宝されており、極寒のとき菜種油は凍るが榧油は凍らない、といわれていたことが分かる。四章で触れた、高野山麓一帯でいわれている榧油が寒くても凍らないから高野山で重宝されていたという語りは、すでに江戸時代に確認することができる。昭和中期の油に関する文献では、「榧油」として、「高野山には灯明用に同山に産する榧実を以て製する油を使用すると伝ふ。尚各宿坊に於ける食膳の天麩羅は此の油を以つてせる為め、其の美味なる事全国に冠たりと伝へらる」という記載がある〔大浦　一九四八〕。ここでは、昭和中期にも、各宿坊にて榧油を使った料理が出されていたことが分かる。

一方、江戸時代に高野山へ榧油を納めていた地域は、『紀伊続風土記』「高野山之部　総分方巻十五　総分領内産物」には「三谷荘山崎村　友淵荘　毛原荘」とある〔仁井田　一九一〇c〕。同書「高野山之部　総分方巻十六　伊都郡三谷荘山崎村」には「村中榧実を産物とす」〔仁井田　一九一〇c〕、同書「高野山之部　総分方巻十五　総分領内荘村　伊都郡賀二郡友淵荘」には「作間に榧の油を絞り」〔仁井田　一九一〇c〕、「高野山之部　総分方巻十五　総分領内荘村　那賀郡毛原荘」には「荘中茶幷に榧実棕櫚皮を産物とす」〔仁井田　一九一〇c〕とある。また先述したように、同書「高野山之部　巻五九風俗土産之下　産物」には「長谷庄に産するを尤上品とす」〔仁井田　一九一〇c〕とある。つまり、江戸時代に榧油を搾っていたのは、現在のかつらぎ町山崎（写真4-2）、紀の川市鞆渕地区（口絵写真13）、紀美野町毛原地区（口絵写真14）、同町長谷宮・かつらぎ町新城（旧長谷荘）（写真9-1）ということになる。

また、紀美野町毛原地区に残された文書には、「献上御用栢並栢油上納相済候迄者郷中ニおいて栢油栢之実共堅ク売買相不成候間此段郷中小前末々ニ至迄不洩様厳敷可申渡候若相背もの於有之者急度咎可申渡候依而令廻文候者也」という触書もみられる。これは、文政一三年（一八三〇）に、高野山の惣分役者珠寶院より毛原庄五ケ村役所（上村・宮村・中村・小西・下村）に出された文書である。ここからは、毛原地区から領主としての高野山へ榧の実と榧油を納めていたこと、納めた榧油以外は自由に販売していたこと、などが分かる〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。なお、榧の実には豊作・不作があり、安定して油

写真9-1　長谷地区（紀美野町長谷宮、2022年9月2日）

を納入することには難しい場合もあったと思われる。そうした状態に対応するためには、あくを抜いて乾燥させた状態で一定量を保管し、不作のときには保管した実から油を搾っていた可能性も考えられる。

毛原中の前田家に残された「榧ノ木ノ由来」には、江戸時代の榧油の供給についてより具体的な記述がある。ここには、「大師様ノ燈明ニ用イラレ五日間ニ一石五斗費消し其油私シ方■用立アリマス又徳川時代ニ高野山ヨリ江戸将軍へ毎年栢油壱石五斗宛献上シマシタ私シ方ニ毎年引受ケ入レ物ハ木ノ樽ニテ中カ古沢紙ニテ張リ柿ノ渋ヲ引荷造リ丁寧ニシ日方へ出シ海上ニテ江戸へ贈リマシタ」と記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。この記述から、高野山で灯明用に使用した榧油の量、高野山より将軍家へ献上したことなどが分かる。二章でも触れたように、この文書が残されている前田家は毛原中村の庄屋を務める家であった。ただし、この「榧ノ木ノ由来」が記載されている『万記録』は、毎年交代で務めていた毛原中村の肝煎が書き継いだ記録であった。「榧ノ木ノ由来」が記載されたのは昭和五年であり、当該部分はこの年の肝煎であった上中隆嗣が書いている。つまり、文中の「私方」とは、前田家ではなく、上中家を指している。後述するように、昭和初期には前田家が榧油搾りの中心であったことから、油搾りは前田家でおこなっていた可能性がある。同じく毛原中村の上中家が、その榧油を樽詰めして日方（現在の海南市）まで陸送し、そこから海運にて江戸まで運んだという。[12]

明治八年（一八七五）の「物産取調書」では、毛原地区・国吉地区周辺において、榧油の記載があるのは毛原中村（紀美野町毛原中）のみである。「栢拾三石　金十九円五十銭　栢油　二石　金五拾円」とある〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇一二〕。榧の実については毛原下村のほうが多いが、搾油に関しては毛原中村でおこなっていたことを示している。明治初年の段階でも毛原中村で榧油搾りの中心的な存在であったのは前田家であったと思われる。

『全国飲食料品仕入案内 昭和五年度版』には、「雑油之部」のなかに「かやの油」の製造者として「前田楠右衛門　徳島県那賀郡長谷毛原村」とあり〔日本和洋酒缶詰新聞社　一九二九〕[13]、昭和五年（一九三〇）の『和歌山県物産案内』には「かやの油」という項目に、「高野山ニ於テ多ク需用サルゝ関係上、古クヨリ搾取セラレ揚物用トシテ比類ナシ」「主ナル当業者　那賀郡長谷毛原村　前田楠右衛門」と記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇一二〕。これまでしばしば引用してきた毛原中の前田家に伝わる「榧ノ木ノ由来」が昭和五年に書かれていたのは、このように同時期に榧油製造者として複数の冊子に前田家のことが紹介されたことを契機にして、歴史的な経緯を記録しておこうとしたのではないかと考えられる。なお、前田楠右衛門の曾孫にあたる前田勇人氏によると、前田家では昭和初期には榧油製造販売は終了したといい、現在では道具などは残っておらず、油を保管していた大きな瓶が一つ地中に埋まっているだけであるという。

2．搾油の工程

宗教民俗学者の五来重は昭和一六年（一九四一）に花園村新子（現在のかつらぎ町花園新子）で調査し、「食用油は種油を買入れ、榧の油を自宅で搾る」と記している〔成城大学民俗学研究所　一九九〇〕。

その後、昭和六〇年（一九八五）に和歌山市立子ども科学館において搾油の工程や道具について調査・展示がされた。その際、立木しめの方法を用いて、和歌山県では海南市・下津町（現在の海南市下津町）・美里町（現在の紀美野町）・貴志川町（現在の紀の川市貴志川町）・清水町（現在の有田川町）・岩出町（現在の岩出市）・かつらぎ町において、椿油と榧油を搾っていたと報告さ

れている。地名や人名などの詳細な記述はみられないが、美里町鎌滝（現在の紀美野町鎌滝）の浦野良一氏から借りた立木しめの搾り機を展示し、展示解説において図入りで取り上げている〔和歌山市立子ども科学館　一九八五〕（口絵写真78）。その後、平成二六年（二〇一四）には、かつらぎ町の川上酒かつらぎ文化伝承館において、「いのちのつながり～高野山麓の天然記念物～」という企画展が開催され、紀美野町毛原宮の角岡詮啓氏が使用してきた榧油の搾り機を展示している〔山元　二〇一五〕。

筆者は、かつらぎ町で展示にかかわっていた植物研究者の山元晃氏を通じて、和歌山市立子ども科学館と、角岡氏を紹介いただき、それぞれ榧油の搾り機を確認した。角岡氏からは搾油工程についても聞き取りをおこなった。また、和歌山市立子ども科学館の油の搾り機の元所有者である紀美野町鎌滝の浦野氏を訪問して、搾油工程の聞き取りをおこなった。

このほかにも、筆者は広義の高野山麓において榧油搾りに関する聞き取りをおこなった。確認できた限りでは、榧油搾りの体験者は、かつらぎ町下天野の北静哉氏（昭和六年生まれ）・同町花園久木の朝本幸夫氏（昭和六年生まれ）・有田川町下湯川の峰伸汎氏（昭和一四年生まれ）・紀美野町毛原宮の角岡千津子氏・同町鎌滝の浦野静範氏（良一氏の息子）であった。なお、峰伸汎氏の場合は、近所の田中家において共同で搾っていた。また、話者の祖父母・父母・夫・親戚などが搾っていた家としては、高野町下湯川の安井家、紀の川市上鞆渕の庵上家、同町上鞆渕の尾上家、紀美野町毛原上の集落、同町毛原宮の奥澤家、同町毛原下の尾上家、同じく毛原下の作嶋家・田下家、有田川町杉野原の上林家、同町下湯川の大久保家、同町三田の西岡家、同町境川の中尾家であった。なお、語りから判断すると、聞き取りをした方々はカヤやヒダリマキガヤを用いていたようであり、イヌガヤを搾ったという語りは確認できなかった。

聞き取りから榧油の搾油作業を復元すると以下のような流れになる。油搾りは冬の作業であった。寒に入ったら搾った（角岡氏）、雪が降ったときに搾った（峰氏）、などと語られる。搾る場所は、玄関の土間（浦野家）、庇の下（角岡家）、などであった。

①拾った実は、食用にするときと同様、あくを抜く。

②実を搗く。足で踏んで、唐臼で搗く。角岡家・尾上家の場合は電動であった。

③実を蒸す。皮と実を三升ぐらいのかさにして蒸篭で蒸す（朝本氏）。

④実を搾る。搾油機の形態は複数存在した。長木で締める（紀の川市上鞆渕の尾上家、紀美野町箕六の中谷家）、矢で締める（かつらぎ町花園久木の朝本家、紀美野町毛原上の集落、同町毛原宮の角岡家、同町鎌滝の浦野家、有田川町下湯川の田中家、同町境川の中尾家など）、ネジを回して締め

写真 9-2　角岡家の搾り機（紀美野町毛原宮、2022 年 9 月 22 日）

写真 9-3　北家の搾り機の部分（かつらぎ町下天野、2023 年 1 月 16 日）

るマンリキ（高野町下湯川の安井家、かつらぎ町下天野の北家、有田川町三田の西岡家など）、ジャッキをつけて搾る（朝本家、紀美野町毛原下の作嶋家など）、機械で搾る（紀美野町小西の大家家、同町毛原下の田下家）、などの形態が確認できた。このうち、搾り機など関連道具が現存するのは、紀美野町鎌滝の浦野家、同町毛原宮の角岡家、同町毛原下の尾上家であり、搾り機の一部が残っているのはかつらぎ町下天野の北家である[14]（口絵写真78～81、写真9－2～3）。

とくに、矢で締める搾油機の場合は、二人いないと搾ることができない。搗く、蒸す作業も含めて、三・四人必要であった。かつらぎ町下天野の北家では、夫と父が搾り、妻と母が搗いていたという。家族が多い場合は分担して作業していた。家族で手が回らない家では、近所の人などに手伝ってもらっていた。朝本家では、幸夫氏と祖父、近所の五前氏などが手伝って搾った。

朝本氏は、「二人でカケヤで号令かけもて、「ほー」といってかんと打ち、「よー」といって打ち。搾りかけはやらこい。しまいくらいにはきつう搾らんと油出ん」と語る。角岡氏は、「二人で木槌で、「よいしょよいしょ」と気合して叩いた。両方から叩く。一人でできない。「よいしょ、いくで」、と同じように締めていかなあかん」と語る。

朝本氏によると、よく出るときは、一回の臼で一升の油が出た。多い年は一升瓶で一二本できた。有田川町下湯川の峰氏は、「黒い実の三分の一ぐらいの油が出る。実は二斗ぐらい、三軒で六斗（六〇升）。搾った油は一軒で一升五合～二升。合計で六升ほど」と語る。

また、角岡氏は、「榧と椿を搾った家では、先に食用としての榧油を搾った。そのあと椿を搾った」と語る。椿のほうが簡単であるという。

搾油機を持っている家は限られていた。このため、周辺地域の榧の木がある家からは、搾油機を所有する家に榧の実を持参して、油を搾ってもらうことがあった。紀美野町毛原下の中谷キミヨ氏の場合、榧の実を袋に入れて背負い、近所の尾上家まで持って行ったという。尾上家には、紀美野町毛原地区・国吉地区の人々が榧の実を持参して油を搾ってもらった。同町毛原宮の角岡家の場合も、毛原地区だけでなく、山を越えて真国地区（勝谷・円明寺など）からも搾油の依頼があったという。紀美野町毛原宮（界西）の井上家の場合、現在の当主の隆夫氏の母が毛原宮の国部家出身であったため、母の父親（隆夫氏の祖父）が搾っていたという。毛原地区のように榧油を搾る家が複数あった場合は、搾油を依頼する家を決定するのは、距離、往来の便利さ、縁故の有無、などが影響していたと思われる。

朝本家の場合は、花園久木だけでなく、隣接する花園中南の人も搾油を依頼してきたという。朝本氏によると、依頼された家の榧の実は一日で搾ったといい、油を取ってしまってからでないと、次の家の実を搾らなかったという。かつらぎ町天野地区や紀の川市鞆渕地区からは、紀ノ川筋や同市貴志川町の油屋まで持参することがあった。山を下りれば油屋が存在した地理的条件があったからであろう。紀美野町小川地区からは同町動木の油屋まで持参した。有田川町楠本では、同町二川または、旧金屋町吉田付近まで持参した。楠本の橋本氏は、吉田付近の家まで榧の実を持って行って、搾ってもらうのをその場で待って、当日に油を持ち帰ったという。

3．高野山麓における榧の油搾りの形態

2節で具体的に確認した家以外でも、榧油を搾っていたという家はあった。高野山麓において、榧油を搾っていた家をまとめたものが表2である。

搾り機の形態については、別稿で詳細に検討する予定にしているが、ここで

概要のみ述べておく。高野山麓で確認した油搾り機は、前節でも述べたように、①長木で締める、②矢で締める、③ネジで締める、④ジャッキで締める、⑤発動機で搾る、という五つの形態に分類することができるようである。①②は素朴な形態であり、③④はやや改良した型、⑤は機械である。実を搗く道具も唐臼を足で踏んで搗いていた家と、機械で搗いていた家がある。②③などは、その家に器用な人がいた場合、自分で作ったのではないかと語られる。①や②に比べると③④は大きな力をかけずに搾ることができる。家族が多く、搾油に時間をかけられる時代には①や②をおこなっていたが、昭和中期にはより効率的に搾るため③④の道具が設置されていったと考えられる。かつらぎ町花園久木の朝本氏は、昭和二〇年代までは矢で締めていたが、昭和二八年（一九五三）七月一八日の水害で大きな被害を受けて一家で県内の他所に移住した。昭和三〇年代にも花園久木に通って榧の油搾りをしたというが、手伝ってくれる人手がなくなってきたため、ジャッキを使って搾るようになったという。

搾油の形態も異なっていたことが分かる。聞き取りをもとに、昭和初期から中期の榧油搾油のパターンを分類すると以下のようになる。

①家で道具を所持し、家族で搾った。

②集落で道具を所持して共同で搾った（紀美野町毛原上）。

③道具を所持している家が搾る（紀美野町毛原宮の角岡家、毛原下の尾上家など）。

④搾油を商売にしている家まで榧の実を持って行って搾ってもらった。（自家で搾らなくなって持って行くようになった家もある。）

筆者の聞き取り調査で確認できただけでも表2の家々で榧油を搾っていた。ただし、かつては榧油を搾っていたかもしれない、という家も複数あった。おそらく、江戸時代から明治時代ごろまでは、五来重も紹介していたように（成城大学民俗学研究所　一九九〇）、高野山麓では広く①の形態で榧などの油を搾ることがあったと思われる。②は①の類似形態と考えられる。

④の場合、歴史的な変遷がある。たとえば、かつらぎ町教良寺の前岡家は明治時代まで、紀美野町毛原中の前田家は昭和初期まで商売にしていたようである。前岡家や前田家の場合は、その後は油搾りをすることはなかった。ただし、前田家の親戚にあたる毛原下の尾上家では、昭和後期まで油を搾って商売にしていた。昭和中後期までは、紀美野町では細々と自家消費的に榧油を搾っていた家が残っていた。そうした家に、周辺の榧の木がある家から搾油を依頼することがあった。また、紀ノ川筋、有田川筋などの町場の油屋に榧の実を持って行って搾ってもらうこともあった。かつては、自家や地元の集落で搾っていたが、搾る道具や家がなくなった結果、町場の油屋まで榧の実を運んで搾ってもらうように変化したようである。かつらぎ町下天野の北静哉氏は、北家で榧油を搾らなくなってから、紀の川市名手の油屋へ榧の実を持って行くようになり、片道一五キロほどの山道を榧実を背負って歩いて行ったにもかかわらず、「やれやれとうれしかった」と語る。自家で油搾りをするのはそれだけ大変な作業であったことを物語っている。なお、町場には昭和初期ごろまでは油屋は複数存在したといい、菜種や椿などが搾油の中心であった。ただし、木蝋（櫨）を搾る家とは異なっていた。そうした油屋に、周辺の山間部からときおり榧の実を持ち込んで、搾油を依頼するということがあったということになる。

4．榧油の流通・消費

これまで述べてきたように、江戸時代から昭和初期にかけて、高野山において榧油を灯明用・食用として重宝していたことが分かる。しかしながら、聞き

取り調査では、榧油の流通・販売については詳細を確認することはできなかった。おそらく、昭和初期ごろを境にして榧油の需要が減少し、榧油製造が衰退したため、昭和二〇年以降の生まれの話者の場合、流通・販売の記憶は残っていないと思われる。

榧油搾りの拠点と思われるかつらぎ町山崎では、集落の東端付近に、高野山へ納める榧油を搾っていたという「油屋敷」という場所がある（写真９‐４）。搾った榧油については、山崎集落の上の方に位置するキンスベまたはキンスケという道まで、高野山から取りに来て、そこで金と交換していたらしい、というが、現時点ではほかに裏付ける資料や伝承は見つかっていない。なお、この場所は、慈尊院から高野山への参詣道である町石道（ハリミチ）より少し下った付近である。

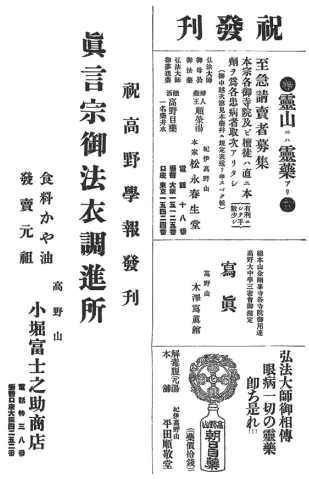
九度山町九度山の油屋保助（油保、栗川家）は、大正ごろまで、高野山に灯明用の油を販売していたという。現当主の栗川万須美氏によると、昭和初期ごろには油屋は廃業しており、販売していた油についても何の油であったとは聞いていないという。しかし、周辺地域における聞き取りから判断すると、菜種油だけではなく、榧油も高野山の灯明用に販売していたと考えたほうが妥当であろう。

写真 9-4　山崎の「油屋敷」跡（かつらぎ町山崎、2023 年 10 月 27 日）

きわめて断片的な資料と伝承から判断する限り、以下のようなことが考えられる。高野山北麓の紀ノ川平野では、榧が多かった山崎、教良寺などの油屋が榧の実を集めて油を搾り、直接高野山と取引することもあった。伝承から考えると、この流通ルートは明治中期までに廃絶していた可能性が高い。九度山のような高野山への物資流通の拠点集落の油屋も、周辺の榧のある地域で搾った榧油を集荷し、高野山へと運んでいた。この流通ルートも大正時代までであった可能性が高い。高野山西麓においては、榧が多かった毛原地区で搾られた榧油が高野山へと運ばれた。毛原からの榧油流通のみ昭和後期までわずかながら継続していた。

一方、高野山の町中において、明治～昭和後期に榧油を扱っていたのは小堀富士之助商店（現在の小堀南岳堂）であった（写真９‐５）。大正二年（一九一三）に創刊された『高野学報』の広告には、「真言宗御法衣調進所　食料かや油　発売元祖　高野山　小堀富士之助商店」と書かれている（写真９‐６）。現当主の小堀祐弘氏によると、かつては灯明用の榧油は大量に売れたという。しかし、昭和時代になると榧油は灯明用の油としては使用されなくなり、その後は食用油として高野山の寺院が購入する程度になったという。昭和後期になると、寺院で特別な料理に使うだけであったため、ときどき売れる程度であったという。昭和中後期に小堀富士之助商店に榧油を卸していたのは、紀美野町毛原下の尾上家であった。尾上家で

写真 9-5　小堀南岳堂（高野町高野山、2023 年 3 月 6 日）


祝發刊

祝高野學報發刊

眞言宗御法衣調進所

食料かや油　高野山

發賣元組　小堀富士之助商店

寫眞　高野山　木澤寫眞館

弘法大師御相傳
眼病一切の靈藥
卽ち是れ!!

写真 9-6　『高野学報』創刊号

榧油を搾らなくなった昭和後期に、小堀富士之助商店でも榧油販売を終了したという。なお、昭和後期以降になると、高野山の土産物屋が山麓の榧所有者から直接仕入れて、榧油を使ったせんべいなどを販売することもあった。

高野山の寺院では、榧の油を用いた料理は「三品料理」と称されていた。これは、だしと酒で煮た白豆腐に、榧の油を落とし、醤油で味をつけるもので、榧の油と酒と醤油で三品ということであるという〔「日本の食生活全集　和歌山」編集委員会　一九八九〕。「榧の実は薄黄色で秘薬、老僧の酒のあての最上のもの」という紹介もあり〔「日本の食生活全集　和歌山」編集委員会　一九八九〕、また実は精進料理の和え物にも用いられるという〔亀岡　二〇〇九〕。

聞き取りによると、山麓一帯の家々では榧油は家で食用油にしていた。榧の実を拾って他家で油を搾ってもらった家でも、自分の家で油を搾っていた家でも同様の利用があった。炒め物やてんぷらなどに使ったという。卵焼きをしたという人もいる（かつらぎ町下天野の北家）。昭和中期までは油は貴重であったため、榧油がある家では油を買う必要がなかった、などと語られる。香ばしくておいしかった、という人が多いが、独特な匂いが苦手であったという人もいる。かつらぎ町花園久木の朝本照代氏（幸夫氏の妻）は、実家には榧はなかったので、嫁いで初めて榧の油を食べたといい、おいしかったと語る。反対に、紀美野町毛原下の美野啓子氏は、小さいころは実家の西畔家で榧の油ばかりを使っていたが、榧の油は匂いがするのでたまには違う油で食べたい、と思っていたという。現在では昭和中後期までに搾った油をわずかに残している家もあるが、食用に使うことはなくなっている（口絵写真82、写真9‐7）。近年まで紀美野町上神野地区で榧油を製造している家もあり、県外の製油会社に委託して搾ってもらっている家もある。最近になって搾ってもらったという家では、家で食用に油を利用する場合もある（口絵写真83、写真9‐8）。

榧油は食用や、後述する薬用以外にも、用途があった。有田川町北野川の岩橋氏よし子は、家で醤油を作ったとき、樽からじょうごに受けると醤油が泡立ってくるので、醤油を瓶におさめるために棒の先へ榧油をつけて入れると泡がおさまった、と語る。

写真 9-7　榧油（高野町上湯川の西岡家、2022年2月24日）

写真 9-8　紀美野町上神野地区で製造した榧油（2022年6月1日）

写真 9-9　灯明の皿（紀美野町毛原中の神崎家、2023 年 1 月 4 日）

写真 9-10　灯芯（9-9 に同じ）

文献や伝承からは、高野山の灯明の油に使ったというが、聞き取り調査によると、灯明用に使った体験がある人はほとんどいない。停電などのときに使った程度であった。そうしたときでも、榧の油だけでは高くつくので、菜種油を混ぜたという（紀美野町毛原中の神崎家）（写真 9 - 9～10）。

十　薬用と蚊除け

1．薬用

明治時代の『大日本有用樹木効用編』には、「榧実ハ寸白虫ヲ殺スモノナレドモ多食スレバ脾肺ヲ傷リ泄痢ヲ患ヒ痰ヲ生ズト云」とある〔諸戸　一九〇三〕。

高野山麓では、近畿民俗学会の報告で、かつらぎ町天野の事例が報告されている。ここでは、民間療法の事例として、「栢の実　神経痛。皮のついたままでかげ干しにして煎じて飲む」と記載されている〔近畿民俗学会　一九八〇〕。また、和歌山市立子ども科学館の展示解説には、榧の実について「生で食べ虫下しにも使った」と記されている〔和歌山市立子ども科学館　一九八五〕。

筆者の調査では、榧の実や油を食べていると、回虫が湧かない、十二指腸にいい、風邪をひきにくい、下痢に効く、寝小便をしない、など語る人がいた。榧の大木がある家では、周囲の人々からあの家では回虫が湧いたことがない、といわれていた（かつらぎ町御所の大家家、同町花園梁瀬の久保家）。榧油を搾っていた家には、子どもに食べさせるために榧がない周辺の家から榧油をもらいにくることがあった（かつらぎ町下天野の北家）。榧油を搾っていた家では、油を傷口に塗ったり（紀美野町毛原下の尾上家）、ときどき犬の餌に榧油を混ぜることもあった（紀美野町毛原宮の角岡家）。榧の葉を煎じて飲む家もあった（かつらぎ町御所の大家家）。ただし、薬用に関する事例は榧の大木があるか、家で榧油を搾っていた家に多いようである。筆者が聞き取りした範囲では、榧の実や油が薬用になったことは知らない、という人のほうが多かった。反対にかつらぎ町花園梁瀬の久保家では、榧の実・油は日常的に食べていたため、薬用として食べる意識はなかったという。

なお、昭和後期には、美里町（現在の紀美野町）では榧の実を農協経由で県外（奈良県）の製薬会社に販売したことがあった。

2．蚊除け

明治時代の『大日本有用樹木効用編』には「材ヲ焼ケバ蚊ヲ遣ルニ効アリカヤノ名ハかやりのきヨリ転化シタルナリ」〔諸戸　一九〇三〕とあり、カヤという名前は、蚊遣りから来ている、と記されている。

和歌山市立子ども科学館の展示解説には、和歌山県の山間部では蚊を追い払

うために榧などをくすべたと記されている〔和歌山市立子ども科学館 一九八二〕。同書には、「身近かな草木の利用」が一覧になっており、「カ・ブヨ退治の植物」に榧を用いる地域として、高野町富貴、粉河町（現在の紀の川市）鞆渕、金屋町（現在の有田川町）松原、清水町（現在の有田川町）境川、同町清水があがっている〔和歌山市立子ども科学館 一九八二〕。

筆者の調査でも、高野山麓一帯において、榧の枝・葉・幹の一部などを蚊除けのためにくすべてきたことを確認した。蚊取り線香の代わりに榧をくすべたと語る人もいる。[15] いい匂いがした、独特な匂いがした、などと語る人もいる。くすべる場所は家によって異なっていた。夕飯のときに家の中において、囲炉裏やこたつなどでくすべる家もあった（写真10-1）。牛小屋の前でくすべたという家もあった。むしろ、人間には使わない、厩（牛小屋）は蚊が多かったので、牛のために焚いたという人もいる（紀の川市上鞆渕の向竹氏など）。幹の一部や枝をくすべる場合は、剪定で切ったものを使うこともあった。榧の木がある家だけでなく、近所や親戚の家から枝葉などももらってくすべる家もあった。

写真 10-1　こたつ（紀美野町滝ノ川の東平家、2022 年 11 月 4 日）

十一　供物・縁起物

京都府や奈良県の神社では、特殊神饌のなかに榧の実が用いられるところがある〔丸山 一九九九〕。高野山の寺院では、求聞持法において、本尊を象徴する円盤状のもの、壇・散杖・六器の花・供花・供物など、ほとんどのものに榧の材・枝木・葉・果実などを用いるという〔亀岡 二〇〇九〕。かつらぎ町四郷地区の堀越観音では、現在でも正月に餅などと榧の実を紙に包んで供えている。これをオヒネリと呼んでいる。

在家の家々でも、榧の実を正月などに供えるという習俗がある。こうした風習は、柳田国男のほか、植物学者なども述べている〔柳田 一九四五、牧野 一九五六など〕。正月に供える木の実の分布をまとめた松山利夫によると、榧を供えるのは東日本に多く、鹿児島県ではイヌガヤを供える事例があるという〔松山 一九八二〕。

高野山麓の九度山町慈尊院地区では、江戸中期に正月の贈答品に榧の実を送る記録が残っている〔九度山町史編纂委員会 二〇〇〇〕。民俗報告としては、有田郡の事例が報告されている〔笠松 一九二七〕。

筆者の調査では、正月に供える鏡餅の周囲に榧の実を置く家は高野山麓一帯で確認できた（口絵写真84）。また、みかん・串柿とともに榧の実を半紙などに入れて包んだもの（ツツミ・ツツミモン・ツツミガシなどと呼ぶ）を、家の各所の「神さん」に供える家もあった（写真11-1）。同じように正月に榧の実を供える事例ではあるが、両者には若干の地域

写真 11-1　ツツミガシの中の榧の実（紀美野町毛原中の神崎家、2023 年 1 月 4 日）

差が認められる。鏡餅の周囲に榧の実を置くのは高野町周辺に分布し、半紙に榧の実を包んで供えるのは紀美野町を中心に分布しているようである。正月に田畑の神を祀るツクリゾメに供える家もあった（紀の川市下鞆渕の面家家、紀美野町滝ノ川の東平家）（口絵写真85）。東平家では、キリゾメにも同様にして榧の実を供えていた（口絵写真86）。榧がない家では、榧の木がある家から実をもらって供えることもあった。食べるというよりも、正月に供えるので榧を拾ってきた、という家もある。ただし、この習俗は、榧の実が手に入る家に限られていたようで、筆者が聞き取りをした限りでは、高野山麓全体では榧よりも栗を供えたという家のほうが多いように思われた。また、正月用品として売っている榧の実を買って供えていた家もある（橋本市向副、高野町富貴地区、同町上筒香、同町西郷）。

高野町西富貴の井阪祥春氏は、「カヤはたくさん実がなるので、代々続くようにという意味」であるという。有田川町楠本の橋本雅之氏は、「吉祥もんやさけ（吉祥物だから）。繁栄していくように、種もん（種がある実）ばっかり供えた」と語る。

正月の事例よりも少ないが、盆に榧を供えたという家もあった（かつらぎ町新城、紀美野町毛原上、同町毛原下、同町滝ノ川、同町中）。紀美野町滝ノ川の東平家では、現在でも里芋の葉の上に榧の実が二つ連なり二股になっている部分を供える（口絵写真87）。

地域の行事で榧を供える事例もみられる。九度山町椎出の地蔵寺では一月五日の護摩祈祷で、竹串につけた榧の実を円座に突き刺している（口絵写真88）。

また、漁師の縁起物として榧の実が重宝されることもあった。水上で榧の実が浮くため、漁師がほしがった、という（紀美野町中田、有田川町楠本）。

十二　用材・道具

榧は古代には弓、丸木舟、仏像などに利用することがあった〔伊東　一九九六〕。また、榧材は保存性が高く、水湿によく耐えることから建築材では土台、浴室用材に、器具材では桶類、とくに風呂桶に利用され、材が緻密で光沢がよく香気があることを利用して、漆器板物木地、仏像、念珠、床柱などに利用されてきた〔中野　一九九六〕。さらに、碁盤・将棋盤の材として榧材は珍重されてきた〔農商務省山林局　一九一二〕。とくに、古代の仏像の樹種調査が進められた結果、八世紀～一〇世紀の仏像では榧材の一木作りが多いことが分かってきたという〔金子ら　二〇〇三、鈴木　二〇〇四など〕[16]。

高野山麓一帯では、寺社の用材として榧の木材を利用することがあった〔教良寺八幡神社正遷宮委員会　一九九七、紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。毛原中の前田家に残された「榧ノ木ノ由来」には、「其頃杉檜ノ材少ク故栢ノ木材家並橋梁材ニ用イラレ故ニ栢木伐リタヲシタリ」と記されている〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。「其頃」とは、明治一〇年ごろまでを指している。江戸から明治初期にかけては、杉・檜は少なく、榧材で家や橋を作っていたという。山元晃氏は、榧で作った臼を、かつらぎ町の市峠付近で見ている〔山元　二〇一五〕。筆者の調査では、紀美野町毛原中の大日堂の縁板に、昭

写真 12-1　大日堂（紀美野町毛原中、2023 年 1 月 4 日）

和三〇年代に同地区の神崎家が榧を提供したことを確認した（写真12‐1）。

聞き取り調査では、家の建材として利用してきた事例を多数確認した。高野町富貴地区では、「ウドの大木、柱にならん。細ても榧の角柱」、という言い伝えがある。また、かつらぎ町四郷地区などでも榧の柱を使っている家は自慢していたという。材として使用できるほど、榧が多くはなかったことを示している。一方で、紀美野町毛原地区・同町国吉地区、有田川町杉野原では家の縁板に榧を使っている事例が多い。なかでも、その家の上の間（神棚・仏壇・床の間がある間）の縁板に使っている（口絵写真89）。同じ家でも下の間の縁板にはほかの木を使っているという事例が多い。こうした事例からは、紀美野町毛原地区・国吉地区では、家々の縁板に使用することができるほど榧の木が豊富にあったということが分かる。ただし、下の間の縁板まで榧材で敷くことができなかったようであり、下の間は他の木材を利用している家が多かった。その他、腰板、戸袋、柱、ダイワに榧材を使っている家もある（口絵写真90、写真12‐2～3）。榧は腐りにくいため、水がかかるところに使用するという語りもあった。そのため、家の外周りに榧材を用いることがあった。有田川町下湯川の大久保家では、玄関の敷居、玄関の柱な

写真 12-2　榧の腰板（紀美野町滝ノ川の東平家、2022 年 11 月 4 日）

写真 12-3　榧の戸袋（紀美野町中田の西浦家、2022 年 9 月 30 日）

写真 12-4　榧の玄関敷居（有田川町下湯川の大久保家、2022 年 6 月 23 日）

写真 12-5　榧の部材（かつらぎ町花園梁瀬の久保家、2022 年 9 月 2 日）

写真 12-6　榧の部材（紀美野町毛原中の神崎家、2023 年 1 月 4 日）

ど、家の各所に榧の材を使っている（写真12‐4）。家宏氏が子どものころ、家の裏に長さ六尺ぐらいで四寸八寸の榧の角材（この角材をシハチと呼ぶ）がたくさん置いてあったという。ほかの家でも、榧の木を伐採したり、枝を切ったりした際には、部材を保管してさまざまな用途に利用してきた（口絵写真91、写真12‐5～6）。伐採した木の一部を利用して、臼、机、まな板、植木鉢などに加工したり、将棋盤・碁盤を取ることもあった（口絵写真92、写真12‐7～8）。

伐採するときには、みかんを剥くような形で十字に割るという。これをみかん割りと呼んでいる。[17] このように割ると、柾目が取れ、碁盤・将棋盤を取ることができるという。

このほか、鮎捕りのタモの材に榧の枝を利用することもあった（高野町・紀美野町・有田川町）。榧の枝はほかの木と異なって十字に出ているため、タモに最適であるという。

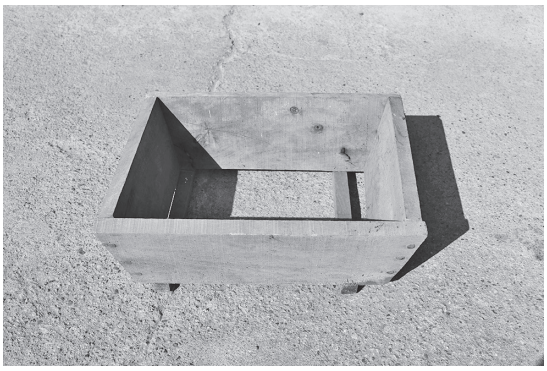


写真 12-8　榧の植木鉢（紀美野町小西の大家家、2022 年 11 月 28 日）

写真 12-7　榧の臼（紀美野町谷の西上家、2022 年 10 月 3 日）

碁盤・将棋盤については、昭和中期から後期にかけて、県外の業者が購入、伐採して、作成・販売したという。とくに、紀の川市、紀美野町、有田川町では、昭和中期以降に大量の榧が碁盤・将棋盤への利用のために売却・伐採された。

十三　その他

榧を養蜂に利用することもあった。このような事例は、文献で確認することはできなかった。しかし、筆者の調査では、高野山麓の山間部において確認できた。有田川町板尾の松浦氏は、榧の株には蜜蜂が巣を作りやすいと語る。松浦氏は、榧のためには、蜜蜂が巣を作らないほうがよいといい、蜂を外へ誘導している（写真13‐1）。一方、榧の根元に養蜂の箱を置くと蜜蜂が入りやすいなどと語られることもある。蜜蜂が好むのは榧の木だけではないという人もいるが、榧の木の根元に蜜蜂の巣箱を置いている人たちもいる（紀美野町毛原下・同町滝ノ川・同町津川）（口絵写真93、94、写真13‐2）。紀美野町毛原中の上柏晥亮氏は、養蜂の筒状の巣箱（マルオケ）は榧で作ると一番よく入ると語る。

実を笛にして遊んだという事例も

写真 13-1　松浦家の榧と蜜蜂の巣箱（有田川町板尾、2022 年 12 月 22 日）

写真 13-2　上中家の榧と蜜蜂の巣箱（紀美野町滝ノ川、2022 年 11 月 11 日）

ある。実をこすって穴をあけ、吹いて音を鳴らして遊んだ、という（紀美野町滝ノ川・有田川町沼谷・同町宮川・同町楠本）。

昭和中後期には、榧の木の枝をクリスマスツリーに利用したという人もいる（かつらぎ町山崎）。

十四　考察

1．分布と立地

高野山麓を広く調査すると、とくに山間部には現在でも榧の大木が多数現存していることが分かってきた。地図1をみると、四郷地区、鞆渕地区、上神野地区、小川地区、生石を結んだ線よりも東側に榧が多く、反対にこの線よりも西側には榧は少ない。紀美野町東部の毛原地区・国吉地区にはとくに濃密に分布している。有田川町東部にも多数の榧が残っている。ただし、こうした分布はあくまで現状のものである。聞き取り調査から判断すると、昭和初期ごろまでは高野山麓の山間部には相当量の榧があったと思われる。高野山麓の山間部の人々にとっては、榧は身近な樹木であった。ただし、広義の高野山麓で見た場合、平野部になると榧は少ない。平野部の場合は、農業や商工業など、別の生業が中心の生活を営んできたため、積極的に榧を植えてこなかった可能性が高い。まれに大木になった榧があった場合でも、田畑の陰になる、周囲の迷惑になる、倒木の恐れがある、などの理由で伐採されることがあった。しかしながら、平野部における榧の大木は、人目につきやすく、珍しいものであったため、昭和初期以降の天然記念物指定の際には、紀ノ川平野周辺の榧が多数指定されることになった。

榧の種類は、カヤ、ヒダリマキガヤなどがある。高野山麓全体ではカヤが多いように思われる。ヒダリマキガヤは貴志川上流域（紀美野町東部）や有田川町上流域を中心に集中的に分布し、そのほか紀ノ川南岸や真国川流域にも点々と存在しているようである。聞き取りから判断すると、実が大きく油の量も多いヒダリマキガヤは接ぎ木で増やしていったと考えられる。植物学的には重要視されないが、シブナシガヤというものもある。渋がなく食べやすいというが数は多くない。ただし、紀美野町と有田川町の一部に集中していたため、この地域ではシブナシガヤを接ぎ木で増やした可能性がある。

高野山麓の山間部のなかでも、集落ごとに榧は均質に分布していたわけではない。文献と聞き取りから判断すると、かつて榧が多かったのは、かつらぎ町山崎、紀の川市鞆渕地区などであり、現在に至るまで榧が多いのは紀美野町毛原地区・国吉地区である。

榧が多かった集落のなかでも、家ごとに榧の本数は異なっていた。紀美野町毛原地区では、榧が多い家は昭和初期に二〇本程度あったという。それらの家は、山持ちであり、何代か前の先祖があえて榧を植えたという。現在でも、榧の大木の周囲では多くの幼樹が生えている。榧の実を拾って植えることもあったかもしれない。しかし、榧のような成長の遅い樹木の場合は、現代の山村の人々の行動から判断すると、榧の幼樹の苗を移殖することも多かったと思われる。榧は成長が遅いというため、何代かたたないと、材木を

取ることや油を搾ることは難しいという。「植えるあほうに切るあほう」というような言葉は、榧の木を見てきた人々から自然に発生した民俗知識をもとにしていると思われる。

現在、大木になっている榧の木は家の周辺などに多い。分類すれば、①家の周囲、②里地・里山、③山林、④神社・寺院・小祠、⑤道沿い、⑥墓地、などに立地している。旧家の屋敷に覆いかぶさるように榧の大木がある場合も多い。家の近くなどの榧を大きく残すことで、日よけ・風除け、土砂崩れ防止などにもなり、実を拾いやすいという利点もあった。

当初から、そのような場所に植えたということもあったかもしれない。しかし、榧がある程度大きくなってくると、そのまま育つと都合のよくない場所にある場合は伐採された。現在も残っている大木は名前も残っていないような人々が、その木を選んで残してきたということになる。高野町東富貴の稲葉氏は、榧の実が落ちて自然に生えてきた小さな芽をオロカと呼んでいる。生えてきた小さな芽を最初は気にしてないという。「じゃまになってくると、残そか、切ろか、と考える。残っている木は運がよかった。畑のはしに生えても草刈るときに刈られてしまう。土地に条件が合わんと育たん」と語る。自然に生えた芽の多くは人によって抜かれる・刈られる、土地が合わずに枯れる、などで淘汰されていった。運よく榧の木が一定程度大きくなると、伐採することに大きな決断が迫られるようになる。風除け・土砂崩れ防止などの即物的な効果のみならず、心意的な支えという要素が加わってきたとき、名前も伝わっていない多くの人々の思いが受け継がれ、大木が残されてきたといえよう。なお、昭和中後期に伐採されなかった榧は、当主などの家人が反対した、樹幹に空洞がある、樹形が曲がっているため価値が低い、道までの搬出が困難、などの理由などで残ったという。

2. 民俗的なかかわり

高野山麓のなかでも、四郷地区、鞆渕地区、上神野地区、小川地区、生石を結んだ線よりも東側に榧の民俗文化が濃密であり、西側では希薄となっている。これは、榧の植生に関係している。そのうえで、高野山の寺領であった地域では、榧を植栽して利用するようになったため、自然的な生育条件と歴史的な背景が重なって、高野山麓の東部で榧の民俗文化が濃密になったと考えられる。

聞き取り調査で確認した結果、高野山麓では、榧の実・枝葉・幹について、さまざまな利用をおこなっていたことが分かった。実は、食用（炒って食べる、和え物、食用油）、薬用（実、油）、灯明油、供物に利用した。枝葉は蚊除け、幹は建材（縁板）、民具（臼・まな板・机・タモ）、碁盤・将棋盤、仏像などに利用した。このような多様な榧とのかかわりがあったからこそ、榧に関する民俗知識が存在していた。

ただし、手入れなどに関する知識は豊富ではなかった。接ぎ木で増やしたというが、現在において接ぎ木を伝承している人は限られている。おそらく、昭和初期ごろまでは重要な産物であったため、植栽したり、接ぎ木をする人も多数いたと思われる。しかし、その後は産物としての価値が下がったため、残っている大木から実を採ることだけを続けていたと思われる。また、榧の木は成長が遅いため、より成長が早くて収益を得やすい杉・檜や、山椒・柿などに重点が移っていったと思われる。したがって、榧の手入れなどに関する知識はあまり残っていないのであろう。

一方で、実の収穫や、拾った実を処理して食べることについては家ごとに知識があった。昭和中後期から平成にかけての時期にも、家に榧がある場合は榧の実を拾い、榧の実を食べることが多かった。榧の実は、秋の農繁期に実が落

ちるため、榧の実拾いは稲刈りと競合したという。このため、子ども・老人などが中心で実を拾ったり、実を集めておいてまとめて拾うなどの工夫をしていた。食べ方は、あく抜きをして炒って食べるという方法が一般的であった。紀美野町毛原地区・国吉地区を中心に、榧の実を摺って野菜や味噌と和える、カヤカバシという食べ方も存在した。

榧の実から油を搾ることもあった。紀美野町東部（毛原地区・上神野地区）では昭和後期まで、近所から頼まれると榧油を搾る家があった。現在でも道具が残っている家もあり、過去に榧油を搾った体験者から話を聞くこともできる。高野山麓の山間部では、明治時代ごろまでは榧油を搾る家が多数存在していたと考えられる。搾った榧油は自家用で料理に使う場合がほとんどであった。昭和中期以降は、榧油を販売することはごく限られた事例のみになっていた。

榧の材は、家などの建材に用いられてきた。伐採した場合、一部を用いて臼などの道具を作ることもあった。とくに、紀美野町毛原地区・国吉地区の家では、縁側に榧の板を使用している事例が多い。

榧の利用として珍しいのは、養蜂に用いることである。蜜蜂は榧の木の空洞に巣を作るといい、榧の根元に巣箱を置くとよく入るという。こうした事例は、文献でも確認することができないものである。高野山麓の人々の、榧に対する知識の一端が垣間見える。

以上のような榧に関する民俗文化は、高野山麓東部一帯で均質に広がっているわけではない。大きく分けると、紀ノ川・真国川流域と貴志川・有田川流域でも差異が認められるようである。紀ノ川・真国川流域では榧の材を使った家は少なく、貴重であると語られる。一方、貴志川・有田川流域では民家に榧の部材を使っている事例が多く、民具などにも利用している。また、紀ノ川・真国川流域では寺院や神社などに榧がある事例が多数存在するが、貴志川・有田川流域においては寺社などに榧がある事例は少ない。貴志川・有田川流域のほうが、榧は非常に身近な存在であったようで、植栽を続けながら、利用してきた木であった考えられる。[18] 筆者が調査したなかでは、とくに紀美野町東部において、食用・搾油・用材利用などを中心に民俗知識が豊富に伝承されている。この地域では、現在に至るまで榧の木が多く存在し、昭和後期まで搾油を行う家があったことが特徴的である。

3．歴史的変遷

榧の木は杉・檜だけではなく、楠などと比べても成長が遅いため、聞き取り調査では植栽などに関する経緯や知識を聞くことが困難である。しかし、榧の大木の立地状況などから、一〇〇〇年単位の歴史を推測することが可能となる。一方で、榧の歴史を実証するための史料・文献は限られている。残された史料としては、榧油に関する内容が多く、材としての利用に関する記録がわずかに残されている程度である。ここでは、聞き取り調査を中心にして、断片的な史料、榧の分布・立地、民俗的なかかわりを総合して考え、以下のような歴史的な変遷を仮説として提示しておきたい。

紀伊山地には古くから榧の仲間が自生していたと思われる。榧を材として利用することや、犬榧の油を灯明用に利用することは古代からおこなわれ、とくに平安初期には、一木造りの仏像用材として榧の大木の伐採が進んだ。空海が高野山を開創した九世紀には、高野山周辺でも榧の大木を伐採して仏像を作り、犬榧の実を搾って油を作ることがあったのではなかろうか。平安初期以降、紀伊山地では榧が枯渇しはじめ、同時に高野山での灯明用の榧油が大量に必要となったと考えられる。榧の場合は犬榧よりも実が多く、油は食用にもな

るため、高野山麓では榧を意図的に植えるようになったと思われる。現在、かつらぎ町花園梁瀬の久保家の榧は樹齢九〇〇年から一〇〇〇年といわれており、紀美野町毛原地区では明治初年に一〇〇〇年の榧があったという〔紀美野町美里町誌編纂委員会　二〇〇七〕。したがって、平安時代に榧を育てようとした動きがあったと推測できる。かつらぎ町山崎の榧蒔石の伝承は、時代は不明であるが、高野山麓で榧を意図的に増やしたことを物語っている。

現存する榧の樹齢や立地から判断すれば、鎌倉時代から室町時代にかけて高野寺領やその周辺の村々で次々に植えられていったと考えられる。たとえば、紀美野町毛原中の神崎家で、一九八六年に伐採された榧が、周囲四メートル二〇センチで年輪を数えると約六〇〇年であったことが参考になる。単純に計算すれば、この榧は南北朝時代（一四世紀）ごろに植えられたものと推定できる。神崎家の榧を参考にすれば、幹周が四メートルを越える榧については、おおよそ六〇〇年以上の樹齢があると推定することができる。なお、高野寺領は中世から近世になると縮小されるが、紀ノ川北岸や有田川流域など、中世までの高野寺領の周辺にも榧は分布しており、中世に榧を植えた名残りではないかと推定できる。

文書と伝承から判断すれば、榧は江戸時代にも高野寺領で集中的に植えられたと考えられる。幹周が三メートル程度で、樹齢がおおよそ三〇〇～四〇〇年と推定される榧も多いことから、江戸時代には次世代のことを考えて、高野寺領（近世）において積極的に植栽がおこなわれたのではないかと思われる。そして、毛原・国吉地区および有田川町（旧清水町）ではより実が大きいヒダリマキガヤを接ぎ木などによって増やしたと推測できる。ただし、江戸時代に油を生産した榧は、少なくとも江戸初期以前に植えられたものであった。近世の高野寺領では榧油は高野山へ納めるものとなっていた。とくに、山崎、鞆渕、毛原、長谷は榧油の産地となった。また、高野山に納める以外は榧油の販売も可能であったようであり、山村における貴重な収入源でもあったと考えられる。なお、近世高野寺領の外側（周辺）の地域でも、榧を植えることがなくなったわけではないと思われる。中世までの高野寺領では高野山とのつながりが近世になって断絶することはなく、現在に至るまで高野山へ納骨に行く習俗が根強く残っているところもある。こうした地域では、近世以降も高野山へ往来する機会があり、高野山の影響を受けつつ、榧を活用してきたと考えられる。

江戸時代から明治時代、高野山では榧油は食用油として名物になっていた。昭和初期ごろまで、高野山では灯明の油に使用した。江戸から昭和中期にかけての時期にも、榧の木を建材に活用することがあったが、制限しながら伐採していたようである。建材などに利用したのはおもに山林の榧、神社の修復には神社の山の榧を利用した。かつらぎ町山崎では明治以降に榧を伐採していき、みかんなどの果樹栽培に転換していった。明治から昭和初期まで、毛原地区・国吉地区では榧の実、榧油は特産品であり、重要な収入源であった。家屋敷や、屋敷周辺の山に植えた榧をおもに利用していた。屋敷の榧は、実の利用とともに、防風・土砂崩れ防止や家の守り神的な存在として、意図的に残したと思われる。昭和初期には、各家で自給的に実・油の食用・薬用、蚊除け、供え物などに利用してきた。昭和後期までは毛原地区では榧油を搾る家が存在した。

昭和中期、碁盤・将棋盤にするために業者が買い付け、高野山麓一帯の榧の木は大量に伐採された。昭和中期以降、榧の木は自給的な利用が衰退して価値が低下した。売却されたもの以外は放置されることが多くなった。榧を植栽した山では棕櫚などの利用もなくなり、杉・檜が植林され、榧は杉・檜に圧倒さ

れて弱っている。しかし、現在では、天然記念物指定として、また高校生が作ったハンドクリームの原料（櫨と榧）としても注目され始めている（口絵写真95）。榧（カヤノキ）は、高野山麓の歴史と民俗の貴重な証人であるとともに、新たな活用が模索され始めている。

おわりに

筆者は二〇年以上にわたって高野山麓を調査してきたが、過疎化・高齢化および世代交代が進み、濃密な民俗文化の語りを聞く機会が減っている。そのようななかでも、榧の木に注目することで、断片的な語りや、語られないことなどもつなぎあわせて、大きな歴史的な変化を推定することもできることが分かった。本稿では、今後の民俗調査のあり方を探ることもできたと考えている。

一方で、当然ながら残された課題も多い。広範囲に高野山麓の榧を調査したが、榧の情報を網羅できたわけではない。高野山麓の榧の民俗をより正確に把握するためには、今後も榧の情報を追いかけ続ける必要がある。また、植物学的な調査、文献史料の調査、搾油に関する道具の調査も必要である。搾油に関しては、和歌山県における木蝋を含めた実態解明が求められる。さらに、高野山麓を広範囲にながめるだけでなく、家や集落ごとにミクロな視点で考察することも重要である。このような課題を考えつつ、今後も高野山麓の民俗調査を継続していきたい。

（注）

（1）和歌山県北部に残る歴史史料のなかで、カヤのことは「榧」、「栢」などと表記されている。本稿では、基本的に「榧」の表記をする。ただし、植物名の場合はカタカナ表記とする。

（2）たとえば、特定の植物について文化史的にまとめている法政大学出版の「ものと人間の文化史」シリーズにおいても、榧を単独で扱った書籍は今のところ刊行されていない。

（3）紀美野町教育委員会提供の天然記念物指定時の資料による。

（4）かつらぎ町教育委員会、および山元晃氏提供のかつらぎ町での企画展関連の資料による。

（5）和歌山県南部にも榧の大木は報告されているが〔紀伊民報　二〇一五〕、坂口和昭氏（和歌山県林業試験場副場長）、上野一夫氏（串本町）、山元晃氏などからのご教示によると、県南部には榧は多くはないという。

（6）野本寛一は、静岡県浜松市水窪町において、「栃を伐る馬鹿　植える馬鹿」ということわざがあると紹介している〔野本　一九九四・二〇一二など〕。成長が遅い樹木に対して、他地域にも類似した言い伝えがあることが分かる。

（7）紀美野町滝ノ川の東平家からは、東に毛原下の石ヶ峰・寺原集落、西北に谷（国吉地区）の山と家々が見える。口絵写真16は谷（国吉地区）方面を望んだもので、写真のほぼ中央に上南家と榧が見えている。写真15は、東平家の前から毛原下の石ヶ峰を望んだものである。写真最下部の家は美野家で、家屋の右手に美野家の榧が見えたと思われるが、現在では成長した杉に隠れて見えなくなっている。以上から、杉・檜の植林が進んだ昭和中期までは山の対面に立地している隣の集落の榧の大木がよく見えたと思われる。

（8）西浦史雄氏によると、天然記念物調査の際、アブラガヤと呼ぶ人がいたという。ただし、どの地区の方であったか覚えていないという。この名

称は筆者の調査ではこの名称を聞き取ることができなかった。

(9) 筆者も榧の実を持ち帰り、種を蒔いて観察した。自然科学的な観察をしたわけではないが、翌年に生えるものは少なく、二年後に発芽する確率が高いように感じた。

(10) 紀美野町教育委員会の協力のもと、藤森寛志氏（和歌山県文化遺産課）・木谷智史氏（当時：有田市教育委員会）らとともに二〇一九年一一月二一日に野上接待講の調査をした際に野上接待講所蔵の文書を拝見した。

(11) 畔田翠山は『野山草木通志』のなかで、長さが短い実のほうを搾る、と書いているがこの理由は明確ではない〔安田　二〇〇一〕。山元晃氏によると、油の量としては実が長くて大きいヒダリマキガヤのほうが多いが、油の質は落ちるという。したがって、大量に必要な灯明用の油としてはヒダリマキガヤが用いられたが、食用としての油には実が短いカヤが好まれた、ということを示しているのかもしれない。

(12) 現在、上中家は海南市で運送会社を経営している。

(13) 「徳島県那賀郡長谷毛原村」は「和歌山県那賀郡長谷毛原村」の誤記と考えられる。徳島県には「那賀郡」は存在するが、「長谷毛原村」が存在していない。

(14) 浦野家の搾り機については、現在、和歌山市立子ども科学館で保管している。紀美野町毛原下の作嶋家の搾り機は、昭和四〇年ごろに、当時大阪府豊中市にあった原野農芸博物館に寄贈された。博物館に問い合わせたところ、同館が鹿児島県奄美大島に移転したのちに水害で流失したようである。

(15) 蚊取り線香は、和歌山県有田地方を中心に明治後期から作られるようになり、昭和初期以降に量産され始め、昭和中期以降に広く普及した〔三和インセクティサイド社史編纂委員会　二〇一九〕。

(16) 古代の仏像に榧を使っていることは大河内智之氏（奈良大学、元和歌山県立博物館）にご教示いただいた。大河内氏によると、高野山および、高野山麓にも榧で作られた仏像があるといい、榧が枯渇してきたために仏像は檜で作られるようになったのではないか、という。

(17) 和歌山県（とくに有田地方）では、みかんを食べるとき、皮ごと四分割するという剥き方がある。このようなみかんの剥き方に似ているため、みかん割りと呼んでいると思われる。

(18) 高野山麓一帯に広がっている高野山に納骨する習俗の場合は、平野部の紀ノ川流域と山間部の貴志川・有田川流域に差異があり、富貴から真国川流域にかけての地域は紀ノ川平野と類似した習俗が分布する〔藤井　二〇一七〕。榧の民俗の場合も、富貴から真国川流域にかけての地域は、紀ノ川流域と、貴志川・有田川流域の移行地帯と位置付けることができる。

（参考文献）

伊東隆夫　一九九六　「遺跡に見るカヤノキの利用」『林業技術』六四八
上原敬二　一九六一　『樹木大図説Ⅰ』　有明書房
大浦万吉　一九四八　『黄金之花』　新潮社
小川由一　一九五八　「紀伊高野山植物誌」『信愛紀要』二（一九七三　『紀伊植物誌　Ⅰ　―紀州路の植物と民俗をたずねて―』　紀伊植物誌刊行会　収録）
小川由一　一九七七　『紀伊植物誌Ⅱ　―高野山の植物―』　紀伊植物誌刊行会
海南市文化遺産活用実行委員会編　二〇一五　『大窪の笠踊り調査報告書』　海

南市文化遺産活用実行委員会
笠松彬雄　一九二七　『紀州有田民俗誌』　郷土研究社
金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之　一九九八　「日本古代における木彫像の樹種と用材観―七・八世紀を中心に―」『MUSEUM』五五五
金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之　二〇〇三　「日本古代における木彫像の樹種と用材観・―八・九世紀を中心に―」『MUSEUM』五八三
金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之　二〇一〇　「日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅲ―八・九世紀を中心に（補遺）―」『MUSEUM』六二五
亀岡弘昭　二〇〇九　『はじめての「霊場高野山の植物・動物」入門』　セルバ出版
刈米達夫・木村雄四郎　一九三九　『和漢薬用植物』　薬報社
雁屋哲・花咲アキラ　二〇〇九　『美味しんぼ　一〇三　日本全県味巡り　和歌山県編』　凸版印刷株式会社
紀伊民報編　二〇一五　『木霊の物語』　紀伊民報
北村四郎　一九六八　『滋賀県植物誌』　保育社
紀美野町まちづくり推進協議会　紀美野史発見部会編　二〇二二　『ぶらり・きみの歴史たび』　紀美野町まちづくり推進協議会　紀美野史発見部会
紀美野町美里町誌編纂委員会編　二〇〇七　『美里町誌　史料編　Ⅰ』　紀美野町
紀美野町美里町誌編纂委員会編　二〇一二　『美里町誌　史料編　Ⅱ』　紀美野町
教良寺八幡神社正遷宮委員会編　一九九七　『八幡神社誌』　教良寺八幡神社正遷宮委員会
近畿民俗学会編　一九八〇　「和歌山県伊都郡かつらぎ町天野共同調査報告集（二）」『近畿民俗』八四・八五
九度山町史編纂委員会編　二〇〇〇　『改訂　九度山町史　史料編別冊（1）中橋家文書　日次記』　九度山町
倉田悟　一九六二　『樹木と方言』　地球社
高野町史編纂委員会編　二〇一二　『高野町史　民俗編』　高野町
高野町史編纂委員会編　二〇一四　『高野町史　別巻　高野町の昔と今』　高野町
三和インセクティサイド社史編纂委員会編　二〇一九　『三和インセクティサイド50年のあゆみ』　三和インセクティサイド
清水町誌編さん委員会編　一九八二　『清水町誌　史料編』　清水町
清水町誌編さん委員会編　一九九五　『清水町誌　上』　清水町
杉本つとむ　一九七四　『小野蘭山　本草綱目啓蒙　―本文・研究・索引―』　早稲田大学出版部
鈴木三男　一九九九　「古代の仏像の樹種はカヤであるのか？」『植生史研究』六巻二号
鈴木三男　二〇〇四　「古代の仏像の樹種はカヤであるのか？を再度問う」『植生史研究』一二巻一号
成城大学民俗学研究所編　一九九〇　『日本の食文化　―昭和初期・全国食事習俗の記録―』　岩崎美術社
高松和弘　二〇一八　「厄介者で村おこし　カヤの実で作るフレグランス＆ローストナッツ」『現代農業』八六六
築野政次　二〇一二　『生かされて九十年』　海風社
内務省編　一九二二　『史蹟名勝天然紀念物調査報告』三二

中野達夫　一九九六　「カヤ材の組織と材質」『林業技術』六四八
中山典之　一九九六　「榧の碁盤と棋士」『林業技術』六四八
奈良県教育委員会編　一九五六　『奈良県指定文化財』一　奈良県教育委員会
奈良県教育委員会編　一九五八　『奈良県指定文化財』三　奈良県教育委員会
仁井田好古編　一九一〇a　『紀伊続風土記　一』　和歌山県神職取締所（一九九〇　臨川書店　復刻）
仁井田好古編　一九一〇b　『紀伊続風土記　二』　和歌山県神職取締所（一九九〇　臨川書店　復刻）
仁井田好古編　一九一〇c　『紀伊続風土記　五』　和歌山県神職取締所（一九九〇　臨川書店　復刻）
西本誠一郎　一九九六　「碁盤・将棋盤業界の動向」『林業技術』六四八
「日本の食生活全集　和歌山」編集委員会編　一九八九　『日本の食生活全集30　聞き書　和歌山の食事』　農山漁村文化協会
日本和洋酒缶詰新聞社編　一九二九　『全国飲食料品仕入案内　昭和五年度版』　日本和洋酒缶詰新聞社
農商務省山林局編　一九一二　『木材の工芸的利用』　大日本山林会
野本寛一　一九九四　『共生のフォークロア　民俗の環境思想』　青土社
野本寛一　二〇〇五　『栃と餅　食の民俗構造を探る』　岩波書店
野本寛一編　二〇一一　『食の民俗事典』　柊風舎
野本寛一　二〇一二　『自然と共に生きる作法　水窪からの発信』　静岡新聞社
野本寛一　二〇二〇　『採集民俗論』　昭和堂
橋本市郷土資料館友の会（「林かん」）編　二〇〇二　『てくころ文庫　一一　大和街道てくてく散歩（橋本～神野々）』　橋本市郷土資料館友の会（「林かん」）
深津正　一九八三　『燈用植物』　法政大学出版局
深津正　一九九六　「日本人とカヤノキ」『林業技術』六四八
藤井弘章　二〇一四　「民俗調査からみた神野・真国荘地域の生業」高木徳郎編『紀伊国神野・真国荘地域総合調査』（平成二三年～二五年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書　研究課題「紀の川流域における中世荘園の地域環境史的研究」研究代表者　高木徳郎）
藤井弘章　二〇一七　「高野山納骨習俗の地域差　―和歌山県北部を中心に―」『民俗文化』二九
藤井弘章　二〇二二　「和歌山県有田川上中流域における櫨の民俗　―櫨の栽培・採取に関する民俗技術の継承―」『民俗文化』三四
堀田満　一九九六　「カヤのたどった道」『林業技術』六四八
堀内信編　一九三二　『南紀徳川史』一一　南紀徳川史刊行会
前田亥津二　二〇〇五　『美里の自然』　美里町教育委員会
牧野富太郎　一九五六　『草木とともに』　ダヴィッド社
松山利夫　一九八二　『ものと人間の文化史　四七　木の実』　法政大学出版局
丸山悦子　一九九九　「近畿地方における神社の神饌にみる食材の特色」『日本調理科学誌』三二巻四号
三浦伊八郎　一九二五　『林産製造学概要』　成美堂書店
美里町誌編纂委員会編　二〇〇五　『美里町誌　自然編　わたしたちの町』　美里町
南方熊楠　一九二七　「実のなき栢をあらす」『彗星』二年一〇号（南方熊楠一九七二　『南方熊楠全集』四　収録）
宮本常一　一九四二　『吉野西奥民俗採訪録』　日本常民文化研究所
諸戸北郎　一九〇三　『大日本有用樹木効用編』　大日本山林会

文部省編　一九四三　『天然紀念物調査報告　植物之部』二〇
矢頭献一　一九六四　『図説樹木学　針葉樹編』朝倉書店
安田健編　二〇〇一　『江戸後期諸国産物帳集成Ⅹ　大和・紀伊』科学書院
柳田国男　一九四四　『火の昔』実業之日本社
柳田国男　一九四五　『村と学童』朝日新聞社
山元晃　二〇一五　『自然の扉　世界遺産　高野山町石道の草木花と寄り道』あいり出版
米倉浩司　二〇一二　『日本維管束植物目録』北隆館
米倉浩司　二〇一九　『新維管束植物分類表』北隆館
和歌山県編　一九二七　『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』六　和歌山県（和歌山県編　一九七四　『和歌山県文化財調査報告書』二　歴史図書社　収録）
和歌山県編　一九三〇　『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』九　和歌山県（和歌山県編　一九七四　『和歌山県文化財調査報告書』三　歴史図書社　収録）
和歌山県編　一九三五　『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』一四　和歌山県（和歌山県編　一九七四　『和歌山県文化財調査報告書』五　歴史図書社　収録）
和歌山県編　一九三六　『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』一五　和歌山県（和歌山県編　一九七四　『和歌山県文化財調査報告書』五　歴史図書社　収録）
和歌山県編　一九三九　『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』一八　和歌山県（和歌山県編　一九七四　『和歌山県文化財調査報告書』六　歴史図書社　収録）
和歌山県民話の会編　一九八二　『きのくに民話叢書　2　紀ノ川の民話　伊都編』和歌山県民話の会
和歌山県民話の会編　一九八五　『きのくに民話叢書　4　高野花園の民話』和歌山県民話の会
和歌山市立子ども科学館編　一九八二　『第6回特別展「くらしと植物」資料』和歌山市立子ども科学館
和歌山市立子ども科学館編　一九八五　『第14回特別展「草木の実とたね」資料　―油をしぼったもの―』和歌山市立子ども科学館
早稲田大学大学院海老澤ゼミ編　一九九九　『紀伊国鞆淵荘地域総合調査　本編』早稲田大学大学院海老澤ゼミ
「すごい！萱の絞り機～高野山麓の植物・企画展」『高野山麓　橋本新聞』https://hashimoto-news.com/news/2014/02/28/20325/（二〇二二年七月五日閲覧、タイトル表記はママ）

（協力者・話者）

本稿に関する協力者・話者を市町村ごとに敬称略で掲載させていただく。所属は調査時のものである。同一地区においては基本的に五十音順とした（協力者の項目は除く）。協力者・話者の方々以外にも多くの方々のお世話になったことで、本稿をまとめることができた。すべての方に対して心より御礼申し上げたい。

〔橋本市〕

（協力者）佐々木彩乃（橋本市教育委員会）、藤田ひとみ（恋野公民館長）、小川寛子（恋野公民館）

（話者）恋野：阪本都紀子
須河：福井茂樹
赤塚：上田悦子
向副：松井カヨ子
賢堂：栢木妙子、栢木一仁
清水：松岡成嘉
西畑：岡本正則、素和治男

〔九度山町〕

（協力者）辻正雄（九度山町教育長）、松島洋（九度山町文化財審議委員）、山本新平（九度山町教育委員）、北浦英樹（九度山町教育委員会）、楠克支（九度山町教育委員会）、安念清邦（慈尊院住職）、児玉康宏

（話者）東郷：扇迫一夫、中谷弘、達谷良章
笠木：嶋田俊昭
椎出：谷口啓司、前滝悟
九度山：栗川学、栗川万須美

〔高野町〕

（協力者）下勝己（高野町史編纂室、現在は高野町総務課）、長岡弘樹（高野町史編纂室、現在は高野山大学学務課）、飯野尚子（高野町史編纂室、現在は高野町教育委員会）、中西知嘉子（高野町福祉保健課地域保健室）

（話者）高野山：小堀祐弘
東富貴：板谷公八、稲葉敦美、奥田弘真、隠地前栄治、隠地前常子、阪口弘和、下垣内操
西富貴：井阪祥春、尾家仞美、岡本幸治、中山武夫、林阪好登
上筒香：大谷敏一、永井雅徳
下筒香：中山富千代、中山博子
樫原：前正雄
杖ヶ藪：西辻平治、西辻恵美子、西辻政親
平原：桝谷武彦、桝谷昌枝
大滝：西喜好、西和江
上湯川：井上實、西浦孝、西岡憲三、西岡郁子
下湯川：安井精一
花坂：上田央夫
細川：井戸坂昌夫
西郷：岩坪綾子、岡田里明、崎山忠二

〔かつらぎ町〕

（協力者）下村克彦（元かつらぎ町教育長）、山元晃、和田大作（かつらぎ町教育委員会）、東和男、向井友啓（堀越観音副住職）、作部屋商店、山本敬三

（話者）東谷：富永、的場八重子
山崎：大原茂明、大原登史子、茶原成次、向山敏弘
教良寺：竹谷友男、前岡一行、前岡眞也
上天野：矢部勝己
下天野：上野寛万、上野豊喜子、奥沢甚兵衛、奥沢佐江子、北静

哉、北真由美、古谷敏晴
御所：大家光代
日高：長岡
志賀：峰均
新城：浦正造、前浦洋子、前浦良信、前浦京子
花園久木：朝本幸夫、朝本照代、五前光司
花園新子：横山小良
花園梁瀬：尾方ヲユウ、久保和子

〔紀の川市〕

（協力者）武部吉宏、田中照巳（鞆淵八幡神社宮司）、田村幸美（紀の川市教育委員会）、土居豊一（粉河町教育委員会、現在は紀の川市鞆渕出張所）、前田正明（和歌山県立博物館）

（話者）上鞆渕：庵上元延、中道春子、前東一美、南浦一美、向竹栄
中鞆渕：土居禮子、土居豊一、前
下鞆渕：面家崇造、面家和代、面家守好、面家武子
桃山町垣内：大西孝治

〔紀美野町〕

（協力者）東中啓吉（紀美野町教育長）、中野卓哉（紀美野町教育委員会）、西浦史雄（紀美野町社会教育委員）、丸谷榮彦、鞍雄介（りら創造芸術高等学校）、志茂梨恵（りら創造芸術高等学校）、佐野豊（和歌山県海草振興局農林水産振興部）、國武晃軌（和歌山県海草振興局農林水産振興部 林務課）、中村有香子（和歌山県海草振興局 農林水産振興部 林務課）、坂口和昭（和歌山県林業試験場）、北裕子、宮崎久（和歌山市立こども科学館館長）土井浩（和歌山市立こども科学館元職員、和歌山生物同好会）

（話者）長谷宮：大和公明、大和博、大和憲子
毛原上：戎谷隆明、森谷隆一
毛原宮：井上隆夫、奥澤光弘、角岡千津子
毛原中：上柏晥亮、上柏長子、神崎博介、宗和重行、前田勇人、丸尾京子
小西：大家啓延
毛原下：石井美幸、尾上由美子、作嶋好司、田下雅暎、冨家亘子、中谷キミヨ、中谷康弘、中谷嘉夫、西浦民子、美野勝男、美野啓子
滝ノ川：井谷英雄、井谷洋子、上中祥宏、上中けい子、中浴美保子、中浴啓修、東平正司、東平直子
谷：浦宏子、浦和宏、坂詳隆、坂千賀子、谷田蔦子、谷田幸雄、中尾早子、西上禮伊子、橋戸常年、南出典子
中：前田弘子
松ヶ峰：峯尾佳伸、峯尾弘子
鎌滝：浦野静範
津川：前西宏純
上ヶ井：中尾スミ子、横山美枝
箕六：中谷有希
勝谷：前代清子
円明寺：上北浩章、上北治子
蓑津呂：前坊秀子
東野：伊南益代

西野：赤阪恵子
松瀬：結城嗣郎
中田：西浦玉純

〔海南市〕
（協力者）矢倉嘉人（海南市教育委員会）
（話者）中道一郎、中井富美夫、宮本芳比古

〔有田川町〕
（協力者）杉澤純次、鶴田倫雄（法福寺前住職）
（話者）杉野原：上林祥良、上林洋子、松浦金三、松本博光
板尾：松浦美佐男
上湯川：小松為成、小松久
下湯川：大久保家宏、西脇直次、峰伸汎
三田：西岡實
沼谷：植野克己
沼：松田寿夫
楠本：谷口三和子、鶴田倫雄、橋本雅之、前島義郎
境川：中尾義三、中尾あや子
日物川：柳隆次
東大谷：新林啓作、新林隆
北野川：岩橋よし子、上野保二、前康博、山本洋子
二沢：東本匡弘
粟生：大田貢
生石：清水成子、西尾善次

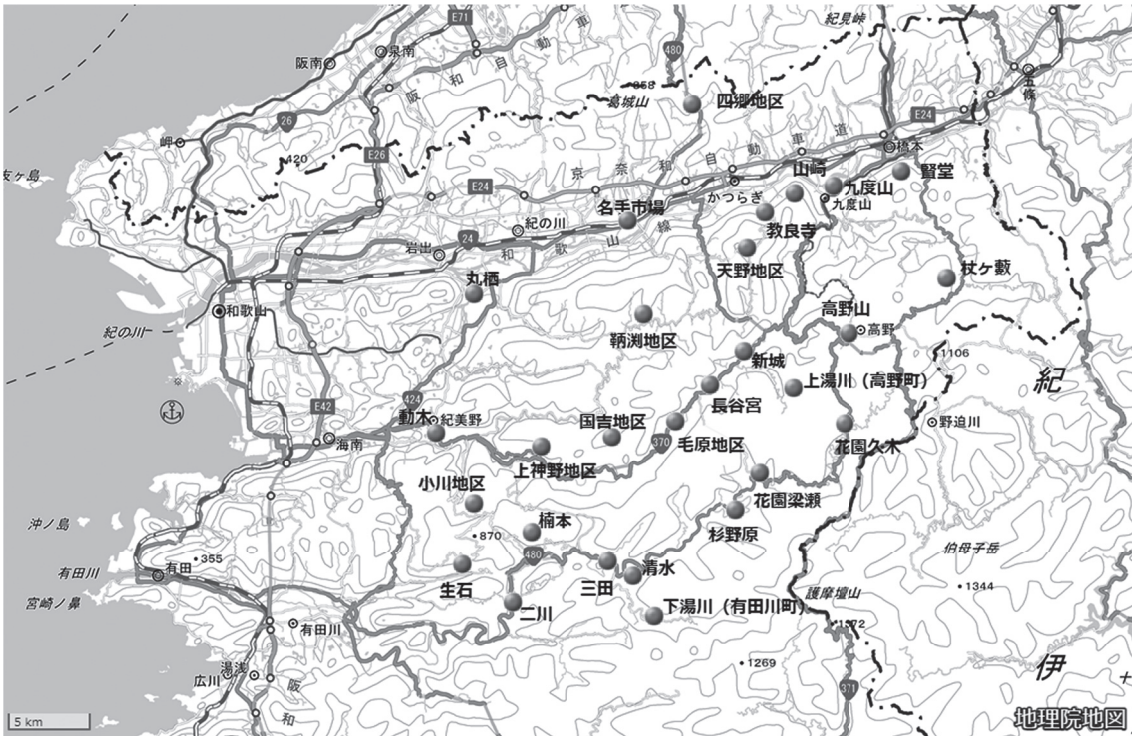
（付記）

本稿の骨格をなす部分の調査は、二〇二二年度に近畿大学において研究休暇を取得させていただいた際に、おもに近畿大学民俗学研究所の調査として実施したものである。ただし、高野山麓における二〇数年間にわたる調査では、民俗学研究所以外に近畿大学文芸学部民俗学実習および、和歌山県立博物館、丹生都比売神社、国学院大学日本文化研究所、和歌山県文化遺産課、高野町教育委員会、科学研究費（代表：高木徳郎氏）、海南市教育委員会、阪本奨学会、などの援助を受けた研究成果も用いていることを付け加えておく。近畿大学文をはじめ、助成をいただいたすべての機関に御礼申し上げたい。

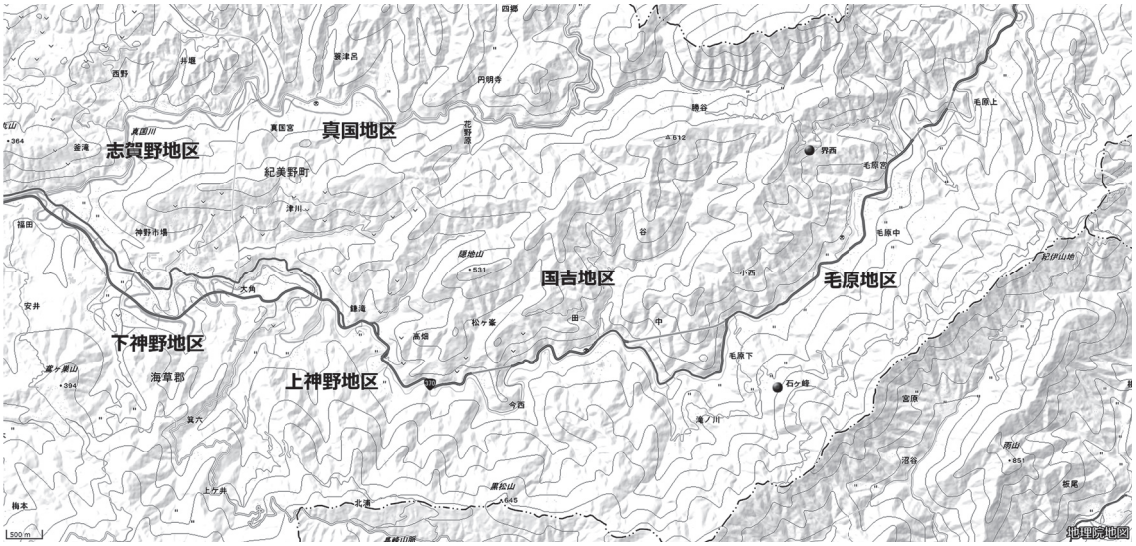
また本稿は、二〇二三年三月一九日、和歌山地方史研究会の大会において、「高野山麓の榧（カヤノキ）をめぐる歴史と民俗」と題する発表した内容を土台にしている。その際に、参加者の方々から、さまざまなコメント、ご教示をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

本稿は、地域の歴史民俗を記述するうえで、個人情報にかかわる内容も含まれている。二〇二二年以降の調査については、原則として話者、情報提供者に確認し、了承いただいていることを付け加えておく。

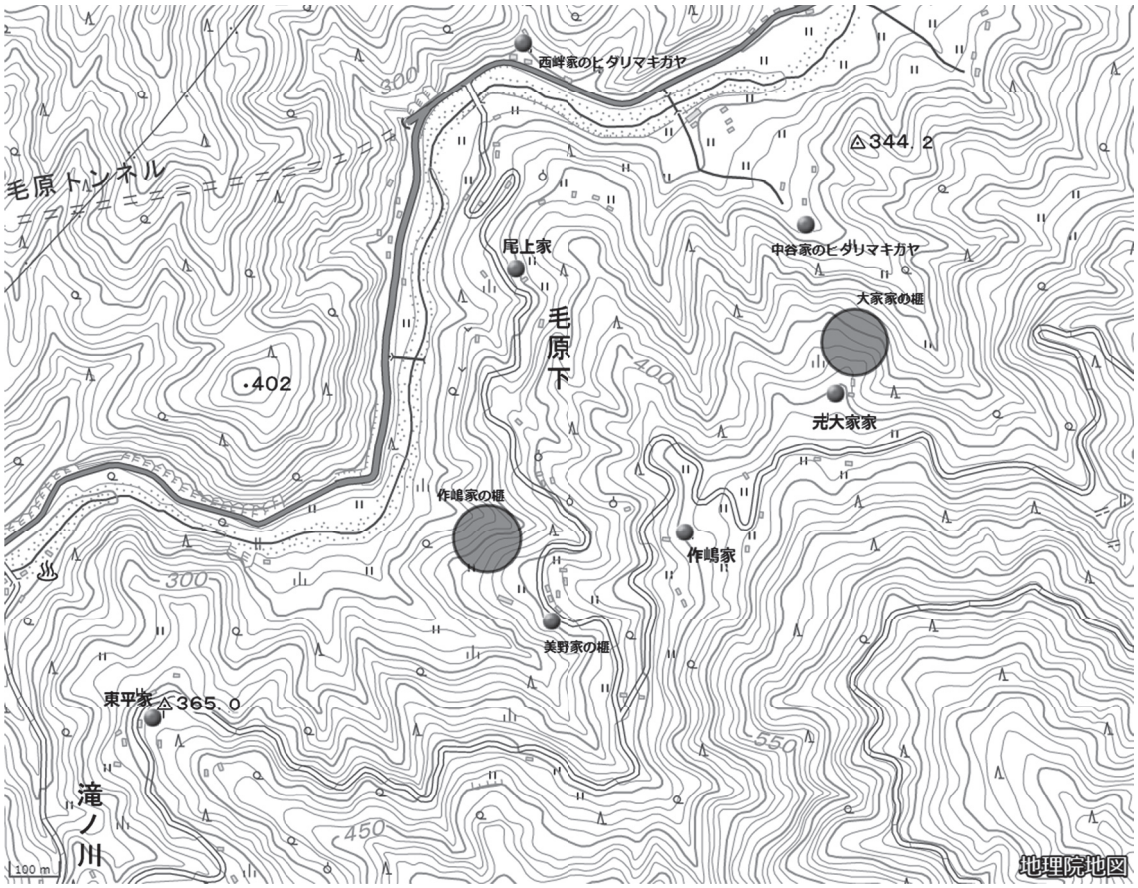
注記がない写真についてはすべて筆者撮影である。



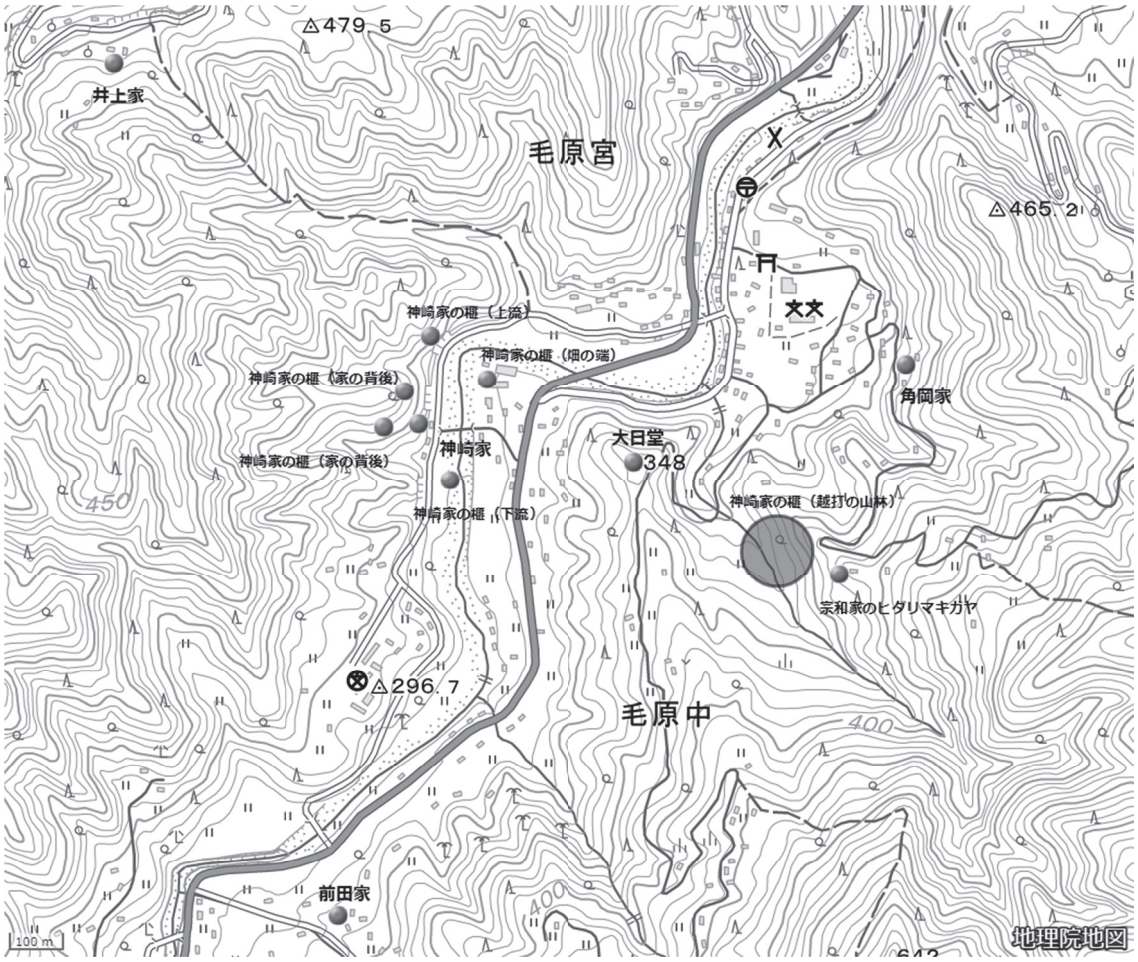
地図１　広義の高野山麓（国土地理院の電子国土をもとに作図）



地図２　紀美野町東部（国土地理院の電子国土をもとに作図）



地図３　毛原下の大家家・作嶋家の榧の分布（国土地理院の電子国土をもとに作図）



地図４　毛原中の神崎家の榧の分布（国土地理院の電子国土をもとに作図）

表１　高野山麓における榧の民俗事例

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
1	伊都郡	紀見村→橋本市	境原	（山元晃）			横手八幡神社付近の道沿い。	１本はカヤで、根元から３本に分かれている。もう１本はヒダヒマキガヤと思われる（山元）。															
2	伊都郡	紀見村→橋本市	細川	（大原登史子）			（細川の実家には榧はなかった。細川のどこかに榧があった。）					祖母が拾ってきた。			細川の実家では榧味噌を食べた。榧の実を擂りつぶし、味噌と和え物にする。胡麻味噌みたいなもの。				細川の実家では、今でも正月にお膳に榧の実を置く。				2023年10月27日
3	伊都郡	橋本町→橋本市	東家		同家はこの地に住み始めて300年ほど。「榧樹ハ其ノ当初植エラレタルモノノ如ク」（和歌山県1930）。	5-1 ～ 2	①堀江家。	幹周は地上５尺のところで９尺７寸。樹高約10間。樹齢は約300年と推定（和歌山県1930）。昭和56年（1981）に橋本市指定天然記念物。平成16年（2004）に指定解除して伐採。					「最早ヤ盛期ヲ過ギテ下リ阪ニアレド毎年多キトキハ五六斗少キトキモ三四斗ノ実ヲ結ブト云フ」（和歌山県1930）。										（和歌山県1930、橋本市郷土資料館友の会2002）
4	伊都郡	山田村→橋本市	出塔					幹周は地上５尺のところで１丈５尺。昭和10年代前半に伐採。															（和歌山県1930・1939）

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
5	伊都郡	恋野村→隅田村→橋本市	恋野（西）	阪本都紀子	「村の西に山王ノ祠あり祠の側に藤の大樹あり　囲七尺あり側に一本あり囲三尺三寸榧の樹を纏ひて上に登る事幾丈を知るへからす」（仁井田1910b）。	5-3	④山王大権現の周囲。	『紀伊続風土記』記載の藤の大樹は現存しない。現在はカゴノキがご神木になっている。祠の背後に榧が１本、前面に幼木が２本ある。				近所なので家で正月に供えるために実を拾った。榧の実を欲しいという友人のためにも拾う。	山王大権現の前の道によく落ちる。	バケツへ水を入れてつけておく。外の皮を腐らしてから中の実を取って、天日で乾かす。手が荒れるので、芋を洗う物で皮を取ることもあった。	昔は家で搗いた餅に榧の実を入れた。今でも炒って食べる人もいる。				正月にオヒネリを作るとき、餅と栗、みかんなどと一緒に榧を入れて供える。				（仁井田1910b）2023年11月2日
6	伊都郡	恋野村→隅田村→橋本市	須河（新田）	（岡本正則、福井茂樹）		口絵 18	①福岡家の横。	直径 1m（山元）。ヒダリマキガヤか。															2023年11月2日
7	伊都郡	恋野村→隅田村→橋本市	須河（新田）	福井茂樹		5-4	①福井家の屋敷と川の間。	福井家に２本の榧がある。２本ともに直径約1m(山元)。	須河には合計４本の榧がある。山に榧はない。花が咲く榧は知らない。		今年（2023年）は豊作。	祖母のころによく拾った。母親のときは、正月に供えるだけなので 20 ～ 30 個拾った。		あくを抜いた。	炒って食べた。餅に入れた。				正月に神さんに、餅と串柿、榧の実をオマス（供える）。鏡餅に置いたり、紙に包んで供える。		碁盤・将棋盤にするために買いに来たが、伐採すると屋敷がすべるため、父親は売らなかった。		2023年11月2日
8	伊都郡	恋野村→隅田村→橋本市	須河（新田）	（福井茂樹）			①中西家の屋敷の奥。	直径約70cm（山元）。ヒダリマキガヤか。															2023年11月2日
9	伊都郡	恋野村→隅田村→橋本市	赤塚	上田悦子		5-5	①吉岡家の榧。屋敷の入り口。	直径約1m（山元）。				実を拾った。	道に足の踏み場もないぐらい実が落ちた。	灰で埋めてあくだしした。	ほうらくで炒った。				正月に、榧と栗を供えた。	臼にするという。			2023年11月2日
10	伊都郡	恋野村→隅田村→橋本市	赤塚	（上田悦子）			②曽和家の榧。曽和家の畑の上。	直径約50cm（山元）。												柱にするためにまっすぐ育てていた。			2023年11月2日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
11	伊都郡	学文路村→橋本市	向副	松井カヨ子(昭和18年)			(松井家には榧はなかった。)								隣の人は、榧をあくでつけておいて、餅を搗いたと言っていた。				榧の実は正月、鏡餅の前へ小みかんと一緒に並べる。栗は土の中へ埋めておいて正月に供える。どんど焼きのときに持って行って燃やす。榧は食べない。家に榧がないので、買ってきた。			実家は紀の川市粉河。実家にも榧はなかった。自分は榧の木を見たことはない。	2023年3月13日
12	伊都郡	学文路村→橋本市	賢堂	(栢木妙子、栢木一仁)		5-6	⑤定福寺の下に榧が1本ある。		実は丸い。														2023年3月13日
13	伊都郡	学文路村→橋本市	賢堂(堂ノ尾)	栢木妙子(昭和7年)、栢木一仁		口絵19、5-7	①栢木家の榧。家の横。	家よりも大きな榧が1本ある。明治初年の火事で榧の木も焼けた部分がある。ほかにも家の周辺には幼木が多い。	榧は年数がたたないと実がならない。20年、30年ぐらいでは実は落ちていない。榧の実は細長いのと丸いのがある。栢木家の実は細長く、先がとがっている。木には風蘭がついている。実はリスが食べる。		実は台風のころに落ちる。	手が「にちゃにちゃ」になるので、手袋で拾って、糠で手を洗った。		渋抜きしないと食べられない。灰で1週間つけた。	昭和30年代には、搾った油でてんぷらをした。その後も、榧の実を入れた餅を作った。ひいて焼いたり、油で揚げたりした。ふわっと伸びる。実のまま入れる。	賢堂の水落家に頼んで榧の油を搾ってもらった。			正月のお膳に、ウラジロを敷いて鏡餅を置く。そこに榧の実を置く。この榧は食べない。	家の門の柱が榧の木を使っている。	昭和50年代、高野山の菓子屋から榧のせんべいを作るために実を買いに来た。	屋根をこする枝を切ったとき、何かに使うために高野山へ持って行った。	2023年3月13日
14	伊都郡	学文路村→橋本市	清水	松岡成嘉(昭和13年)		口絵20	①松岡家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。直径約70cm(山元)。下から2本に分かれている。			10月ごろに落ちる。毎年よくなる。			昔は灰で合わした。	炒って食べた。こおばしい。	明治生まれのおじいさんのとき、家で油を搾ったという。			正月、ゲンがいいので、鏡餅の中に榧の実を2・3個置いている。今もしている。				2023年9月5日
15	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	(山元晃)			①小林家の榧。	直径約1m(山元)。															2023年9月5日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
16	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	(素和治男、岡本正則)			赤井家の榧。家がなくなって、榧だけ残っている。	大きい。															2023年10月27日
17	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	(山元晃)			①藤井家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。															2023年10月27日
18	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	岡本正則		口絵21	①岡本家の榧。	家の横にハナガヤ1本とミガヤ1本がある。墓にハナガヤが1本あったが伐採した。伐採したハナガヤは太かった。(岡本家のミガヤはヒダリマキガヤか。)	榧は風除け、土砂崩れ防止に植えている。岡本家の榧は「ちょがっている(とんがっている)」。ハナガヤ(雄)とミガヤ(雌)がある。ハナガヤは大きくなりやすく木がやわらかいので用材になりにくい。ミガヤは大きくなりにくい。基礎の土台になる。	山の木は肥料をやるとよくない。	熟すのが遅い小さい実をスエガヤという。大きなのから落ちる。夜や雨上がりに落ちる。今年(2023年)はよく実がなる。房になっている。	家の庭だけで実を拾った。下まで拾いに行かなかった。		灰と混ぜてあく抜きした。	子どものとき、炒って食べた。	いい油が出ると聞いた。量がないから搾ったことはない。		父親は蚊除けに榧の枝を切って来てくすべた。	鏡餅のところに榧、葉付みかん、串柿を置く。		伐採したハナガヤは碁盤に売った。		2023年9月5日・10月27日
19	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	(岡本正則)			中谷家の榧。	大きかった。伐採した。															2023年10月27日
20	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	(山元晃)		口絵22	④宝蔵寺の境内。	カヤ。直径約50cm(山元)。4本に分かれている。															2023年9月5日
21	伊都郡	学文路村→橋本市	西畑	(岡本正則)			道のそば。	伐採した。															2023年10月27日
22	伊都郡	九度山村→九度山町	入郷	(松島洋)	神木だから切るなと言われていたという。	5-8	①海掘家の榧。海掘家の屋敷の下。																2023年2月1日
23	伊都郡	九度山村→九度山町	慈尊院				④飯炊明神の森。	延享4年(1747)には存在していた。現存しない。				神主狭間弥五郎が榧の実と竹の皮を拾っていた。											(九度山町史編纂委員会2000)

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
24	伊都郡	九度山村→九度山町	慈尊院				飯炊明神の森の西側に久保田茂兵衛息数馬が所持する榧があった。	「ふたまたノ大木」。															（九度山町史編纂委員会2000）
25	伊都郡	九度山村→九度山町	慈尊院	安念清邦（慈尊院住職）			（現在、慈尊院の集落には榧はない。）																2023年2月20日
26	伊都郡	九度山村→九度山町	椎出（河合垣内）	谷口啓司	榧の油はお大師さんが広めたという。	口絵91、5-9	①谷口家の榧。家の近く。道の横。2022年に伐採。		木の実を食べるリスとかヤマガラが巣を作っていた。		9月。	秋になると1日に2回、掃除しないといけない。通る人は、肌の弱い人はかぶれる。相当匂いがきつい。		表面の青い皮は分厚い。芋を洗うような物に入れて回して皮を取って、洗って、自然光で干す。	椎の実は食べたが、榧の実は食べなかった。	父親がその親から、榧で油を搾ると聞いていた。谷口家で搾ったかどうか分からない。				囲碁の板や、まな板にした。			2023年3月13日
27	伊都郡	九度山村→九度山町	椎出	前滝悟	榧の油はお寺の灯明にしたという。弘法大師が勧めた。高野山では菜種油は凍るけど、榧の油は凍らない。（前滝氏の場合は、地域の歴史を調べるなかで知ったという。）	5-10（横手垣内の山）	（前滝氏の家には榧はない。）椎出には、横手垣内の山と河合垣内の谷口氏の榧の2本ぐらいだった。					正月の護摩祈祷の際には、谷口家の榧か、横手垣内の榧の実を拾った。			椎の実は食べたが、榧の実は食べなかった。				正月、鏡餅に串柿を置いて、みかん・榧の実を置いていた。榧の実などを入れた半紙に包んでしめ飾りにつける。1月5日に薬師堂で護摩祈祷をする際、榧の実・栗の実・小みかん・串柿を各8個、竹串に刺して、円座に刺す。				2023年3月13日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
28	伊都郡	河根村→九度山町	東郷	達谷良章(昭和7年)、中谷弘(昭和12年)、扇迫一夫			東郷の集会所の上にハクガヤがある。ほかにも榧はある。		実がなる木とならない木がある。花ばかり咲いて実がならない木もある。ハクガヤは皮を剥くと米を精米したみたいに真っ白。ハクガヤは渋くない。ハクガヤはどこにでもあるものではない。					灰へつけて渋抜きする。	フライパンで炒って食べる。					大きな榧は将棋盤に使う。			2022年5月9日
29	伊都郡	富貴村→高野町	東富貴	奥田弘真(宝蔵院住職)、下垣内操、稲葉敦美	真ん中の榧は天誅組に寺が焼かれた際に焼けたと聞いている(下垣内・稲葉)。	口絵23、5-11	④宝蔵院に榧が3本ある。	手前の榧は直径約1m20cm。真ん中の榧は中が焼けている。直径約70cm。奥の榧は直径約65cm(山元)。						あくを抜いて干していた。		宝蔵院にいた明治36年ごろの生まれのおばあさんは、榧油を搾って寺の灯明として使っていたという。							2023年9月5日
30	伊都郡	富貴村→高野町	東富貴	阪口弘和(昭和13年)			(榧は宝蔵院にあった。)							調整するのがやっかい。					鏡餅には、榧・椎の実など、収穫したものを供えた。				2011年1月3日
31	伊都郡	富貴村→高野町	東富貴	隠地前栄治(昭和7年)、隠地前常子(昭和8年)															お重ねを中心にして、榧の実・栗の実・みかん・金柑・小餅を置く。				2010年1月8日
32	伊都郡	富貴村→高野町	東富貴	下垣内操(昭和14年)	「ウドの大木、柱にならん。細ても榧の角柱」、という。		(榧は宝蔵院にある。)		「榧はわりに少ない」。			寺の榧は拾ってこなかった。			あくを抜いたら食べられる。ベベ(イヌガヤ)の実は熟してきたらそのまま食べた。					名迫家の大黒柱には榧を使っていた。			2023年9月5日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
33	伊都郡	富貴村→高野町	東富貴	稲葉敦美			(榧は宝蔵院にある。)					子どものころ、宝蔵院で拾わせてもらった。寺の裏の榧ではなく、道端のほうの実を拾わせてもらった。		灰汁につけて渋抜きをした。吉野のほうから来た人に聞いた。	炒って食べた。実を２つ合して、手で力を入れるとどっちかが割れる。手でくるくるとこすると中の渋がおきてくる。	油は聞いたことがない。			稲葉家では正月には供えなかった。				(2023年8月28日)・9月5日
34	伊都郡	富貴村→高野町	西富貴	井阪祥春(丹生神社宮司)	榧も樅も屋敷へ植えるもんでない、という。棺の木に樅を使う。榧も同じ。	5-12	④丹生神社の参道。	直径約35cm(山元)。															2010年1月8日、2011年1月3日、(2023年8月28日)
							井阪家近くの竹藪に榧がある。(丹生神社に榧がある。)	竹に押されて枯れかかっている。				神社の榧を拾ってきた。				油は聞いたことがない。			鏡餅の下には新米、周りには栗・榧・コイモ・みかんを置く。榧は実をつけなくなったので、今は榧をおかない。榧はたくさん実がなるので、代々続くようにという意味。			榧の実は正月の飾りもんで売っていた。	
35	伊都郡	富貴村→高野町	西富貴	尾家仞美															鏡餅の周囲には橙・祝いみかん、吊るし柿・栗・榧・お金を置く。小屋の入口などに、松・榊・モチナラシをつける。そこに餅・みかん・吊るし柿・勝ち栗・榧を半紙で包んで吊っておく。				2011年1月7日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
36	伊都郡	富貴村→高野町	西富貴	岡本幸治（昭和10年）、中山武夫（昭和10年）															鏡餅の周りにはみかんを積み、栗とピーナツも置いている。昔は榧の実も置いた。				2010年1月7日
37	伊都郡	富貴村→高野町	西富貴	（山元晃）			某家の家の横の墓地に榧がある。	大木ではない。															
38	伊都郡	富貴村→高野町	上筒香	大谷敏一（大正14年）								榧はあるけど、拾うことはあまりない。							鏡餅の上には栗・榧、テビラ（葉のついたみかん）・柑子・昆布などを並べる。並べるものは家によって異なる。紙に包んだ供え物をオヒネリには、2つ重ねた餅・みかん・米・小豆・栗・榧など、奇数入れる。栗と榧は店で買ってきた。今は売っていないので最近は置いていない。				2009年1月2日、2011年1月3日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
39		富貴村→高野町	下筒香	中山富千代(昭和6年)、中山博子(昭和15年)															鏡餅は低い膳へ半紙を敷いて、餅を二重ね置く。柑子・小みかん・串柿・昆布を載せ、小豆・コイモの小さいもの・温州みかん・勝ち栗・榧を置く。					2010年8月5日
40	伊都郡	高野村→高野町	杖ヶ藪	(西辻政親)			②中辻家の榧。道の下(集落の下)。	大きな榧。5本ほどあった。まっすぐな木だった。50年ほど前に伐採。															2023年3月10日
41	伊都郡	高野村→高野町	杖ヶ藪	西辻平治(昭和3年)、西辻恵美子(昭和3年)、西辻政親		5-14	②西辻家の榧。西辻家の山林の中(集落の下、集落と川の間)。					中辻家の榧の実を拾った(政親)。		竈で焚いた灰であく抜きした(政親)。	ほうらくで炒って食べた。昔は胡麻の代りに、からし菜・真菜などと味噌と和えた(政親)。	榧の油は高野山の小堀商店で売っていた。灯明の油や食品で使った(政親)。				西辻家の蔵には榧の木を使っている(平治)。今でも鮎捕りのタモを榧で作って高野山で売っている人がいる(政親)。			2009年2月3日、2023年3月10日
42	伊都郡	高野村→高野町	東又	下勝己			下家の上にあった。	何本かあった。大きな木ではなかった。												榧の枝で釣りのタモを作る。自分も作ったことがある。作るのが楽しい。			2023年3月3日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
43	伊都郡	高野村→高野町	樫原	前正雄（大正 13 年）			⑤高野道にあった。	高野道に大きな榧が１本あった。	樫原には高野道以外にも榧はあるが、実がなる木はほかになかった。杖が薮にはどっさりあった。大きなのが何本とあった。						杖ヶ薮からあく抜きした榧をもらったことがある。おいしかった。					魚を捕るタマの柄は榧の木で作る。			2009年8月4日、2010年9月9日
44	伊都郡	高野村→高野町	平原	桝谷武彦（昭和 7 年）、桝谷昌枝（昭和 14 年）			桝谷家には榧はなかった。杖ヶ薮の親戚の家にあった。	杖ヶ薮の親戚の家に大きな榧が２本あった。				杖ヶ薮の親戚の家に拾いに行った。			炒って食べた。	油は搾っていない。			鏡餅に串柿・橙を載せ、小餅・柑子を並べる。榧も入れた。				2011年2月16日
45	伊都郡	高野村→高野町	南	（飯野尚子）		5-15	④八坂神社の境内。	１本。															2023年3月10日
46	伊都郡	高野村→高野町	高野山	（下勝己）		5-16	③高野山から神谷へ下る林道の途中。	幼木も含めると複数本ある。															2023年3月3日
47	伊都郡	高野村→高野町	大滝	西喜好（昭和 3 年）		口絵 84	山にあった。				榧を採るのは、栗よりちょっと早かった。採らなくても熟したら落ちる。			乾燥してから剥いて、実だけにして保管した。家の中においた。栗とは反対。栗は生のおいしさを保つために土へ埋める。	ゆがいたり、焼いたりして食べた。炒って食べることもあった。香ばしくておいしい。脂肪分があっておいしい。				鏡餅の横には栗・榧・ホンダワラを供える。榧の実は、山にあるものを拾ってきて供えた。	榧や栗は建築材にもなった。榧は腐りにくい木。		「栗とカヤは主食に近い食べ物だったかもしれない。」	2010年1月3日
48	伊都郡	高野村→高野町	高野山	（飯野尚子）		口絵 24	⑤町石道を大門から矢立に下る途中。	複数ある。幼木は多数。															（高野町史編纂委員会 2014）
49	伊都郡	高野村→高野町	上湯川（宮垣内、宮村）	井上實（昭和 3 年）			電柱の辺りにあった。今はない。（東向きで、宮村で一番最初に日が当たる暖かいところ。）	大きな榧だった。					どっさり実が落ちた。	水へつけておくと、あくが抜ける。									2010年1月3日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
50	伊都郡	高野村→高野町	上湯川（沼田）	西浦孝、西岡憲三、西岡郁子		5-17～18、9-7	①西岡家の榧。家の横。斜面の下は川。	大木。1本。						桶へ入れて、灰をひとつかみかふたつかみ程度水へほりこんで、灰汁をとった。2、3日つけておく。筵へ干して、乾燥させておく。	戦前は、榧の実を炒って食べた。炒ってつまんで食べた。子どもも大人もおやつに食べた。食糧が豊富になったから食べない。榧油は食用にした。郁子氏は、炒って食べたほか、粒を炒ってつぶして、和え物にしたこともある。	下湯川で1軒、榧の油を搾るマンリキという機械を持っている家があった。榧の実を蒸して、ハンドルを回して締めていって、垂れる油を受けた。大量にあった場合、搾ってもらったことがある。西浦氏が子どものころだった。郁子氏は昭和30年代に一度、下湯川に榧の実を持って行って油を搾ってもらった。現在でも1升瓶に入れておいている。							2010年9月10日、2011年3月7日、2023年2月24日
51	伊都郡	高野村→高野町	上湯川（沼田）	西浦孝（大正13年、西岡家の出身）		5-19	①西浦家の榧。家の背後。斜面の下は川。	1本。														榧、サトガキはどこの家にも必ず1本ずつ植えていた。風よけもかねている。榧は根もかなり張っている。	2010年9月10日、2023年2月24日
52	伊都郡	高野村→高野町	下湯川（堂垣内）	安井精一（大正13年）			①安井家の横にあった。	大きな榧だった。道をつけるときに伐採。						桶へ水を入れて長いことつけていた。それから搾った。		榧油を搾る機械があった。矢で締めた。冬だったと思う。桶へ水を入れて長いことつけていた。それから搾った。心安いところへ1升ずつあげていた。							2010年12月9日
53	伊都郡	高野村→高野町	花坂	上田央夫（大正11年）			（花坂には榧はない。）								油を食用にしたらしい。	昔は油を搾ったらしい。							2010年12月10日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
54	伊都郡	高野村→高野町	細川(西細川)	井戸坂昌夫(昭和5年)			井戸坂家の上に大きな榧の木がある。井戸坂家の木ではない。												鏡餅はもっと大きかった。栗・榧を入れていた。かなり前から供えなくなった。				2011年1月2日
55	伊都郡	高野村→高野町	西郷(神谷)	崎山忠二(昭和8年)、岡田里明(昭和4年)															正月の栗・榧・俵・みかん・昆布、上に載せている橙をセットで売っている店がある。九度山の松山という店で昔から売っている。昔から買いに行く。				2011年1月2日
56	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷(神野)	(的場八重子)		5-20	④正楽寺・若宮八幡神社の入り口。	直径約60cm、高さ約20m(山元)。実は小さい。				実を拾った。											2023年11月2日
57	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷(神野)	(的場八重子)			神野の某家の榧。集落下の山林。	直径50cm、高さ約15m(山元)。実は小さい。				拾いに行かなかった。											2023年11月2日
58	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷(堀越)	向井友啓	東谷(中畑)にカヤノキという地名がある。	口絵25	④堀越観音の庫裏の前。	カヤ1本。胸高直径70cm。	梅雨のときに葉が入れ替わる。	1回、接ぎ木した。丸い実がなる岡井家の榧を寺の榧に接いだ。若木に接いだのは成功した。			硬いままの状態で、3斗、4斗あった。木が衰えてきて、近年では収量が減ってる。正月に供えるので、今でも拾っている。	落ちた実を拾って、外の皮を剥いて、火灰で渋抜きして、洗いあげて干した。	榧の実は、剥いて2年ぐらい味は変わらない。3年たつと味は落ちる。油を食べた覚えがある。	父(昭和3年生まれ)の若いころ(戦後すぐか)、油を搾ってもらいに粉河辺りまで自転車で持って行った。搾る家では近在の人を集めて人力で搾っていた。			正月、オヒネリに、小餅2つ、小豆を入れたトモチ(スライスしたもの)、串柿、榧の実1つを入れる。	滝(四郷地区)の古い家では、台所の敷居か柱に榧を使っていた。	20年ほど前まで、榧の実をスライスしてせんべいに入れて名物として販売していた。作るのが手間であり、賞味期限が短いためにやめた。		2023年8月24日
59		四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷	(向井友啓)			某家の榧。山の中(道の下)にあった。	伐採した。															2023年8月24日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
60	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷（中畑）	（向井友啓、山元晃）			①某家の前の斜面。	カヤか。1本。															2023年8月24日
61	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷	（山元晃）			②道の上。	カヤか。1本。															2023年8月24日
62	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	東谷	（向井友啓、富永、山元晃）		5-21、6-5	①岡井家の上。	カヤか。1本。実は丸い。				実を拾った（向井・富永）。											2023年8月24日
63	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	平	（山元晃）			②新牛神橋の横。	雄か。															2023年8月24日
64	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	滝	（山元晃）				直径100cm。															
65	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	広口	（山元晃）		5-22	④大宮神社の参道石段の横。																2023年8月24日
66	伊都郡	四郷村→伊都町→かつらぎ町	広口	（向井友啓、山元晃）			①野間家の榧。																
67	伊都郡	大谷村→伊都町→かつらぎ町	柏木	（山元晃）			某家の榧。																
68	伊都郡	大谷村→伊都町→かつらぎ町	大谷	（山元晃）			④大谷神社。	直径80cm。雄の株。															
69	伊都郡	笠田村→笠田町→かつらぎ町	移			口絵26	④極楽寺境内。	幹周胸高1丈2尺5寸。樹高推定10間。幹は地上4間までほとんど垂直に立つ（和歌山県1939）。直径125cm（山元）。					「夥多ノ実ヲ結ブ」（和歌山県1939）。										（和歌山県1939）

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
70	伊都郡	見好村→かつらぎ町	山崎		弘法大師が山崎に榧を蒔いた。油は灯明の燃料として高野山に納めた。		山崎には榧が多かった。昔は1000本近く茂っていたという。	昭和10年代前半、山崎全体で100本ほどの榧があった。								町の油屋に持って行って油を搾った。						築野家の山に榧の木500本、檜2万本を植林した。平成23年(2011)、山崎に榧の木神社を創建した。	(築野2012)
71	伊都郡	見好村→かつらぎ町	山崎	(山元晃)		5-23	②中尾家の横。道の上。	1本。直径50cm。															2023年1月16日
72	伊都郡	見好村→かつらぎ町	山崎	向山敏弘	榧蒔石はけっこうみんな知っている。榧の油は金剛峰寺が重宝した。榧油は凍って固まってしまう温度が低い。菜種油は凍っても、榧の油は凍らない。灯明の油に都合がいいと両親が言っていた。母は大正11年生まれ。「嫁にやるとも山崎やるな、芋のチャガイ(茶粥)食て、榧拾い」という言葉がある。		①向山家の上に坂本家の榧が2本あった。	西の榧は雷が落ちて中が空洞になっていた。昭和30年代前半に伐採。	外の皮はくさい。ちょっとかぶれる。幹の皮が乾いてくると「はしかい」。			母屋の上にある榧から実が庭に落ちた。向山家の庭に落ちた実は拾っていた。	母は1斗缶にほぼ1杯ほど拾ったという。	皮を剥いてバケツに入れ、きれいに洗って、火灰をまぶしてしばらくおいておく。あく抜きという。また洗って乾かして出来上がる。	炒って皮を剥いて食べた。母が炒っておやつに食べさせてもらった。母はトンカチで叩いて割っていた。母は、榧の実を砕いて和え物にすると言っていた。	搾ったら油が取れるといっていた。			正月、鏡餅の周りに木の実を置くものだというので、榧の実を使っていた。今はないので栗を使っている。			町石道付近の雑木林に植林をする。榧も植えようとしている。	2023年2月6日
						7-3		向山家の母屋の上にある榧は上の方を伐採したが、現在はまた伸びている。												子どもがクリスマスツリーにするのに枝を切らせてもらった。			

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
73		見好村→かつらぎ町	山崎	大原茂明、大原登史子	母は、下の町へ降りて行ったら、榧の匂いがするから、山崎の人やと分かると言われた、という話をしていた。		（大原家には榧はなかった。）								子どものころ、近くの家の榧を拾ってきて食べたことがある（茂明）。								2023年10月27日
74		見好村→かつらぎ町	山崎	茶原成次			（茶原家には榧はなかった。）													築200年ほどの母屋の縁側は榧の木を使っている。			2023年10月27日
75		見好村→かつらぎ町	山崎	（大原茂明、茶原成次）			窪藪家の近く。大きな榧が2本あった。昭和50年前後に道をつけるために伐採した。																2023年10月27日
76	伊都郡	見好村→かつらぎ町	山崎	（向山敏弘）			山崎集落の下の方の山。個人の榧。	大型農道（フルーツライン）をつけるときに伐採。	まっすぐの木だった。														2023年2月6日
77	伊都郡	見好村→かつらぎ町	山崎	（大原茂明）			山崎の入り口の竹藪の中にある。																2023年10月27日
78	伊都郡	見好村→かつらぎ町	山崎	（茶原成次）			山崎の金谷地区の谷にある。																2023年10月27日
79	伊都郡	見好村→かつらぎ町	教良寺	（竹谷友男、前岡一行、前岡眞也）			④教良寺八幡神社の境内。	2人ぐらいで抱える木だった。平成9年（1997）の正遷宮のときに本殿にかぶってくるために杉などと一緒に伐採した（竹谷）。				みんな実を拾いに行ったが、自分は拾ってこなかった（竹谷）。実を拾ったことがある（前岡眞也）。											2023年2月1日・2月6日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
80	伊都郡	見好村→かつらぎ町	教良寺	前岡一行(昭和4年)、前岡眞也	「榧の油はなんぼ寒ても凍れへん。食用か明かりに使たんか知らんけど。凍れへんから高野山へあげたと聞いてる。」(一行)		①前岡家の石垣・土手のところ(道の上)。	屋敷の端の崖のところに斜めに生えていた。根元から2本に分かれていて、幹に空洞が空いていた。高さ20mはあった。昭和5 1年ごろ、石垣を積むために伐採した。			10月か11月。落ちるくらいになると、外の皮が割れる。			あくが強いので、桶に水を入れて、灰を入れて、あくを抜いた。	「戦時中、炒って食べた。油気あるし、うまかった」。ほうらくで炒った。おやつとして椎と榧を食べた(一行)。	前岡家では明治中期まで榧油を搾っていた。油屋といわれていた。一行氏は搾るところを見たことがなく、父・祖父も搾っていない。榧油は高野山へ納めていた。							2023年2月6日
						5-24	①前岡家の蔵の横。	まっすぐな木だった。戦時中に伐採した。	実はならなかった。														
						5-25	②山。	山に3本あった。県道をつけるときに1本切った。現在、2本残っている。	よく実がなった。実今も残っている上の方の木は実が細長い。			拾いに行ってくれといわれて拾いに行った。みかんを採るような籠に入れてきた(一行)。											
81	伊都郡	見好村→かつらぎ町	教良寺	竹谷友男(昭和7年)	隣の山崎の集落に榧蒔石がある。弘法大師が榧を蒔いたという。		(竹谷家には榧はなかった。)		教良寺には榧も多かったが、梨が多かった。実がなる榧とまったく実がならない榧がある。とげは痛い。						炒って食べた。	前岡家は油屋といった。前岡家で榧油を搾ったという。父や祖父から聞いた。昔はお灯明つけるのに榧の油を使った。				榧は赤身が多いので腐りにくい。廊下板は榧・欅・松をよく使っていた。湿気が多いところは腐らないような赤身の木を使った。			2023年2月1日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
82	伊都郡	見好村→かつらぎ町	平沼田	（山元晃）		5-26	①南家の榧。	家の北斜面に２本。１本はまっすぐ。直径70cm（山元）。１本は樹形が曲がっている。直径約 1m（山元）。実が大きい。ヒダリマキガヤの可能性がある（山元）。															2023年9月5日
83	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	上天野（北村）	（山元晃）		口絵 27	②④祠の横、畑の横。																2023年1月16日
84	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（下居垣内）	北静哉（昭和６年）、北真由美、矢部勝己（昭和 19 年、北家の出身）	植えるあほうに、切るあほう、という。榧の木は切ったり、触ったりするなといっていた。業者が来たが売らなかった。	口絵 28、29、6-9、9-3	①北家の榧。家の横（丑寅）。	カヤ１本。胸高直径 172cm。幹廻り 5m39㎝、根元廻り 7m30㎝（山元）。	小さい実の榧と大きい実の榧がある。小さい実のほうが油が取れるという。北家の榧の実は小さい。北家の榧は年によって実が細くなったり、丸くなったりする。	葉がトユに詰まるので、枝を切ることがあった。切るときには、弁当・塩を供えてから切った。	稲刈りしだしてから、刈ってしまうまで落ちた。一番忙しい時期。毎日拾った（静哉）。実が落ちるのは９月の彼岸ごろか（真由美）。		どっさり拾った。２斗ぐらいはあった（静哉）。１俵ぐらいあったと思う。60 キロ。今でも 20 キロの袋に２つぐらいある（真由美）。	灰につけて出して洗って、筵に干した。	実は炒って食べた。チン（おやつ）に食べた。油はてんぷら油、炒りものに使った。	昔は灯油に使ったという。北家で榧の実を搗いて、蒸して、搾った。ハンドルを回して締めていた。静哉氏は義理の母と粉にする仕事を担当。夫と義理の父が搾った。冬の仕事だった。毎年、ダス缶に１杯の油が取れた。榧以外の油は搾らなかった。昭和 30 年代後半まで搾った。北家で搾らなくなってから、２・３年は名手まで持って行って搾ってもらった。搾り粕は肥料として田畑に入れた。	回虫が湧くと薬にした。搾った油を飲んだらよく効く。周辺の家から油をもらいにくることがあった。	青い枝をくすべたら蚊がこないといった。	正月に恵方を向いて膳を供える。重ね餅、１升枡へ入れた米、果物、恵方を向いてたばる（いただく）。今年１年、健康でいられますように、と拝む。その中に榧が入っている。軒に吊るす注連縄にも、餅２つ・榧の実・みかん・串柿を入れる。半紙に包んで吊るす。				2008年1月16日、2023年1月16日
85	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（下居垣内）	（北真由美）			②榎家の榧。北家の倉庫の上。	１本。															2023年1月16日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
86	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（下居垣内）	北遠太郎	山中家の榧に住んでいた天狗が、星山峠まで綱を引いて渡った。	口絵30、4-5	①山中家の榧。家の裏。	4本並んでいる。直径90cmなど（山元）。															（近畿民俗学会1980、和歌山県民話の会1982）
				（北真由美）																			2023年1月16日
87	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（細原）	（上野寛万）			①向江家の榧。家の下。	大きな木。2本。								油に搾ってもらうと聞いた。							2023年1月16日
88	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（細原）	上野寛万、上野豊喜子		5-27	②上野家の榧。背後の畑の上（山のすそ）。	1本。大木ではない。実は大きい。	榧の木は枯れないという。					灰につけた。きれいに洗って天日で干す。	鉄の鍋で炒る。昔はほうらくで炒った。炒って食べた。				正月にお供えにした。半紙に榧を入れる。今はしていない。				2023年1月16日
89	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（尾花垣内）	古谷敏晴（昭和17年）			（榧は不明）												正月の飾りに、榊と松の枝を伐って、榧の実・栗・干し柿も一緒に供えた。お膳に載せないところでは紙に包んで供える。古谷家では28か所飾ったが今はやめた。				2008年1月3日
90	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	下天野（谷口垣内）	奥沢甚兵衛（大正10年）、奥沢佐江子（昭和3年）			（榧は不明）												正月の飾りには習字の書き損じの紙に、干し柿・みかん・餅2つ・榧・栗を包んで供える。				2008年1月3日
91	伊都郡	見好村→かつらぎ町	星山	（山元晃）		5-28	④1本。常福寺・集会所の横。																2023年1月16日
92	伊都郡	見好村→かつらぎ町	星山	（山元晃）			個人の家。2本以上。	伐採したものもある。															

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
93	伊都郡	見好村→かつらぎ町	御所	大家光代		口絵31、7-1	①大家家の榧。	家の入口に大木が1本。幹周3m以上、直径約1m(山元)。家の庭の前と、敷地の入り口に中程度の榧が1本ずつ。合計3本。	榧の木があるので、11時ぐらいまで涼しい。	道に落ちるので掃除が大変。車が通ると油がつくので毎日掃く。葉も落ちる。	実が落ちるのは9月。だいたい毎年なる。2023年は大きいし、多い。	橋本市のほうから、正月の供え物にするといって拾いに来た。堀越観音の住職夫妻も、不作のときに拾いに来た。		樽に灰と実を入れて1週間ぐらいつけておく。	フライパンで炒って食べた。すりこぎで擂って和え物にした。実を餅に入れて薄く切り、油で揚げたり、火鉢であぶった。	おばあさんのころは、名手で油に搾ってもらった。自分がこの家に来てからは油は食べていない。	おばあさんは、胃腸にいいといっていた。大家家の者は、だれ1人、学校でマクリ(薬)を飲む必要がなかった。葉を煎じて飲むと痴呆にならないと近所の古老が言っており、おじいさんは煎じて飲んでいた。					自分は、皮だけをトイレなどに芳香剤として吊っている。	2023年8月28日
94	伊都郡	天野村→かつらぎ町	御所	(山元晃、中道春子)			①下垣内家の榧。	直径約1m、周囲は約4m(山元)。				子どものころに拾った(中道)。											2023年8月28日
95	伊都郡	天野村→かつらぎ町	日高	(山本敬三、山本敬三の妻、長岡、山元晃)			①森本家の屋敷跡。集落のうえのほう。	直径約1m(山元)。				子どものころに、正月に供えるから拾ってきてといわれた(長岡)。											2023年8月28日
96	伊都郡	天野村→かつらぎ町	日高	(長岡、山元晃)		口絵32	②山添家の榧。	周囲は約4m50cm(山元)。															2023年8月28日
97	伊都郡	天野村→かつらぎ町	日高	長岡			長岡家の榧。	今は株だけ。							おじいさんが火鉢で焼いてくれた。				正月に、餅と串柿とみかんと榧を半紙に包んで神さんに供えた。				2023年8月28日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
98	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	志賀（中志賀）	峰均の妻、（山元晃）		口絵 33、5-29	①②もと南家の榧。	南家背後の大木は直径1m30cmぐらい、周囲は4m 以上。下から枝が出ている。小型のヒダリマキガヤ（山元）。南家の入り口には直径20cm ほどの榧がある。周囲に 8 本ほど榧があったという。							南のおばあさんは食べていた。								2023年8月28日
99	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	志賀	（山元晃）			民家に大きくない榧が 2 本ある。																
100	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	新城	浦正造（大正 11 年）			（榧は不明）												盆に、先祖の祭壇に、野菜・柿・榧の実などを供える。				2011年9月14日
101	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	新城	前浦洋子（昭和 10 年）	榧の油は寒ても凍れへんので高野山が欲しがった。持って行ったら売れたという。	5-30	①前浦家の前に 2 本、背後に 1 本あった。	家の前の 2 本は国道をつけるときに伐採。背後の 1 本は現存。															2023年8月14日
102	伊都郡	天野村→見好村→かつらぎ町	新城	（前浦洋子）		5-31	①⑤大野家の横。	大木 1 本。								榧油を搾った。							2023年8月14日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
103			花園久木	朝本幸夫(昭和6年)	榧の木は、「植えるもんもばか、切るもんもばか」、という。300年たたんないと、下枝は土つかない。		②朝本家の山林。	4本の榧があった。「ヒダリマキ」が1本あった。	昔から「左榧」という榧がある。頭を上にして、筋が左へ巻いているので「左巻」という。太さは同じで、「左巻」のほうが少し長い。「左榧」のほうが油が多かった。		榧は早生と晩生とある。早生は10月末から、晩生は11月中ごろから拾い始めた。	木の下の草刈りをしておく。拾いにくいので、鍬で2・3本筋をつけた。「ころころまくれて(ころがって)下向いていかんように」して止まるようにしていた。雨上がりに拾いに行くと決まっていた。直径30cmほどの腰付カンゴを腰につけて、実を拾って籠に入れた。最後に、肥料を入れるような袋に実を入れて家まで持ってきた。		拾ってきた実は、筵を敷いた上に撒き、地下足袋を履いて、足の親指のほうでもんで、中の実を出した。外の皮を剥かないとあくが抜けない。中の実を桶の中へ入れ、水と灰で約1週間つけておく。晩生の実の場合は、おおよそ10日つける。生木を焚いた灰でないとあくは抜けなかった。あくを抜いた実は、ざるにあけて、水舟から杓で水を汲んで洗った。筵を広げて、からからと音することまで乾かす。	ほうらくで炒って食べた。	朝本家に油を搾っていた。1月いっぱい搾った。あくを抜いて乾かした実は、唐臼で砕いて、蒸篭で蒸した。その実を油を搾る機械に入れて搾った。2人で息を合わせて両側から矢を打ち込んで圧縮した。幸夫氏の祖父、幸夫氏、五前光司氏、部谷氏で搾っていた。水害後、ジャッキを入れて搾った。搾り粕は田の肥料にした。			正月、鏡餅の横に榧の実を置いた。	木の元のほうは筋がないので碁盤になる。末のほうは、看板として売ったり、家の衝立にした。榧の枝は「しなこい」ので、枝を曲げて鮎捕りのタモにした。牛の鼻木にもした。	昭和28年(1953)の水害後に、碁盤に売った木がある。	榧油の灯明は、お宮で使った。	2023年2月24日
104			花園久木	(朝本幸夫)			②西家の下の棕櫚山の中。	1本の榧があった。															2023年2月24日
105			花園久木	(朝本幸夫)			福岡家の榧。県道の上。	1本の榧があった。															2023年2月24日
106			花園久木	五前光司(昭和3年)	榧の枝が地についたら1000年たっているという。		川の近く。	大きな榧があった。伐採した。	「左榧」は油が多かった。					灰の水につけておかないといけない。	榧の和え物は香ばしくておいしかった。味噌と和えた。榧の油でてんぷらをした。	朝本家に油を搾る機械があった。若いころ、油を搾る手伝いに行った。		榧を焚くと蚊が来ないといった。蚊除けに焚いた。				碁盤に売った。	2016年8月19日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
107			花園梁瀬(峰手)	(山元晃)																			
108			花園梁瀬(臼谷)	(上林洋子)			トンネルの上のあたり。																
109	伊都郡	花園村→かつらぎ町	花園梁瀬(滝谷)	久保多喜男(大正10年)	枝が地についたら1000年たっているという。	口絵1、34、74、6-8、12-5		800～1200年たっている。								昔は榧の油を搾った。食料、灯火として使った。						どの家にも5・6本あった。子どものころに2・3本切った。油を取るために榧の木を植えた。	(和歌山県民話の会1985)
				久保和子	父は、「植えるあほうに、切るあほう」、といっていた。植えて自分の代に実を拾えない。		①久保家の榧。家の横(畑の上、現在は道の上)。	カヤ1本。胸高直径2m50㎝、根元廻り7m20㎝(山元)。	木は古くなってる。枝を切ったら枯れていく。昔はもっと張っていた。おじいちゃんが枝を切った。昔はもっと大きかった。道を広げたために、木が弱ったかもしれない。	昔は畑を作って肥しをやっていた。今は何も作っていない。	年によって少し違うが、彼岸から10月10日の祭りにかけて実が落ちる。天気の日は落ちない。昼間は落ちない。朝夕の露があるときに落ちる。朝の5時ごろから落ちる。	雨が降ったら拾いに行かされた。車が通ったらひかれるので、掃き集めておいて出かけた。実を拾うのは楽そうに見えるけど、蚊がいるし、濡れているときに拾うので大変だった。榧の木の下には3軒ぐらいの畑があった。畑の上に枝が伸びたところは、その家の人たちが拾っていた。畑にはこんにゃくを植えていた。実が落ちる時期には、こんにゃくの葉が落ちてきれいな畑になっていた。	たくさんなるときは何石と落ちる。4・5年ならない。5年たったらまたなる。たくさんなるのは5年に1回。昔は毎年拾った。実はたくさんなったら細かい。ならない年は粒が粗い。	外の皮を取り、灰をまぶして、ナイロン袋に入れて、1週間から10日あわす。ナイロン袋がないときはダス缶や桶に入れた。実は赤っぽいが、灰で合わすと黒っぽくなる。昔は筵で干した。	油はてんぷら油にした。実も年中食べていた。	昭和後期まで野上で搾ってもらった。父のとき、清水のおもてやで菜種油を搾っていた。	十二指腸にいいという。回虫が湧かないのは、久保家の人たちだけだ、といわれた。	榧の枝をいぶしたら蚊取り線香の代わりになった。枝のまま、囲炉裏でくべた。			実を高野山の土産物屋に出荷していた。2斗袋に2杯くらい出した。清水のあさぎりにも出したことがある。合計で4斗ぐらい出した。米よりも値がよかった。父のときには、油を出荷していた。高野山の仏具店が、榧の枝で仏像を作ると言って持ち帰ったことがある。	榧は日よけ、風よけになっている。実をつぶして大工さんが床を磨いた。2・3年たった捨てる実を叩くと油が出る。大工さんはそれを袋に入れて磨いた。つやが出る。	2022年9月2日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
110	那賀郡	池田村→打田町→紀の川市	重行		同家の屋号を昔から「柏の木」という。	口絵 35	①潰瀧家。	樹高推定8間。幹周12尺。枝張地積200坪。樹齢300年以上。枝の各所に風蘭が生えている(和歌山県1936)。					「最近ノ結実ハ二三斗乃至一俵位ナルモ明治二十七八年ノ最盛期ニハ毎年二石余ノ果実ヲ生ジタリト」。										(和歌山県1936)2023年8月28日
111	那賀郡	龍門村→粉河町→紀の川市	勝神			5-32	④勝神神社参道右脇。	樹高7間余り。幹周は地上5尺のところで2丈余り。樹齢300年以上。幹の内部に空洞。「稀有ノ大榧」。昭和初期に県指定天然記念物(和歌山県1927)。現在は紀の川市指定天然記念物。幹周6m。参道左脇に小振りの榧が1本ある。				「実ハ里人ノ随意収拾ニ任シ来レルガ如シ」(和歌山県1927)。	「年々ヨク結実ストイフ」(和歌山県1927)。										(和歌山県1927)2023年8月28日
112	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(清川)	(南浦一美)		口絵 36	⑤⑥共同墓地の中、高野街道(麻生津道)の上。	1本。カヤか。				みんな拾わない。											2023年2月20日
113	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(清川)	庵上元延			②庵上家の榧。溜池の横(榧の大木と楠の大木があった)。	1本。ヒダリマキガヤか。堰堤を作るために伐採。	古い木だった。実は細長い。木は横に這っていた。			子どものころ、拾いに行かされた。皮は匂いがすごいので、皮が剥けた実を拾ってきた。ビニールの袋に入れて持ってきた。				曾祖母が昭和30年代まで、家で榧・椿の油を搾っていた。				妹の夫が、伐採した榧から将棋盤を作った。			2023年3月10日
						5-33	②庵上家の榧。家の上の柿畑の上。	大木ではない。	実は細長い。														

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
114	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(清川)	前東一美(昭和8年)、南浦一美、向竹栄	大昔は高野の灯明に榧の油を使った。	口絵37	①⑤前東家(本家)の榧。家の下。杉の下。	1本。ヒダリマキガヤか。	実が長い。			ほしい人が拾った。	コンテナ3杯か4杯落ちる。			名手か麻生津に油を搾るところがあった。前東氏も椿の実を持って行った。前東氏は榧の油を搾ってもらったり、使ったことはない。							2022年12月12日、2023年1月13日
115	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(清川)	南浦一美(昭和19年)	弘法大師が高野山を開いたとき、奥之院の灯明を1年間焚く油として、搾るのが基本やった。		②南浦家の榧。家の周辺。	柿の陰になるので切った。	丸いのと、ちょがった(とんがった)のとがある。清川の共同墓の榧は丸い。前東家の榧はとんがっている。長いのはヤマガラが食べるが、発芽は悪い。丸い榧はよく芽が出る。榧には蘭が生える。榧は成長が遅い。風よけになる。		10月の台風の最中に落ちる。10月10日から20日ごろまで。	今は前東家の榧などを拾う。		灰の中へ1週間つけておく。	子どものころは拾って食べた。	昔は実を拾って食用油にしていた。菜種油ができるまで。前東家では、名手や麻生津へ榧・椿を持って行って油を搾ってもらっていた。昭和になると、菜種になった。	婦人病の薬という。	枯れた枝を取って焚いたら蚊除けになった。厩の入口で火を焚いた。	昔は榧をフクヅツミへ入れた。神さんごとに持って参る。	腰板にした。杉は腐るが、榧は腐らない。		このあたりで一番榧が多かったのはかつらぎ町山崎。	2023年1月13日
116	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(日高)	中道春子		5-34	①⑤道の上(西家跡の下、中道家の上)。							灰で練って榧の実を入れて、何日かして、また洗って、お日さんに干した。	炒って食べた。							中道氏はかつらぎ町御所の出身。子どものころにも実を食べた。	2023年2月20日
117	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(林垣内)	(向竹栄、前東一美、南浦一美、庵上元延、土居豊一)		5-35	①⑤大谷家の榧。家の周辺(道の上)。																2022年12月12日、2023年1月13日・3月10日
118	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕(久保)	(向竹栄)			尾上家の榧。	榧は3・4本、大きな榧が2本あった。現存せず。								敷居くらいの厚い板をくくって、榧の実を入れて、てこで搾った。							2022年12月12日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
119	伊都郡→那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	上鞆渕（北原）（向竹家は昭和元年に転居、それまでは上鞆渕の南地）	向竹栄（昭和8年）	榧は鞆渕・天野・長谷にしかない。空海がどこかから持ってきた。高野山が始まったとき、お灯明にした。365日、年中ついてる。榧の油を使っているらしい。長持ちするらしい。	口絵90	（向竹家にはもともと榧はない。）親戚にあたる久保の尾上家に榧があった。		カヤとネジリガヤがある。ネジリガヤは実が長い、実に筋がある、筋がねじっている。味が悪い。榧は成長が遅い。					灰で汁を作り、10日ほどつけておいた。	炒って食べた。つぶして擂って、マナと味噌と和えた。春先に食べた。今でも前東家の榧を拾ってきて食べることがある。	向竹家でもかわらけに榧油を入れ、灯芯で火をつけていた。油は尾上家でもらった。向竹家では名手に椿を持って行って油を搾った。		牛を大事にした。厩の入り口で蚊除けに榧の枝や葉をくすべた。榧という名前は、蚊遣りからきたという。		尾上家の榧を切ったとき、一部をもらって風呂の腰板に使った。油で真っ黄色で美しかった。30年前にした。父は、どこかの家の蔵の柱は榧だと言っていた。	県外の業者に鞆渕の榧を紹介したことがある。	榧は上鞆渕・中鞆渕にあった。下鞆渕にはあまりなかった。川沿いよりも高いところに多かった。	2022年12月12日、2023年1月13日
120	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	中鞆渕（中野北）	（前）		5-36	④阿弥陀堂（中野北の集会所）の横。	カヤか。1本。				中野南の人も拾った。											2023年1月13日
121	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	中鞆渕（中野南）	（前）			峰浦家の家の前に大きな榧があった。																2023年1月13日
122	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	中鞆渕（中野南）	前（女性）			（前家には榧はなかった。）					峰浦家、中野北の阿弥陀堂の榧の実をもらった。			おやつがないので、炒って食べた。								2023年1月13日
123	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	中鞆渕（湯ノ本）	土居豊一		口絵38	②⑥土居家の榧。土居家の墓地の下の田の下。	現存せず。				近所の人も拾いに来た。			炒って食べた。								2023年1月13日
124	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	下鞆渕（上ノ垣内）		榧の実から油を採って、高野山に納めていた。		④今宮神社の裏。	現存せず。															（早稲田大学大学院海老澤ゼミ1999）

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
125	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	下鞆渕（和田）	面家崇造（大正6年）、面家和代（大正11年、和田出身）			（面家崇造氏の家には榧はなかったようである。本家にあたる面家守好氏の榧の実を使っていた可能性が高い。）												百姓なのでツクリゾメをする。12月30日に畑に松とサカキを立て、しめ縄をつけておく。元旦の朝、夫婦で畑に行く。男は鍬、女は柿・栗・榧・みかんを半紙で包んだものと、米1升を入れた枡、お神酒をもって畑に行く。榊・松を立てたところに、柿・栗・餅・榧の実・みかんの5つを包む。明の方を向いて、男は鍬で筋をつけ、女は米を蒔くしぐさをする。				1999年11月24日（藤井2001）

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
126	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	下鞆渕（和田）	面家守好（昭和13年）、面家武子		5-37	②面家家の榧。西前家の上、榧の下は畑、庄司家墓地の近く（面家家からは離れた場所にある）。	大きな榧だった。周囲1丈以上あった。この辺りにそんな榧はなかった。伐採。	面家家の榧の実は小粒で、木はまっすぐ立っていた。殻がねじっている榧はネジガヤ。榧は成長が遅い。「2・3代で大きなるもんと違う」。実は「ひねてこな」（木が大きくならないと）ならない。大粒の実は「大味」。			子どものころに拾いに行かされた。		拾った実をおいておくと、皮がずるずるになる。それを洗った。皮を剥いて灰であくとる。	ほうらくで炒って食べた。炒って食べたら香ばしい。	父親は丸栖（紀の川市貴志川町）に榧の実を持って行って油を搾ってもらった。同じ家で椿・菜種も搾った。	榧は薬だった。榧を食べるとサナダムシが嫌って便に出た。	木の芯をくすべた。火鉢でくすべたらいい匂いがした。	正月に榧の実を供えた。		将棋の盤にした。		2023年1月13日
127	那賀郡	鞆淵村→粉河町→紀の川市	下鞆渕（高原）	（面家守好）			上中家の榧。	大きな木だった。	木を船の格好にしていた。														2023年1月13日
128	那賀郡	細野村→桃山町町→紀の川市	桃山町垣内	大西孝治		5-38	④丹生神社境内。	紀の川市指定天然記念物。															2015年8月12日
							⑤県道の上に2本あった。	道をつけるときに伐採した。															2015年8月6日・8月13日
							④極楽寺の隣。	大きな榧の木の裏に寺があった。現在、極楽寺は建物もない。															2015年8月6日
129	那賀郡	東貴志村→貴志川町→紀の川市	貴志川町井ノ口		「弘法大師五百年遠忌ノ紀念トシテ植エラレタモノト称セラレテイル」。		④極楽寺境内。	幹周は胸高1丈2尺7寸。「殆ンド垂直ニ聳立スルコト約八間」。本堂の屋根を毀損するところがあるためしばしば枝を切り払った（和歌山県1939）。現存せず。					「毎年実ヲ結ブ」（和歌山県1939）。										（和歌山県1939）

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
130	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	長谷宮	（山元晃）			内ノ峠。															榧の苗木を、山崎の榧の木神社に植えている。	
131	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	長谷宮	大和公明（昭和７年）	高野山が榧を作れと奨励したらしい。		個人の山にあった。		実を採って売るほどなかった。水害後、将棋盤や碁盤にするために買いに来た。														2014年8月8日
132	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	長谷宮	大和博（昭和７年）、大和憲子	榧は高野山に納めた。		⑥大和家の墓地。	２本あった。姉が結婚するときに伐採した。							子どものころ、おやつに皮を剥いて、谷へさらしておいて、乾かして炒って食べた。	母の里は花園の新子。実家に帰ったとき、榧の油を土産にもらってきた。		製材で出た端材をおが粉にし、それを縁側でくすべた。蚊遣りになる。変な匂いしたのを覚えてる。	正月に、榧などを紙に包んで供えた。	縁板に使うといった。			2022年11月28日
133	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	長谷宮	（大和博）			北田家。	伐採した。															2022年11月28日
134	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原上（笹ノ瀬）	戎谷隆明、隆明氏の母（毛原中の有北家の出身）	高野山へ持って行った。高野山は寒いので、普通の油は凍る。榧の油は凍らないので持って行った。	口絵 39	②戎谷家の周辺の山のすそ。	カヤ１本、ヒダリマキガヤ１本。ヒダリマキガヤは県指定天然記念物。						灰をかけてあくを抜く。	炒って食べた。実をつぶして、大根葉・白菜を入れて、味噌和えにし、おかずとして食べた。和え物は秋から冬に食べた。								2022年9月13日
135	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原上（笹ノ瀬）	森谷隆一（昭和９年）	高野山へ年貢で持って行った。灯明の油にした。冬でも凍らない。切るあほうに植えるあほう、といった。	口絵 40、82	②森谷家の横の山すそ。 ①森谷家の背後。	カヤ１本、ヒダリマキガヤ２本（西浦）。 ３本以上。１本は現存。２本は昭和 28 年の水害で被害を受けて伐採。	実が丸い榧はマルガヤ・シイツグ、実が長い榧はナガガヤ・ヒダリマキガヤといった。ヒダリマキガヤは枝が分かれている。まっすぐに立っていない。	実生のカヤは実が小さくなる。量は少ない。ヒダリマキガヤは接いで増やした。木の下へ藁を積んで肥しをやった。	彼岸後。	女の人の仕事だった。	裏と表がある。2021 年は５・６斗あった。		冬に炒って食べた。つぶした実を白菜・ほうれんそうと味噌と和えて食べた。カヤのほうが渋が取れやすい。カヤのほうがおいしい。油はてんぷらなどに使った。	ナガガヤは油用。搾り機があった。毛原上・毛原宮にかけて持ち回りで使った。矢を打ち込んで、ジャッキもつけていた。親の代まで。			盆に、先祖の祭壇、外のタナバタサンに枝ごと供えた。		水害で伐採した２本は売却して碁盤を取った。		2022年6月1日・10月31日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
136	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原上	（西浦史雄）			中山家の榧。	ヒダリマキガヤ 1本。3枝。															
137	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原上	（西浦史雄）			某家の榧。	ヒダリマキガヤ 1本。															
138	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原上（内井呂）	（西浦史雄）			松原家の榧。墓地の跡。	ヒダリマキガヤ 1本。															
139	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原上（内井呂）	（西浦史雄）			森下家の榧。	ヒダリマキガヤ 1本。															
140	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町	毛原宮（立岩）	奥澤光弘（昭和19年）	高野山の灯明に使った。榧の油は凍らない。高野山から榧の木を切るなと命令があったという。	5-39	①奥澤家の榧。家の背後の山、家の横。	カヤ4本以上。1本は伐採。3本は現存。	実が丸く、木が立っているのはマルガヤ。実が長く、木が横に這っているのはネジガヤ。			道に落ちた実をかき寄せて拾った。	ウラバンがある。	灰と混ぜて合わす。筵に干した。	炒って食べた。味噌と菜っ葉と和えて食べた。カヤカバシという。油はてんぷらなどに使った。	奥澤家で油を搾った。光弘氏の祖父と父が搾った。ジャッキで締めた。昭和28年の水害で道具がなくなってからは、毛原下の尾上家で搾ってもらった。					1本は売却して碁盤を取った。		2022年10月3日
							①奥澤家の榧。家の背後の山。	ヒダリマキガヤ 4本(西浦)。1本は3枝。															
141	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原宮	（西浦史雄）			前中家の榧。	ヒダリマキガヤ 1本。															
142	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原宮（奥出）	角岡千津子			①角岡家の榧。家の横、蔵の裏。	2本以上。	マルガヤ、ナガガヤがある。実が長いのはナガガヤ。		実が落ちるのは10月ごろ。台風の時期。風で落ちる。朝行ったらたくさん落ちている。		夫の母は1日で3000個拾った。箒で掃き寄せて拾った。溝に落ちたのを拾った。道に落ちたのは車が通るために掃いた。	筵に5枚も6枚も干した。	炒って砂糖をからめて食べた。擂って味噌と和えて菜っ葉（ほうれんそうなど）も入れた。カヤカバシという。	夫と榧・椿の油を搾った。夫の親も搾っていた。榧を先に搾った。寒に入ったら（冬の農閑期）に搾った。機械で粉にして、蒸してから搾った。1斗搾って8合ぐらい取れた。あちこちから榧の実をもってきた。勝谷からも来た。昭和の終わりか平成の初めごろまで。	虫くだしになる。十二指腸虫が湧いてもおりる、という。たまに犬のご飯に榧の油を混ぜた。	榧の木をくすぼらして蚊除けにした。			もとは高野山の油になった。戦時中は灯明に持って行った。		2022年9月22日
						5-40、9-2	②角岡家の榧。家の下。	6本以上。ヒダリマキガヤ 2本(西浦)。															
							②角岡家の榧。畑の横。	1本以上。															

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
143	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原宮（畀西）	井上隆夫	母は、高野山は冬場菜種油は凍るけど、榧の油は凍れへんからお灯明として納めたと言っていた。	口絵41、5-41～42	①②⑤井上家の榧。家の前。周辺の井上家の山。	周囲３丈（約9m）の大木が「高野寺領内ノ大木」といわれていた（紀美野町美里町誌編纂委員会2007）。この大木は現存しないが、家の周辺の山に大きな榧の株が複数残る。家の前に雌雄１本ずつ現存。この雄の木は雷が落ちて穴が開いている。	カヤノキ。						母が炒って食べた。	毛原宮の国部家（母の実家）で榧油を搾った。							（紀美野町美里町誌編纂委員会2007）2023年8月14日
144	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（越打）	上柏晥亮（昭和14年）、上柏長子（昭和13年）			（昔から上柏家には榧の木はない。）下の宗和家にあった。								榧の実を拾って食べた。おいしかった（長子）。							養蜂の巣箱（マルオケ）は榧の木で作ると蜜蜂がよく入る（晥亮）。	2020年1月6日
145	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町	毛原中（越打）	宗和重行	高野山に年貢として榧油を納めたという。	口絵42	①宗和家の榧。家の横。	宗和家には榧が２本。うち１本が県指定天然記念物のヒダリマキガヤ。	カヤ。						フライパンで炒って食べた。	平成６・７年に、毛原宮の角岡氏に搾ってもらい、かじか荘で油を使った。		葉を燃やして蚊除けをした。				家の下の神崎家の山に榧が５・６本あった。	2022年11月7日（2023年12月14日）
146	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（越打）	（西浦史雄）			①前芝家の横。	３本ほど。ヒダリマキガヤか。															2022年11月7日
147	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（越打）	（西浦史雄）		5-43	⑥共同墓地。	ヒダリマキガヤ１本。２枝。															2022年11月7日
148	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（古市上）	戎谷隆明の母（有北家の出身）、（神崎博介）			①有北家の横（竹藪）。	カヤ１本。	実は小さい。						食べた。								2022年9月13日
149	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（古市上）	（神崎博介）		5-44	①②松上家の前、家の横、家の下。	カヤ３本。															2023年1月4日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
150	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（古市二）	神崎博介（昭和14年）	高野山に年貢で持って行った。榧は1斗缶に入れていのて（担いで）行ったらしい。凍らない。榧植えるあほと切るあほ、といった。	5-45、11-1（実は他家でもらってきたヒダリマキガヤ）	①神崎家の榧。家の背後（家の上に2本、左上の谷に1本、右上の墓地の下に1本）。	カヤ4本。現存。墓地の下（竹藪の中）のカヤは枯れかけている。	「丸い榧」、「長い榧」（神崎家の榧は丸くて小さい榧ばかりであった。）	夏の終わりごろに木の下の草を刈っておく。越打の山は越打の人を頼んで刈ってもらった。畑の近くの木は養分を吸ったと思う。	実が落ちるのは9月から10月。稲刈りが終わってから拾った。稲刈りは10月20日まで。	落ちた実が止まるように、木の下を段々にしていた。天気のいい日に拾った。家から越打までは半時間かかる。榧はあちこちにあるので、何日も行った。籠に入れ、藁の袋に入れてオイコで背負って家まで運んだ。親と一緒に子どもたちも拾いに行った。昭和35年ごろまで。	昔は1石あった。1斗のドラム缶が10杯あった。	木の灰であくを抜く。	炒って食べる。すりつぶした実を大根葉・白菜などと和える。和え物は味噌は入れない。油も食用にした。栄養がいい。丸い小さい榧のほうがおいしい。	神崎家では搾らなかった。毛原下の尾上家で搾ってもらった。ドンゴロスに入れてリヤカーで運んだ。椿も尾上家に持って行った。神崎家では醤油は搾った。搾り粕を尾上家からもらった。椿の搾り粕と一緒に女性の髪の毛を洗うのに使った。		夕飯を食べるとき、こたつで、榧の枯れたような葉をくすべた。	正月のツツミガシとして、半紙へ、餅・栗・串柿・榧の実・小豆を入れる。	家の上の間の縁板に使っている。昭和30年代、毛原中の大日堂の縁板にも神崎家の榧を提供した。伐採した榧の端材を置いている。まな板にしたらいいと言われたが使っていない。	昭和30年代から40年代に碁盤に伐採することが多かった。神崎家でも順番に伐採して売却。現在まで残っているのは家の近くの榧。	榧を食べたイノシシは肉がおいしい。榧の実ががよくなった年はイノシシの肉がうまいぞという。	2011年8月14日、2014年8月22日、2022年11月4日、2023年1月4日
							②神崎家の榧。家より上流の川沿いの山（1本は道の上）。	カヤ2本。道に覆うようになっていた。吊り橋のワイヤーを榧の木に掛けていた。昭和50年ごろに山崩れで倒壊。川から拾い上げて売却。															
						5-46	②神崎家の榧。家より下流の川沿い（竹藪）。	カヤ1本か。現存。															
						口絵43、44、12-6	②神崎家の榧。毛原中（古市一）の神崎家の畑のはし、神崎家の対岸。	カヤ1本。周囲4m20cm、約600年の年輪。昭和61年に伐採。															
						5-47	②神崎家の榧。毛原中（越打）の神崎家の山（桶谷の奥、宗和家のヒダリマキガヤの下、神崎家の棕櫚山に榧があった）。	カヤ5本ほど。周囲4m以上。昭和中期に伐採。															
151	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（岡ノ段）	丸尾京子			②丸尾家の榧。道の上など。	ヒダリマキガヤ2本（西浦）。1本は4枝。1本以上、伐採。								榧の油を搾る道具の一部が最近まで残っていた。							2022年9月13日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
152	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原中（前窪垣内）	前田勇人	高野山へ榧油を持って行ったと聞いている。		①前田家の上。	1本。							炒って食べた。実を擂ってほうれんそうなどにかけて食べた。	榧の油をまとめて搾った。大きな壺に入れて保管した。			正月のツツミガシに、榧の実・餅・柿を入れた。	臼を作った。	何本か売却。		2022年11月7日
						7-4	②海南高校分校の下。	ヒダリマキガヤ2本(西浦)。1本は3枝。	実が長い。			溝に落ちた実を拾ってボッツリ籠に入れた。											
153	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	小西（大西）	大家啓延（昭和28年に毛原下の石ヶ峰より移転）		12-8						小西に移転してからはほとんど実を拾っていない。			炒って食べた。味噌和えもしたと思う。	父が発動機で榧油を搾ったことがある。			正月のツツミガシに入れるために実を拾った。	榧を切ったときに祖父が植木鉢を作った。まな板を作った。			2022年11月28日
154	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	小西	（西浦史雄）			オートキャンプの上。	ヒダリマキガヤ1本。															
155	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（赤地）	中谷キミヨ（昭和8年）、中谷嘉夫		口絵3、45	①中谷家の榧。家の背後。	ヒダリマキガヤ1本。2枝。県指定天然記念物。			二百十日ごろから実が落ちる。			雑木を焚いた灰で練ってあくを抜く。	炒って食べた。大根葉の抜き菜の先だけ取ってゆでて、味噌を入れてすって食べた。油はてんぷら、炒め物に使った。	毛原下の尾上家で搾ってもらった。ドンゴロスに入れて背負って行った。油は1升瓶に5・6本もらってきた。榧の油は冬でも凍らない。椿は毛原下の田下家で搾ってもらった。		牛の蚊除けに榧の枝をくすべた。	盆のタナバタサンに、榧の枝を供える。		将棋盤に売った榧の木は、1本で10いくつ碁盤が取れたという。		2022年9月13日
							②中谷家の榧。家の奥。	昭和28年（水害）までに伐採。															
							②中谷家の榧。前中家の近く（近所）。	昭和40年代ごろに伐採。大きな株が残っていた。															
							②中谷家の榧。石ヶ峰の山林。	ヒダリマキガヤか。枯れている。	細くて長い。														
156	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（赤地）	中谷康弘			②中谷家の榧。家の前のほう。	5本あった。昭和28年の水害で流された。															2023年8月14日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
157	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（東原）	美野啓子（西畔家の出身）	高野山は榧の油が凍らないから欲しいといった。	口絵46	①西畔家の榧。西畔家の周辺。１本は家の入口。１本は家の奥（谷のそば）。	ヒダリマキガヤ２本現存。１本は４枝。県指定天然記念物。			９月中ごろから。１か月もない。毎日落ちる。		なるときとならないときがある。	１週間ほど灰で合した。洗って、筵の上に干した。筵の端を持って実を返した。３・４日干した。莚５枚ぐらいか。	炒って食べた。油が出るまで実を擂って、大根葉・味噌と和えて食べた。カヤカバシという。食用油は榧油ばかりだった。	毛原下の尾上家で搾ってもらった。							2022年11月7日
							②西畔家の榧。石井家の下（西畔家より貴志川の対岸）。	水害で流れた。	実は長い。			学校からの帰りに拾ってこいと言われた。青い皮を取って、竹の大きな籠に入れて持ち帰った。											
158	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（東原）	冨家亘子（石井家の出身）、井谷洋子（石井家の出身）	榧の油は凍らないので年中使える。火をとぼすのに真冬でも凍らんという。		（石井家の下にあったのは西畔家の榧。）								榧を擂って、菜っ葉と和えて食べた。	菜種油を尾上家で搾ってもらった。							2022年9月22日
159	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（西原）	東中啓吉			東中家の榧。	１本あった。今はない。				実を拾った。			炒って食べた。擂って味噌・菜っ葉（ほうれんそう・白菜など）と和えて食べた。								2022年7月4日・9月15日
160	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（平岩）	尾上由美子、（作嶋好司、美野勝男）		口絵80、81									油はてんぷらなどに使った。	夫の父は榧・椿・菜種の油を搾った。機械で搗いてから搾った。醤油も搾った。夫の祖父は毛原中で油を搾っていた前田家の出身。	怪我をしたところに榧油を塗ると化膿止めになった。				夫の父は高野山の小堀南岳堂に榧油を販売していた。昭和後期まで。		2022年9月13日、2023年2月18日・8月14日
161	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（平岩）	冨家亘子（昭和９年）、西浦民子（冨家家の出身）	榧油は凍らないので年中使える。		②冨家家の周辺。	３本（大きなのは１本）。	マルガヤ、ナガガヤという。ヒダリマキもいったらしい。					灰を合わして洗って干した。	炒っておやつに食べた。			枝をくすべた。	正月に、榧・栗・餅・みかん（柑子）・串柿を入れて、神さんごとに供えた。				2022年9月13日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
162	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（寺原）	美野勝男（昭和15年）、美野啓子（昭和14年）		口絵75、93、5-48	①④⑤美野家の榧。家の周辺（釈迦堂の下の道沿い）。	1本。				クッキー製造時、毛原宮の角岡氏の実も拾わせてもらったことがある（啓子）。		「青い皮を取って灰で合して、洗って干して、硬い殻取って、渋取って、6回手間かかる。まだつぶして食べる」（啓子）。	実を炒って食べる。母親に習っているのでカヤカバシもする。砂糖を炊いて、榧を中へ入れ、砂糖をまぶして食べる（啓子）。	尾上家で榧油を搾っているのを見た（勝男）。			正月のツツミに、榧・栗・小さい餅・柑子・みかん・ギンナン・串柿、7つほど半紙に包んで入れて神棚などに供える（啓子）。		4・5年前まで加工グループで榧クッキーを作って販売した（啓子）。	榧の木の下に養蜂の箱を置いている。	2022年11月7日、2023年2月18日・8月14日
							②美野家の榧。美野家周辺か。	太い榧は10本はあった。伐採。															
163	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（寺原）	田下雅暎	植えるあほうに、切るあほう、と聞く。		②田下家の榧。田下家の横の谷。	6本以上。4つ株がある。2本残っている。木は横へ伸びていた。	実は細長かったと思う。							父親のとき、機械で榧・菜種・椿の油を搾った。昭和30年初頭まで。			正月、ツツミモノに餅・柑子・串柿・榧の実・ギンナン・落花生を入れる。ツツミモノに入れる。半紙へ包んで供える。串柿も入れて供えた。				2022年12月9日、2023年2月18日・8月14日
							②田下家の榧。イデ奥。	1本。															
164	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（石ヶ峰）	大家啓延（昭和28年に毛原小西に移転）	高野山に年貢で持って行った。植えるあほうに、切るあほう、といった。		②大家家の榧。田の周辺（元の大家家の下、現在は檜山）。	2本以上。「田んぼの前に、大きな木がばさっとなってた」。田の上に株が1つ残る。				石ヶ峰の人を雇って実を拾った。									昭和44年ごろ、碁盤にするために多数伐採。		2022年11月28日
						口絵47	②大家家の榧。神田谷の際（元の大家家の下、現在は檜山）。	17本以上。ヒダリマキガヤか（西浦）。横に伸びている木が多い。谷の奥にまっすぐの榧がある。実が長いものが多い。17本現存。															

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
165	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（石ヶ峰）	作嶋好司（昭和10年）、石井美幸（作嶋家の出身）	「植えるあほうに、切るあほう」と、昔から言う。接ぎ木をして増やした。		②作嶋家の榧。漆谷（作嶋家の田の周辺から谷の際）。	10本以上（作嶋家の榧が一番多かった場所）。2・3本残る。	実が長い榧をナガガヤという（作嶋）。木がまっすぐの榧はタテガヤ、枝が下に張った榧はヒラガヤという（石井）。	祖母は実を拾う前に下草を刈った。	風が吹いて雨が降る日はよく落ちる。	母と妹（石井美幸氏）が拾っていた。漆谷にも行ったが、家の周辺でも拾った。下に板を並べて、実が溜まるようにしていた。足で実を踏んで青い皮を取って籠に入れた。あるいは落ちてから放置して、皮が黒くなったころに拾った。藁で作った袋に入れて背負って持ち帰った。	持ち帰ったのは1回で1斗5枡強ぐらいか。	灰と混ぜて1週間ほど置いてあく抜きをする。中が黒くなっていると渋が抜けている。灰を洗って軒先で筵の上に干した。何回も繰り返して干した。	炒って食べた。擂って味噌・大根葉・白菜と和えて食べた。カヤカバシという。擂った実を野菜に振りかけて食べることもあった。	父親のとき、榧油を搾った。臼で搗いて、蒸篭で蒸して、矢で締めた。父親はジャッキをつけた。昭和20年代まで。	下痢にいいと言った。	牛小屋で焚いた。	正月のツツミに入れて神さんへ供えた。栗・榧の実など5つぐらいを入れてツツミにした。	弟が株を引いてきて碁盤を作った。板を縁に使うように置いている。	5代前の作嶋喜左衛門は知恵者で、金儲けが得意であった。高野山へ榧油を持って行った。杉を植えるために20～30本伐採。碁盤にするために売却。		2022年9月22日・12月9日（石井美幸氏は2022年11月、西浦史雄氏の聞き取り）
							①作嶋家の榧。家の近く。	複数。直径30～40cmぐらい。1本現存。															
							②作嶋家の榧。イデ奥。	4本以上。1本現存。株が3つほど残る。															
166	那賀郡→海草郡	長谷毛原村→美里町→紀美野町	毛原下（石ヶ峰）	（作嶋好司、美野啓子、田下雅暎）			②式地家の榧。式地家の下の道沿い。																
							②通称、式地田の下（寺原の美野家の上）。	ヒダリマキガヤ1本。幹周5m以上（西浦）。															

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
167	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川(東原)	東平正司、東平直子		口絵73、85、86、87、89、12-2	②⑥東平家の榧。墓地(東平家の下)の前。	2・3本。大きなのは1本現存。自然に生えた小さい木もある。植えた榧もある。				実が落ちるのは忙しい盛り。夫の父が拾った(直子)。	出来不出来がある。夫は7年に1回よくなるといっていた(直子)。	合わす方法を滝ノ川の前田氏に教えてもらった。濡れた筵をかける。乾いたらいけないという(直子)。	擂って、菜っ葉(小松菜)と味噌と和えた。夫の母がしていた(直子)。	毛原下の田下家で榧の油を搾ってもらった。昭和30年代までか(直子)。			正月に、半紙へ榧・栗・柿と小さい餅を包んで、ツツミにした。ツクリゾメに供えた(正司)。盆に、二又になっているの榧の枝をコイモの葉へ供える。枝に実が2つついてるのを供えた(直子)。	上の間の縁板は榧。下の間の縁板は檜。家の周りのしぶき板も榧。小机も榧で作っている(直子)。	昭和後期、夫の父は奈良県の製薬会社に漢方として農協を通じて、榧の実を出荷していた(直子)。		2013年1月8日、2022年11月4日、2023年8月14日
168	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川(東原)	(東平直子)			石本家の榧。	日陰になって枯れた。															
169	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川(東原)	(東平直子)			前田家の榧。						家の榧がなくなったので、東平氏の榧を拾った。	実を土の上に置いて、上からみしろをかけて合わす。									2022年11月4日
170	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川(東原)	中浴美保子(昭和5年)	昔は、榧の油を高野山に納めたという。						9月の彼岸ごろ。			灰で合わせて、洗って乾かして、炒って食べた。	子どものころ、榧の実を拾って食べた。蜂の子みたいになる。	油に搾ってもらうこともあった。搾る場合は、合わさんと乾かして搾るところへ持って行く。神野市場にあった。				臼は榧で作った。			2013年1月8日
171	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川(東原)	(西浦史雄)			桐浴家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。															
172	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川(西原)	上中祥宏(昭和11年)、上中けい子		口絵48、13-2	①上中家の榧。家の背後。		マルガヤ・タチガヤは木はまっすぐ、実が小さい、実は右巻き。ヒダリマは木は横に伸びる、実は大きい。					灰で合した。莚で干した。	つぶして菜っ葉へ入れた。長い榧は渋が取れにくい。丸い榧のほうが食べやすい。細長い榧は硬い。			木っ端にしてくすべた。	正月に、半紙に干し柿・柑子・榧の実などを入れて供えた。	縁板は榧。	祥宏氏は有田川町・紀の川市などで榧などを伐採する仕事もした。	榧の木の下に祠を祀っていた。	2022年11月11日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
173	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川（西原）	井谷英雄（昭和13年）、井谷洋子（毛原下の石井家の出身）			②井谷家の榧。周辺の山。	2本あった。	小さく丸い実だった。					灰で含した。	ほうらくで炒って食べた。							榧笛を作って遊んだ。	2022年11月4日
174	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	滝ノ川（西原）	（西浦史雄）		5-49	①西前家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。幹周5m以上（西浦）。															2022年10月14日
175	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷（松戸）	浦宏子（昭和9年）、浦和宏	昔は灯明の油を取った。	5-50	①浦家の榧。家の手前（道のそば）。	大きなのが1本あった。ヒダリマキガヤか。昭和48年ごろ、道をつけるために伐採。切った榧のそばに14・5年になる榧が生えている。	まっすぐに伸びない。														2015年8月10日
176	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷（松戸）	谷田蔦子（昭和9年）、谷田幸雄		5-51	①谷田家の榧。家の背後の山すそ（棕櫚の間にあった）。	3本以上。昭和20年代以前に伐採。	実が丸い榧はマルガヤ。実が長い榧はナガガヤ。		10月末ごろか。	谷田家の榧は伐採してなくなっていたので、他家からもらった。幸雄氏は学校へ行くとき、橋戸家の実を拾った。		灰で練って埋めておく。洗って干す。	擂鉢や薬研で擂って、大根葉・味噌と和えた。カヤカバシという。実の長い榧のほうがおいしい。	油を搾ったと聞いた。売って金にしたという。蔦子氏の夫の祖父のころ。		幹を牛屋の前でダスに入れてくすべた。	正月には必ずツツミへ入れて神さんへ供えた。榧・栗・柑子・餅・串柿を入れた。				2022年10月14日
177	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷	（西浦史雄）			樫本家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。多枝。															
178	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷	（西浦史雄）			中家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。															2022年10月14日
179	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷	（西浦史雄）		5-52	森本家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。															2015年8月12日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
180	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷（丸山）	坂詳隆（昭和10年）、坂千賀子（昭和15年）、中尾早子（坂家の出身）	高野山へ油をだいぶ持って行ったと聞いた。高野山に明かりをともすのに使ったとよく聞いた。榧の油は貴重品やったと聞いた。	口絵49	①⑥坂家の榧。家の横、墓地の横。	ヒダリマキガヤ1本。2枝。県指定天然記念物。	マルガヤは木がまっすぐ。タテガヤは木は横になる。		彼岸ごろから10月。	木の下が道になってからは、車が通るので掃きに行った。		灰で合して1週間か10日おく。	擂鉢で擂って、菜っ葉（白菜や大根葉）を入れた。カヤカバシという。	タテガヤは油を搾る。毛原下の尾上家で油を搾ってもらった。		蚊除けにくすべた。	ツツミモンといって、半紙へ榧・栗・柑子・餅・串柿を入れた。	縁板は榧を使っていた。		榧は風に強い。大きな風が吹いてもびくともしない。	2022年10月14日
							②坂家の榧。家の背後の山。	カヤ。雷が落ちて枯れかかっている。					マルガヤは実が少ない。										
181	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷（西谷）	西上禮伊子（昭和3年、禮伊子氏の家は分家）	榧の木植えるあほうに、切るあほう、といった。	口絵92、8-1、12-7	①西上家（本家）の榧。家の周辺。	大きな榧の木があった。伐採した。1本現存。	橋戸家の榧は長いのばかり。			谷の橋戸家が親戚にあたるので、拾わせてもらった。本家の妻と一緒に拾いに行った。朝早くか夕方に拾わないと車につぶされる。		灰で合わせて、洗い、筵の上で干した。	カンテキで炒って食べた。レンゲやミキサーでつぶして、菜っ葉・味噌と和えて食べた。				正月の鏡餅の隅へ榧の実・栗などを置いた。	本家では家の縁板に使っていた。縁板のために切ったときに碁盤を作ってもらった。その後、切った木の末をもらって臼を作った。		観音講に行くときに炒った実を持って行き、谷田蔦子氏らと食べた。	2022年10月3日
182	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷（西谷）	南出典子		口絵50	①上南家の榧。家の下。	ヒダリマキガヤ1本。県指定天然記念物。						灰と合わせる。	母は炒って食べた。	祖母は自分で油を搾ったという。							2022年6月1日
							①上南家の榧。家の下（デッキの前）。	実がならない。花粉が飛ぶ。															
183	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷	（西浦史雄）			南家の榧。墓地の近く。																
184	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	谷（西谷）	橋戸常年、（西上禮伊子）		口絵8、51	①橋戸家の榧。家の周辺（道の上）。	ヒダリマキガヤ4本。県指定天然記念物。				榧の下に棕櫚皮の作業場があった。盆過ぎから、その屋根に実が落ちて「ぱーん、ぱーん」と鳴った。この音を聞くと夏休みが終わると思った。	母と祖父、祖母が拾った。道に落ちているので、通りがかりの人も拾った。	ぱけつに灰汁にして、2・3日つけて、干して乾燥させる。	火鉢で焼いて食べた。	毛原下（貴志川南岸、尾上家か）で搾ってもらった。常年氏は昭和30年代初めに搾ってもらいに行ったことがある。	炒って食べると寝小便せんようになるといった。		「正月に供えるのに拾わせてくれよ」と拾う人があった。	縁の板に榧を使ってた。	昭和30年代に木を売ってほしいと来たが、売らなかった。		2022年9月15日
							②⑥橋戸家の榧。家の周辺（墓地）。	ヒダリマキガヤ1本。県指定天然記念物。															

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
185	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	中	前田弘子（昭和18年）		口絵52	②⑤前田家の榧。道のそば。	ヒダリマキガヤ1本（西浦）。枝が3つに分かれていた。川の上まで枝が伸びていた。2020年ごろ、道路工事のために伐採。	長い実だった。				1斗缶いっぱいあった。	1週間から10日、灰と合わす。皮が黒くなってきたらいい。洗って干す。食べるために合わすのは1升か2升。	すりつぶして、菜っ葉（大根葉）と合して食べた。味噌と砂糖も少し入れる。	油を搾ると聞いた。		蚊くすべにした。青い皮をくすべた。	正月にツツミに榧の実を入れた。盆には葉と実がついている枝を供えた。	鮎を捕るときのタモのふちにした。			2022年10月31日
							②大きな榧の背後。	1本以上。															
							前田家の背後。	1本以上。															
186	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	中	（西浦史雄）			西家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。直幹2本。															
187	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	中	（西浦史雄）			前岡家の榧。	ヒダリマキガヤ1本。															
188	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	松ヶ峰	峯尾佳伸（昭和10年）、峯尾弘子（昭和17年）	昔は年貢を高野山に持って行った。榧の油も持って行ったという。凍らないから使った。弘法大師が定に入るのに高野山へ行くとき、植えもて（植えながら）行ったという。古い家のとこにあるのは植えて行ったという。	口絵53	①峯尾家の榧。家の前（畑の横、現在は道の横）。	ヒダリマキガヤ1本。3枝。道の上でじゃまになる枝を切ったことがある。台風で枝が折れた。県指定天然記念物。	山にある榧は実が小さい。峯尾家の榧はオオガヤと呼んでいた。		実は毎年ならない。9年かかる。風が吹いたり、雨が降ると落ちる。台風で無理に落ちると皮が剥きにくい。朝と晩に落ちる。昼はあんまり落ちない。蒸し暑いときによく落ちる。	ばけつを持って拾ってきた。朝、掃いて寄せておいて拾う。		干して灰で合して、紙で上を湿らせて4・5日おいておく。	炒って食べた。炒って擂鉢で擂って、味噌と菜っ葉（小松菜やネギのぬた）と和える。榧は保存食なのでおいておき、暑いときに食べた。砂糖を入れて和え物にしたこともある。			折れた枝などを蚊除けにくすべた。夕方、外でくすべた。	正月に神さんに、餅・柑子・串柿・榧の実を半紙に包んで供えた。	床下に榧の板を使っている。廊下の板に榧の板を使っていた。玄関の柱は榧と言ってたと思う。	薬にするといって農協を通じて製薬会社に販売したことがある。炒った実をかじか荘で売ったことがある。		2012年8月14日、2022年9月15日
189	那賀郡→海草郡	猿川村→国吉村→美里町→紀美野町	菅沢	上北治子（岡田家の出身）			（岡田家には榧はなかった。）								食べた。					縁板に榧を使っている。			2022年11月11日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
190	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	鎌滝（恩徳）	浦野静範		口絵78、79	②浦野家の榧。家の下（道のそば）。	1本。中にゴロ（穴）が開いた。伐採。								静範氏も榧と椿の油を搾ったことがある。唐臼で実を砕いて、蒸してから搾った。矢で締めて搾った。（搾油機は現存。）粕で頭を洗った。		食事のときに、蚊除けに櫓ごたつでくすべた。				榧の木は「はしかい」ので登るなと言われた。	2022年9月22日
191	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	鎌滝（恩徳）			5-53	②東家の榧。家の周辺（道の上）。	2本。															2022年9月22日
192	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	鎌滝（恩徳）				大隅家の榧。																
193	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	津川	（西浦史雄）	先祖より「左巻きカヤで珍しい、大事にせよ」と言い伝えあり（西浦）。		沼田家の榧。家の横。	ヒダリマキガヤ1本。															
194	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	津川	前西宏純氏の妻		口絵94、5-54	①前西家の榧。（榧の隣に楠の大木がある。）				雨が降ったらよく落ちる。9月の台風のころに落ちる。			皮を剥いて灰をどろどろにしておいておく。洗って干す。そうすると何年でももつ。		油を搾ると聞いた。						母屋と離れの間の屋根に実が溜まる。溜まらないように屋根の傾斜を強くした。	2022年11月11日
195	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	三尾川	（浦野静範氏の妻、三尾川の出身）			実家に榧があった。		実は長かった。						食べた。おやつにした。								2022年9月22日
196	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	上ヶ井	（西浦史雄）			蛇岩神社の下。	ヒダリマキガヤ1本。															
197	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	上ヶ井	中尾スミ子（大正12年、田中家の出身）			田中家の榧。	「ようさんあった」「どっさりあった」今はない。			9月。	学校から帰ると「榧拾いせー」といわれて行った。蚊取り線香を持って行った。実を拾って大きなドンゴロスへ入れて売った。	何石と拾った。大きなカマスに3杯、5杯と売った。	灰で合わせた。		油を搾る人は下佐々あたりにいた。							2013年12月26日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
198	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	上ケ井	（西浦史雄）			横山家の榧。																
199	那賀郡→海草郡	上神野村→美里町→紀美野町	上ケ井	（西浦史雄）		5-55	①林家の背後。	カヤ１本、ヒダリマキガヤ１本。幹周 5m 以上。															2022年12月9日
200	那賀郡→海草郡	下神野村→美里町→紀美野町	箕六	横山美枝（大正 13 年、中谷家の出身）、中谷有希	榧の油は凍れへんらしい（美枝）。高野山へ蝋燭の油として納めた。そのために榧を植えたと聞いた（有希）。植えるあほうに、切るあほう、という。父が言うてた。切ったらあかんで、といってた（有希）。	口絵 54	①中谷家の榧。家の前。	１本。			8 月末から 9 月いっぱい。			灰を合す。1 週間から 10 日。洗って、陰干しする。1 週間から 10 日、干す。からから音がするようになる（有希）。	榧は炒って食べた。カヤバヤシもした。味噌和えだった（有希）。	中谷家で油を搾った。「棒を組んで、長い棒で押して締めていた。」「みんな、油にしてほしいと来た。」菜種も搾った（美枝）。	榧は虫下しになるという。		正月に餅・みかん・榧の実を半紙に包んで神棚と仏壇に供える（有希）。	船の材料になった（美枝）。			2013年11月5日、2022年12月9日
						口絵 55	②中谷家の榧。中谷家の山（家よりも下）。	5・6 本。															
							②中谷家の榧。中谷家の山（榧の木原）。	大きな木。何本もあった。ほとんど伐採した。		榧の木の原という場所があった。実家の山だった。ひと山に榧の大きな木があった（美枝）。													
201	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	勝谷			口絵 56、5-56	④善福寺境内。	幹周 2 丈 2 尺。樹高約 13 間。里人は推定樹齢 1000 年以上と称する（和歌山県 1935）。カヤ 2 本現存。現在も県指定天然記念物。															（和歌山県 1935）、2013年7月19日、2015年8月12日
202	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	勝谷	前代清子（昭和 4 年）										あくが強い。皮を剥いて、あくを抜くために、灰を練って、1 週間から 10 日漬けておく。	洗って炒って食べた。こおばしい。	毛原で搾ってもらった。毛原に会社があった。実を採って持って行った。						イノシシが実を食べる。	2013年9月11日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
203	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	円明寺	上北浩章(昭和13年)、上北治子	高野山は寒いから凍るので、榧の油で灯明をつけた。高野へ納めたという。枝が垂れ下がって地についたら1000年たってるという。榧は大きならん。植えるあほう、切るあほう、という。そんなもの植えるもんじゃない、切るのもいけない、という。		②⑤山林。1本は円明寺(楠尾)への旧道沿い。1本は梅畑の近く。	ヒダリマキガヤ2本(西浦)。				なるときとならないときがある。成り上がって、成り下がる。3年目ぐらいでたくさんなる。少しずつ減っていく。		あくを取って干した。	炒って食べた。父の時代は油も食用にしたらしい。	父親は毛原で油を搾ってもらった。	虫下しにいいといった。回虫が湧いたら榧の油を飲ませた。	牛小屋・馬小屋で蚊除けに榧の葉をくすべた。					2022年11月11日
204	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	北野	(西浦史雄)			北野に榧が1本ある。																
205	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	花野原	(峯尾弘子、花野原の出身)			⑤道沿い。					学校からの帰りにたくさん落ちていた。			炒って食べた。								2022年9月15日
206	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	蓑津呂	前坊秀子(昭和5年)			前坊家の家の前。	大きな木だった。枯れた。							炒って食べた。								2013年12月25日
207	那賀郡→海草郡	真国村→美里町→紀美野町	真国宮	(上北浩章)			三浦家または松山家。	大きな木だった。伐採した。															2022年11月11日
208	那賀郡→海草郡	志賀野村→紀美野町	東野	伊南益代(昭和15年)		口絵57	①田の横(伊南家の横)。	カヤ(西浦)。1本。					実はほとんどならない。		食べたことはない。							榧の根元に祠(伊勢)を祀る。	2023年1月4日
209	那賀郡→海草郡	志賀野村→紀美野町	西野	赤阪恵子(昭和18年)	榧油は高野山でも凍らない。		④西方寺(西野集会所)の下。	昭和20年代まで西野にも大木があったが伐採した。寺の下には今も榧がある。															2014年8月8日、2015年9月7日
210	那賀郡→海草郡	志賀野村→紀美野町	西野	(伊南益代、赤阪恵子)			西野の上のほう。	大きな榧があった。伐採した。															2014年8月8日、2023年1月4日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
211	那賀郡→海草郡	志賀野村→紀美野町	松瀬	結城嗣郎(昭和17年)			北峰の山。	大きな榧がある。				拾いに行った。			炒って食べた。								2013年8月1日
212	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	中田(東原)	西浦玉純(昭和13年)	高野領なので、万灯のお灯明の油を搾るのに、高野山が推奨して植えたと思う。	口絵4、58、12-3	①西浦家の榧。家の背後。	カヤ1本。	実は小さい。		9月の中ごろから落ちる。10月の中ごろまでか。雨が降ったり、風が吹いたらよく落ちる。朝にたくさん落ちている。	祖父、祖母が拾っていた。毎日拾った。	隔年になる。多いときは米俵に1俵あった。	灰と混ぜて、10日から半月ぐらい積んでおく。庭に山のように積んでいた。10日ぐらいしたらアワル(渋が抜ける)。皮を取って、洗って、干す。灰と合わせると皮が取れやすい。	炒って食べた。小粒の榧は甘みがある。味噌と菜っ葉と和えて食べた。玉純氏が子どものころ、近所の人たちが風呂に入りに来て、囲炉裏で当たりながら、ほうらくで榧の実を炒ってみんなで食べた。このとき、どぶろくのあてにして年寄りが食べていた。	下佐々(紀美野町)で榧・菜種の油を搾ってもらった。榧の油は食用に使った。榧油は甘い。	風邪ひきにくいといった。昔は油分を取ることないから、油分を取るのがよかったのか。	蚊除けに、枝を囲炉裏でくすべた。葉も入れた。	正月に、串柿・榧を餅の上に置いた。	戸袋に榧を使っている。栗、榧、槙は腐りにくい。榧はやわらかいので、板にしたら割れやすい。	木を碁盤にするといって買いに来た。実を薬種として奈良県に売った。	子どものころから、太さは変わらないが、枝は伸びて下がってくる。新宮市では、榧は水の上に浮くといい、持ってきてほしいと言われた。	2022年9月30日
						口絵7、59	①西浦家の榧。家の横。	ヒダリマキガヤ1本(西浦史雄)。	実は長い、実もねじっている、おいしくない。														
							②西浦家の榧。西浦家の山。	2本。伐採。															
213	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	中田(東原)	(西浦玉純)			①前家(本家)の榧。	1本。				味がないといって拾わない。											2022年9月30日
214	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	中田(東原)	(西浦玉純)			①前家(分家)の榧。	3・4本															2022年9月30日
215	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	中田(東原)	(西浦玉純)		5-57	①尾形家の榧。道の横。	カヤ1本。2009年、学術推薦樹。															2022年9月30日
216	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	中田(西原)	(西浦玉純)			西峰家。																
217	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	中田(西原)	(西浦玉純)			南家(本家)。																
218	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	梅本	(西浦玉純)			中谷家。																
219	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	梅本	(西浦玉純)			中村家。	伐採。															
220	那賀郡→海草郡	小川村→野上町→紀美野町	梅本	(西浦玉純)			寺田家。	伐採。															
221	名草郡→海草郡	直川村→和歌山市	直川	(山元晃)			墓の谷の入り口。	直径20～30cm。															

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
222	海士郡→海草郡	加茂村→海南市	大窪	中道一郎(昭和15年)、中井富美夫、宮本芳比古				大きな木があった。たくさんはなかった。	油気があるので碁盤にいいといった。						渋いし苦いし、食べられない。	油は搾っていない。				碁盤にする木だった。		実を親しい料理屋にあげることもあった。	2014年8月28日
223	有田郡	安諦村→清水町→有田川町	杉野原(野中)	松浦金三	昔から年寄りの人が言うのに、植えるあほうに、切るあほう、という。育つのに時間かかるし、切ったら終わりなので。榧の油は凍らないという。	口絵9、60、5-58	①松浦家の榧。家の裏(木の下は家の庭、反対側の下は松浦家の棕櫚山)。	ヒダリマキガヤか。	マルガヤは木はまっすぐ大きくなる、実は小さい。実が長い榧は木は曲がってねじっている。	じゃまになる部分は切ったが、切ったら腐りが入ってよくない。杉・檜の場合は切ったところを巻いてしもまうが、榧は「大きなりかたがまたい(ゆるやか)ので、よう抑えんので(傷口をふさぐことができない)。そこから腐ってくる。	秋にぱらぱら落ちる。いっぺんに落ちない。後から後ちる。	母が拾っていた。家の庭だけ拾った。反対側の棕櫚山のほうは拾わなかった。	腰付カンゴで5杯ぐらい拾った。外の皮を取って実だけ籠へ入れるのでかなり入る。	上皮だけ取って、中の茶色い実を灰水へ入れて、2日ほどおき、あく抜きした。あく出しして筵に干した。	ほうらくで炒って食べた。冷えた実を食べた。「あんばい焼くと渋みも取れる」。実を擂って菜っ葉の上に振りかけた。	周囲に油を搾ってくれるところがなかった。昭和40年ごろ、野上(紀美野町)の油を搾ってくれるところに出した。		蚊除けに榧の枝をくすべた。カンテキにほりこんでくすべた。	正月、半紙へ榧の実と干し柿、餅を入れて供えた。	縁板に榧を使っている。			2022年12月22日
224	有田郡	安諦村→清水町→有田川町	杉野原(野中)				坂本家の榧。	現存せず。坂本家は昭和28年の水害で流された。															
225	有田郡	安諦村→清水町→有田川町	杉野原(野中)	上林祥良(昭和12年)、上林洋子(昭和17年、かつらぎ町花園梁瀬(峰手)の出身)	榧の油は高野山の灯心に使うと聞いた。		(上林家には榧はなかった、坂本家の榧の下に上林家の棕櫚山があった。)		マルガヤは実は小さい。実が長い榧もある。			家に榧はなかったが、自分の山に落ちた実を拾う権利があった。	拾ったのは1斗か2斗ぐらい。		もんで渋取って、すりつぶして、こんにゃくの榧和えにした。榧は味噌和えだった。	父親はジャッキをつけた道具で榧の油を搾った。			正月、鏡餅の周りに榧の実を置いた。	縁板は榧。油で磨いた。節がなく、白っぽい。榧は枝が十字に出るので、鮎釣りのタモに最高。	榧の苗を出荷したことがある。		2022年12月22日
226	有田郡	安諦村→清水町→有田川町	杉野原(野中)			口絵10	①⑤⑥松浦家の榧。	ヒダリマキガヤか。															2022年9月2日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
227	有田郡	安諦村→清水町→有田川町	板尾	松浦美佐男		5-59、13-1	②松浦家の榧。家の周辺（谷）。			父は枝ぶりを見て、先のほうを落とすなどはした。榧には蘭が生える。つきすぎると木によくないといって適度に取っていた。				灰をまぶして渋を取る。祖母がやっていた。	炒って食べるだけだった。	油を搾れると聞いたが、搾ったことはない。				鮎釣りのタモにする。普通は互い違いに枝が出るが、榧は同じとこから枝が出る。	母が清水のあさぎりへ実を出したことがある。木を将棋盤にすると買いに来たことがあった。	榧の株元に蜜蜂が住み着いている。木によくないので詰めるが、すぐにまた入る。知り合いが蜜蜂を捕獲しようとして巣箱を置いている。	2022年12月22日
228	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	上湯川	小松久			小松家の榧。家の周辺。（ユデの上など）3本ほどあった。大阪の業者が来て伐採した。													売却した際、碁盤と将棋盤を作って、くれた。			2022年6月20日
229	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	下湯川（福井）	（大久保家宏）		口絵 61	②⑥藤田家の榧。家の横（山、墓地の前）。2 本ある。																2022年9月26日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
230	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	下湯川（中村）	大久保家宏（昭和15年）	高野の灯明に送ったはず。榧の油は凍らんので。	口絵2、5、83、5-60、6-2、6-3、7-5、12-4	①大久保家の榧。家の背後。	カヤ1本。5.15m（清水町誌編さん委員会1995）。	マルガヤは実は右に撒巻いている。オオガヤは実が大きい。ヒダリマキは実は細長い、左に巻いている。		実が落ちるのは9月から10月。実は毎年なら ない。雨が降るとき、ひらひら開く。開いて落ちてるのが多い。1か月から40日ぐらいかかって熟したのがぱらぱらぱら落ちてくる。実は枝先になる。ヤマガラが食べる。ちょうど榧の実が落ちるころからヤマガラが来る。	屋根からつたって落ちる。家のネキ側へ集めておいとく。もう落ちないなというときまでかためておいて拾った。道は踏むので、2・3日に1回拾った。実を積んでおくと、手でなでるだけで外の皮が剥ける。祖母が拾っていた。母のときは、ほかの仕事があるからあまり拾わなかった。榧が落ちるのは、稲刈りと重なる。米の穫り入れを優先した。	多いときは1石ぐらいあった。米入る2斗袋に4本あった。7～8斗あったことになる。このときは、木の前（家側）だけで拾った。裏（山側）は拾わない。20年ほど前、70kg拾った。	粗皮（外の皮）を取って、洗って、1週間ほど灰で合わす。土間へ広げて、灰をまぶして筵をかぶせておく。全体に包んでしまう。1週間ほど。土間では周りを囲っていた。今は木の箱か発砲スチロールで合す。合わしてから洗って乾燥する。	榧はチン（おやつ）に、ほうらくで炒って、冬の夜なべのときに食べた。今は、レンジで温めて、皮を剥いて、手でもむと黒い渋皮が取れる。油は食用で使った。オオガヤの味はおおざっぱ。	戦後、昭和21・2年ごろ、清水のおもてやで榧の油を搾ってもらった。父は自転車で行った。1升瓶で油を持ってきた。その後、父が鋳物で作った搾る機械を買ってきて、家で搾ったことがある。ネジで回して圧縮して搾る機械だった。鋳物が割れてからは搾らなくなった。現在は、鹿児島県の製油会社に送って搾ってもらっている。			正月に、神さんへみかん・餅・串柿・榧を供える。串柿は2つずつに切って供える。榧は2つか3つ。神棚へはそのまま供えた。ほかの場所は障子紙に包んで供えた。正月の朝、みかん・串柿2つ・餅・榧の実を子どもらが1個ずつもらって、大事に食べた。		清水のあさぎりに実を持って行ったことがある。高野山の笠国（土産物屋）で榧せんべいを売っていた。毎年、1袋か2袋持って行った。	榧は根っこがイイ匂いする。シシは実があると思って掘り返してしまう。春先になるとリスが拾いに来る。	（清水町誌編さん委員会1995）2022年6月23日・9月26日
							①大久保家の榧。家の背後。	「オオガヤ」1本。第二室戸台風で折れたが、株が残っていて枝が伸びている。何回か枝を伐採した。	実は全体に何倍かふくらした感じ。この木は5月ごろに花が咲いて真っ黄色になる。オオガヤは実があまりならない。														
							②大久保家の榧。畑の上など。	小さい木が5本ぐらい。畑の上の榧は生えてきて40年ぐらいになる。1本はオオガヤの子。あとはマルガヤ。	40年ほどになる榧は、4・5年前から実がなる。実がなるまで30年ぐらいかかる。														
231	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	下湯川（下村）	西脇直次			西脇家の榧。	カヤとヒダリマキガヤか。	細長い実の榧と短い実の榧がある。						炒って食べた。								2022年6月23日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
232	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	下湯川（多井）	峰伸汎（昭和14年）	灯明に榧の油を入れたら凍らん、という。	口絵62	①峰家の榧。家の前、峰家の上。合計4本あった。	家の上に「ふた抱え」の榧がある。2本伐採した。			8月末ごろから彼岸向いて実が落ちる。	実を拾うのは家の前の榧だけ。今はあまり拾わない。車のタイヤが汚れるので掃いている。		木の灰で合わす。	合してフライパンで炒ったら、中が蜂の子みたいで真っ黄色。油は自家用で使った。	多井の田中家で榧油を搾った。はたいて、蒸して、矢で締めて搾った。雪の降るときに、榧を田中家に持ち寄って搾った。実は殻が入って2斗ぐらい、3軒で6斗ほどある。油は3軒で分けて1升5合から2升ぐらいあった。昭和30年ごろまで。		牛小屋で蚊除けにくすべた。	正月、みかん・餅・柿・榧を包んで水元へ供えた。榧は3粒必ずあった。重ね餅の横へ串柿・橙・榧の実を供えた。吉相のもんやという。			高野山の檀那寺の金剛三昧院に、新米・新茶などを持って行くときに榧も少し持って行った。祝い榧として、ほしい人にあげたりした。清水のほうの人がもらいにきた。	2022年9月26日
233	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	下湯川（多井）	（峰伸汎）			②道上家の榧。家から離れている。																2022年9月26日
234	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	下湯川（多井）	（峰伸汎）			②田中家の榧。家から離れている。																2022年9月26日
235	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	三田	（杉澤純次）		口絵64	①平石家の上。																2023年2月27日
236	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	三田	西岡實（昭和9年）	榧は植えるあほうに、切るあほう、という。碁盤を取ろうと思ったら1000年ほどたたないといけない。	5-61	②西岡家の榧。家の周辺。（家の背後の水田の横など。）	西岡家には4・5本あった。西岡家の榧はみんな実が長い榧だった（ヒダリマキガヤと考えられる）。田んぼの陰になるといって切った。家の背後の水田横には榧の株が残る。古い家には榧が1本か2本あった。	実が長いものをヒダリマキという。丸い実の榧はマルガヤという。長い実のほうがおいしかった。実にくっついている皮はヒダリマキのほうが取りやすかった。木の育ち方が違う。ヒダリマキは広がってまっすぐ伸びない。マルガヤはまっすぐ。	ヒダリマキは接ぎ木で増やしたと聞いた。父のほか、近所の明治生まれの人たちから聞いた。	秋口に実がなる。		実は毎年なったが、多い年、少ない年はあった。	渋抜きをした。土の上で灰と混ぜてころがしていた。灰は焚火でこしらえたものだった。	ほうらくで炒って食べた。食べすぎると鼻血が出るといった。油はてんぷらにした。実をすりこぎで擂りつぶして、味噌と野菜と和えた。	西岡家で油を搾った。紙漉きの搾る道具と同じようなもので搾った。親が搾っていた。菜種も椿も搾った。自家用に搾った。昭和28年の水害までだった。清水のおもてやでも搾っていた。		蚊除けに幹をくすべた。「蚊くすべ」といった。剪定した枝などをくすべた。	正月に、榧の実も供えた。	昭和10年代に伐採した榧から将棋盤を作った。			2023年2月27日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
237	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	三田	（西岡實）			中峰家の近く。																
238	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	沼谷	植野克己			①植野家の榧。家の入口。	１本あった。今はない。						灰で合わした。	炒って食べた。油はてんぷらにした。	どこかに頼んで搾って油にした。			正月に、餅と柿と榧を供えた。			榧の実を石でこすって穴をあけて、笛にして遊んだ。	2023年2月27日
239	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	沼谷	（植野克己）			中西家。	中西家の榧は今もある。沼谷には全部で５本ほど榧があった。															2023年2月27日
240	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	宮川（柳）	（杉澤純次）		口絵 65	①前田家の横。																2023年2月27日
241	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	宮川（春日尾）	（杉澤純次）		5-62	永尾家の榧。山のすそ。	３本現存。															2023年2月27日
242	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	宮川	杉澤純次			①家の背後。	２本あった。カヤとヒダリマキガヤか。	１本はまっすぐ。１本は下のほうから枝が出ていた。株から２つか３つに分かれていた。まっすぐ上に立ってなかった。実は長かった。珍しいという。長い実のほうがおいしかった。		10月15日の祭り前後に実が落ちた。				剥いて擂鉢で擂って、味噌を入れて、ゆがいた野菜を混ぜ込んだ。毛原(紀美野町)出身の祖母が作っていた。カヤカバといった。			虫除けにした。焚いたら虫がこないといった。				榧の木の下に蜜蜂の巣箱を置いていた。榧の実を笛にした。	2023年2月27日
243	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	宮川	（西岡實）			岡崎家。																
244	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	沼	（鶴田倫雄）			松田三郎家。	木は大きい。	実はバベ(ウバメガシ)のように小さい。														
245	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	沼	（鶴田倫雄、松田寿夫）		口絵 66	①片田家。																2022年12月19日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
246	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	沼（中番）	松田寿夫	植えるあほうに、切るあほう、と聞く。	口絵67、68	①松田家の榧。家の周辺。	大きな榧が1本。中に空洞がある。小さな榧が2本。	左巻きと右巻きがある。筋が右巻き、左巻きになっている。左巻きのほう、実が長いほうがおいしいという。松田家の大きな榧は実が丸い。					灰に混ぜて渋抜きをした。1週間ほどおいてから洗った。	炒って食べた。夜に会合があると、炒った榧を持ち寄って食べた。				正月に、餅を重ねて柑子か、みかんと榧を三宝へ載せる。榧・柑子・餅・干し柿を切って半紙に入れて包む。				2022年12月19日
247	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	沼（中番）	（鶴田倫雄、松田寿夫）			松田家。																
248	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	谷口三和子（昭和3年）		口絵69	①谷口家の榧。家の前。	1本。現在の根元にまだ1丈あるという。90年ほど前、屋敷を広げるために下の方を埋めた。						10日ほど灰につける。	実は食べた。油は食用にした。	二川（有田川町）に搾るところがあった。そこに持って行って搾ってもらった。1升瓶にいっぱいぐらいだった。			正月、三宝の端に榧の実を入れた。				2023年5月6日
							②谷口家の榧。家の上の方。	1本。	小さい木。実が大きくて丸みがある。														

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
249	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	橋本雅之（昭和7年）		5-63	①橋本家の榧。家の横。下は畑。	母屋の隣に2本ある。もっと高かったが、先端を切った。	橋本家の榧はオオガヤ。コガヤは処理が面倒。実生の榧はヘベガヤという。ヘベガヤは食べられない。木の皮のへりへもうひとつ皮ができる。それが「はしかい」。ヤマガラが冬の餌に実を隠す。そこから生えてくる。	畑の肥を吸っていたかもしれない。今は畑に肥をやらないので、実がならないのと違うか。	9月末から10月。風が吹くとよく落ちる。	1日おきぐらいに拾った。籠に入れるか、斗桶に入れて持ってきた。	かなりたくさんなった。	拾った実は谷へ持って行って洗う。草木灰で混ぜて、土間へあげて、筵を着せて2週間ぐらいおいて、また洗う。筵へ上げて、天日で乾かす。	和え物にした。木の実和え。味噌も入れた。榧の油は凍らない。食用にした。	吉田付近（旧金屋町）に持って行って油を搾ってもらった。矢で締めていた。のちに、清水のおもてやにも持って行った。おもてやは電動だった。茶色の皮をもうひとつ剥くとよく油が出た。	榧を食べると体に湧く回虫が降りるといった。油気があるからか。	蚊除けにくすべた。臭かった。	正月には、榧などの種があるものを供えた。	実生の榧で鮎釣るときのタモをした。			2023年1月19日
							山林。（橋本家の山という意味ではない。）	実生の榧がいっぱいあった。伐採した。															
250	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	（橋本雅之）			関口家。		100年ほど前、橋本家のオオガヤを接いだ。今もある。														2023年1月19日
251	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	（橋本雅之）			青石家。	伐採した。															
252	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	（鶴田倫雄）			堀岡家。	大きかった。伐採した。															
253	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	（鶴田倫雄）			西谷家。	3本。伐採した。															
254	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	（鶴田倫雄）			島崎家。																2023年1月19日
255	有田郡	八幡村→清水町→有田川町	楠本	鶴田倫雄（昭和13年）	榧の油は高野山の灯明に凍らんから持って行った。		（法福寺には榧はない。）		榧は山にはない。屋敷にある。						和え物にして食べた。胡麻の代わりに、ほうれん草にかけて食べた。			近所で蚊取り線香の代りに囲炉裏で焚いた。蚊くすべをした。いい匂いがした。			東大谷の菓子屋が榧の実を入れた奉天を作っていた。		2022年6月16日・12月19日、2023年1月19日・2月27日・5月6日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
256	有田郡	城山村→清水町→有田川町	境川	中尾義三（昭和11年）、中尾あや子			（中尾家には榧はない。）		実のなる榧とならない榧がある。実が長いのや丸いのがある。建畠家の榧は食べられる。食べられない榧もある。	山だと実を拾えないので、平地に植えていた。						父が榧の油を搾った。菜種がおもだった。実を蒸してから、矢で締めて搾った。水害後、搾る機械で搾ることもあった。							2023年1月19日
257	有田郡	城山村→清水町→有田川町	境川				建畠家の榧。														道の駅で榧の実を売っていた。		2023年1月19日
258	有田郡	城山村→清水町→有田川町	境川	（西岡實）			某家の下。	4・5本ある。															
259	有田郡	城山村→清水町→有田川町	日物川	柳隆次（昭和11年）		口絵70、5-64	（柳家には榧はなかった。）①親戚の神崎家の背後にある。	神崎家には2本ある。	榧は「はしかい」。榧はヤマガラの好物。			実は拾った。	一面榧の実だらけだった。	洗ってから2週間ほど灰にころがす。乾かないように、どろどろにまぶしておく。実を振って、からから音がするようになるまで乾かした。急に乾かすといけない。				牛小屋でくすべた。		鮎釣るときのタモにした。			2023年1月19日
260	有田郡	城山村→清水町→有田川町	東大谷（西出）	（新林隆）		5-65	①②脇坂家の榧。家の周辺。	家の前に大木が1本、家の背後に若い木が1本、さらに背後の山のすそに大木が1本。4.30m。															（清水町誌編さん委員会1995）2022年12月19日
261	有田郡	城山村→清水町→有田川町	東大谷（西出）	（新林啓作、新林隆）		5-66	①井上家の榧。家の前。	2本以上。家の前の木は木が曲がっている。実は細長い。ヒダリマキガヤか。															2022年12月19日
262	有田郡	城山村→清水町→有田川町	東大谷（西出）	（新林啓作、新林隆）			①松田家の榧。家の前。																2022年12月19日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地(分類番号)	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
263	有田郡	城山村→清水町→有田川町	東大谷（下出）	新林啓作（大正15年）、新林隆			（新林家には榧はない。）		榧はめったにない。山にはない。			井上家の榧を拾った(隆)。			炒って食べた。菓子屋の奉天を買って食べた。						東大谷の菓子屋が榧の実を入れた奉天を作って売っていた。その家は昭和２０年代に水害で東大谷に転居してきて、昭和後期まで菓子屋をしていた。		2022年12月19日
264	有田郡	五村→清水町→有田川町	北野川（上浦）	前康博			前家の榧。元の屋敷の近く(田の上)。	伐採した。						灰の中へ入れて合わせる。	炒って食べた。								2022年5月16日・7月27日
265	有田郡	五村→清水町→有田川町	北野川（上浦）	岩橋よし子(昭和7年)			（岩橋家には榧はない、出身の二沢にもないという）		実のなる木は何十年たった木でないとならん。家ごとにはない。					榧のある家では、木灰の中へ入れて渋抜きした。								夫の父は醤油を作った。醤油を作ったとき、榧の油を入れたら泡がおさまったと聞いた。瓶におさめるため、棒の先へ油をつけて入れたら泡がおさまる。	2022年7月27日
266	有田郡	五村→清水町→有田川町	北野川（上浦）	（上野保二、前康博）		口絵71	①田中家の榧。田中家の上。																2022年5月16日
267	有田郡	五村→清水町→有田川町	北野川（上浦）	上野保二（昭和6年）			①上野家の榧。家の周辺。		木が古くなってあまり実がならない。					あく抜きした。	炒って食べた。								（2021年12月4日）
268	有田郡	五村→清水町→有田川町	二沢	東本匡弘（昭和19年）																碁盤にした。			2022年6月16日
269	有田郡	五村→清水町→有田川町	中原				坂中家。	4.20m。															（清水町誌編さん委員会1995）
270	有田郡	五村→清水町→有田川町	中原			口絵72	道沿い（丹生神社より下流）。																2022年8月14日

番号	郡名	市町村名	集落名	話者	伝承	写真番号	木の立地（分類番号）	種類・樹形	呼称・認識	植栽・採取の工夫	実がなる時期	収穫作業	収穫量	実の処理	食べ方	搾油	薬用	蚊除け	儀礼	用材・道具	販売	その他	出典、調査年月日
271	有田郡	岩倉村→清水町→有田川町	粟生	大田貢（昭和13年）			（粟生には榧はない。）															榧の油はキンマの下へ滑るように使ったと聞いた。	2022年6月9日
272	有田郡	五西月村→金屋町→有田川町	生石（東番）	西尾善次（昭和11年）			①②⑤西尾家の榧。家の周辺。	家から下る道沿いに大きな榧が1本。家の周辺には若い木が複数生えている。	榧は2種類ある。渋がついている榧と、渋がないハクマイガヤというのがある。					灰と合すと思う。	椎や榧の実を拾っておやつに食べた。榧はあんまり記憶にない。								2022年11月14日
273	有田郡	五西月村→金屋町→有田川町	生石（前田番）	（西尾善次）		6-1	①新宅家の榧。家の下。		渋がないハクマイガヤ。														2022年11月14日
274	有田郡	五西月村→金屋町→有田川町	生石（中部番）	清水成子（昭和8年）			（実家の林家に榧はなかった。）④⑤金毘羅に上がるところに榧がある。									林家では、櫨の蝋を搾っていた。のちに、椿・油粕の油も搾ったが、榧は搾っていない。				昭和17・18年ごろに家を建てたとき、ダイワに榧を使った。父親は材木を扱っていた。			2022年12月2日
275	有田郡	石垣村→金屋町→有田川町	糸川	（山元晃）			石垣小学校糸川分校の入り口。																

※本表は原則的に話者ごとにまとめた。したがって、話者と榧の木の持ち主が一致しているわけではない。ただし、持ち主が不明、あるいは持ち主に聞き取りできなかった場合でも、榧の木の所在などを聞いた場合は立項した。
※榧の立地分類については、聞き取り情報のみで実際に確認できていないものについては表記していない。また、木のところまで立ち入らずに遠目に確認したものもあるため、分類が厳密でないものもある。
※話者の生年は昭和20年（1945）以前のみの記載とした。
※話者名に（　）がついているものは、情報提供者という意味である。
※調査年月日に（　）がついているものは電話で聞き取りをしたものである。
※樹高、幹周などの情報については、文献、もしくは山元晃氏、西浦史雄氏による計測・推定をもとにしている。（山元）、（西浦）はそれぞれ山元氏、西浦氏のご教示による。
※95・96・97と、116の日高地区は、江戸時代には同じく伊都郡四村荘日高村であった。現在では、かつらぎ町日高と、紀の川市上鞆渕（日高）に分かれている。
※269と270は同一のものである可能性がある。今回は確認できなかった。

表２　高野山麓における榧油の搾油状況

地名	家	時代	搾り機の形態	搾油の形態
橋本市賢堂	水落家	昭和 20 年代か		搾油商売か
橋本市清水	松岡家	昭和初期までか		
高野町東富貴	宝蔵院	昭和初期までか		
高野町下湯川	安井家	昭和中期まで	万力で締める搾油機	自家用
かつらぎ町山崎	久保家（油屋敷）	江戸時代か		高野山へ納める
かつらぎ町山崎	築野家	昭和 23 年ごろまで		自家用
かつらぎ町教良寺	前岡家（屋号：油屋）	明治中期まで		搾油商売（榧）
かつらぎ町下天野	北家	昭和中期まで	唐臼 ネジで回す搾油機	自家用
かつらぎ町新城	大野家		ネジで回す搾油機か	
かつらぎ町花園久木	朝本家	昭和 20 年代まで	唐臼 矢で締める搾油機→ジャッキで圧縮する搾油機	自家用、近所の依頼
紀の川市上鞆渕	庵上家	昭和 30 年代まで		自家用
紀の川市上鞆渕	尾上家	昭和 20 年代まで	長木締め	自家用
紀の川市名手市場	（油屋）	昭和 30 年代か		搾油商売
紀の川市粉河付近		昭和 20 年代か	近在の人を集めて人力で搾った	
紀の川市麻生津	（油屋）	昭和 30 年代か		搾油商売
紀の川市貴志川町丸栖	吉田家	昭和 30 年代か		搾油商売
紀美野町毛原上	集落共同	昭和 20 年代まで	矢で締める搾油機	自家用
紀美野町毛原宮	奥澤家	昭和 20 年代まで	ジャッキで圧縮する搾油機	自家用
紀美野町毛原宮	角岡家	昭和後期まで	電動搗き臼 矢で締める搾油機	周辺地域からの依頼
紀美野町毛原宮	国部家	昭和 30 年代まで	電動搗き臼か ジャッキで圧縮する機械か	周辺地域からの依頼
紀美野町毛原中	前田家	昭和初期まで		搾油商売（榧）
紀美野町小西	大家家	昭和中期まで	電動の搾油機	自家用
紀美野町毛原下	尾上家	昭和 40 年代まで	電動搗き臼 ジャッキで圧縮する機械	搾油商売
紀美野町毛原下	作嶋家	昭和 20 年代まで	ジャッキで圧縮する搾油機	自家用
紀美野町毛原下	田下家	昭和 30 年代前半ごろまで	電動の搾油機	自家用
紀美野町谷	上南家	昭和初期か		自家用か
紀美野町鎌滝	浦野家	昭和 30 年代まで	唐臼 矢で締める搾油機	自家用
紀美野町明添付近				
紀美野町箕六	中谷家	昭和初期まで	長木締め	自家用
紀美野町神野市場				搾油商売か
紀美野町西野	西山家			
紀美野町動木	坂口家	昭和 30 年代まで		搾油商売か
有田川町杉野原	上林家	昭和 20 年代まで	ジャッキで圧縮する搾油機	自家用
有田川町下湯川	大久保家	昭和 20 年代	ネジで回す搾油機	自家用
有田川町下湯川	田中家	昭和 30 年代初めまで	矢で締める搾油機	自家用
有田川町清水	おもてや	昭和 20 年代まで	電動の搾油機	搾油商売か
有田川町三田	西岡家	昭和 20 年代まで	ネジで回す搾油機	自家用
有田川町境川	中尾家	昭和 20 年代まで	矢で締める搾油機	自家用
有田川町二川	堀川家	昭和 20 年代まで		搾油商売か
有田川町吉田付近		昭和中期まで	矢で締める搾油機	搾油商売か